

紀要 55号

# 研 究 報 告 書

平成30年3月

尼崎市立教育総合センター

## 国語科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

### － 尼崎の地域素材をいかした教材開発を通して －

指導主事 松 本 隆 範

#### 【内容の要約】

平成28年度より、市内の各小学校から選任された教員が一堂に会し、国語科における主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現に向けた研究部会を立ち上げ、授業改善を推進している。平成29年度も昨年度に引き続き、専任講師としてプール学院大学教育学部准教授 今宮 信吾 氏を招聘し、講話・演習・交流等を通して、授業実践へとつなげていった。今年度は、「尼崎の地域素材をいかした教材開発を通して」を副題として、各部員が主体的に地域素材を掘り起こし、教材と対話しながら教材研究に努め、児童の主体性を引き出す単元的な学習の展開を目指した。単位によっては、社会科や理科、総合的な学習の時間とのつながりから、教科横断的なカリキュラム・マネジメントの観点での研鑽を深め、新学習指導要領、新教育課程の実施に向けて、より具体的な研究を行うことができた。

キーワード：地域素材をいかした教材開発、カリキュラム・マネジメント

- 1 はじめに……………
- 2 部会部員名……………
- 3 研究の内容……………
- 4 実践事例……………
  - (1) 実践事例1……………
  - (2) 実践事例2……………
- 5 「尼崎の教師力を発信する契機に」専任講師 プール学院大学 今宮 信吾……………
- 6 終わりに……………

## 1 はじめに

学び続ける教員は、「主体的・対話的で深い学び」という言葉を、日々、自分自身に向けて問い続けているであろう。教師としての主体性とは？対話の対象は？深い学びとは？与えられた教材を指導書通りに展開し、子どもたちを浅い学びへと導く教師などいない。

本部会の専任講師である今宮信吾氏は“授業を創る”ことについて、「授業というものは、子どもと教師が紡ぐ、制作物」であり「世界でそこだけでしか生まれない、創造物」であるとした上で、「若い先生方の研究授業に向かう姿勢を見ると、まずどこかに先行実践はないかという姿勢が強いように思います。教科書の指導書やインターネットなどで紹介されるマニュアルを求めがちです。」と述べている。<sup>\*1</sup>

また、二瓶弘行氏は「例えば、ここに一編の物語がある。確かに名作である。例えば、ここに一編の説明文がある。確かに名文である。しかし、これらがいくら名作・名文であろうと、ただ読むだけなら、これらは『優れた文章』にしかすぎない。私たち教師の役割は、これらの物語や説明文を『教材』として価値づけることにある。この文章を使って、どのような『言葉の力』を育むことができるか。そのために、どのような『言語活動』の一連の流れを組織するか。すなわち、『単元づくり』をいかに図るか。私たち教師が国語授業を構想するにあたって求められる力量とは、この『教材研究』と『単元づくり』にあると言っている。」と述べている。<sup>\*2</sup>

本研究は、プール学院大学准教授 今宮信吾氏の指導の下、41名の研究部員によって紡ぎ出された、地域素材の掘り起こしによる教材開発・教材研究からカリキュラム・マネジメントの観点による単元的な学習の展開に至るまでの、1年間の実践記録である。

## 2 部会部員名

各小学校から、部会の部員として推薦された教員

| 学校名  | 名 前    | 学校名  | 名 前   | 学校名  | 名 前    |
|------|--------|------|-------|------|--------|
| 明城   | 谷口 佳子  | わかば西 | 石崎 絵美 | 武庫南  | 立半 博満  |
| 難波   | 楠 直依   | 大島   | 武市 瑞代 | 武庫北  | 上田 篤   |
| 難波の梅 | 森 大祐   | 浜田   | 八重 優子 | 武庫東  | 東田 明子  |
| 竹谷   | 菅原 咲樹  | 立花   | 宇都 亨  | 武庫庄  | 小寺 修斗  |
| 下坂部  | 古田 智代  | 立花南  | 中村 智美 | 武庫の里 | 山本 郁恵  |
| 潮    | 森田 美紀  | 立花西  | 西村 純  | 園田   | 高木 千尋  |
| 長洲   | 笠原 清大  | 立花北  | 前田 智子 | 園田北  | 増田 里奈  |
| 清和   | 杉村 暖   | 名和   | 葛原 淳代 | 園和   | 林 誉子   |
| 杭瀬   | 荒木 裕亮  | 塚口   | 大平 茉優 | 園和北  | 藺 里奈   |
| 浦風   | 仲本 恵理  | 尼崎北  | 枝廣 直樹 | 園田東  | 堀内 みち子 |
| 金楽寺  | 森本 祥一  | 水堂   | 西尾 鮎子 | 上坂部  | 戒能 隆幸  |
| 浜    | 鳴瀬 達也  | 七松   | 四方 佑季 | 小園   | 上城 由衣  |
| 大庄   | 品田 雄一朗 | 武庫   | 山本 正貴 | 園田南  | 濱 聡美   |
| 成徳   | 桒田 小百合 | 武庫南  | 西川 達也 |      |        |

### 3 研究の内容

#### (1) 研究テーマ

国語科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

－ 尼崎の地域素材をいかした教材開発を通して －

#### (2) 研究テーマの設定理由

「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現に向けた授業改善を行う」と言いつつ、受け身の教員が増えているのではないか。今年度の研究部会の立ち上げに際して、専任講師である今宮先生から鋭い指摘をいただいた。尼崎市として授業を改善していくためには何を変えていかなければならないのか。教え方なのか。それとも教材そのものなのか。議論を深める中、尼崎市として国語科の「素材探し」（教材研究）、「料理作り」（授業改善）を、1年間を通してやっていくこととなった。尼崎の地域素材を教材化するためには、各部員が主体的に地域素材を掘り起こし、まずは教材と対話することから始めなければならない。また、児童の主体性を引き出すための単元構想を練らなければならない。そのためにも、上記の研究テーマを設定し、学年グループによる研究・交流を通して、尼崎市内の連携を図るとともに、児童・教師ともに国語科を通して、より社会との関わりの部分を深めていくことをねらいとした。

#### (3) 研究の流れ

| 回 | 実施日        | 実施内容                                           |
|---|------------|------------------------------------------------|
| 1 | 6月2日（金）    | 講話「国語科における主体的・対話的で深い学びとは」<br>演習「地域素材をいかした教材開発」 |
| 2 | 7月31日（月）午前 | 授業創り演習 レポート交流（1学期の成果と課題）                       |
| 3 | 7月31日（月）午後 | 授業創り演習 レポート交流（地域素材の教材化）                        |
| 4 | 7月26日（水）   | 講話 元京都女子大学教授 吉永 幸司 氏<br>「新学習指導要領における国語科教育の方向性」 |
| 5 | 8月29日（火）   | 講話「単元構想を創る」<br>学年グループによる単元計画・指導案の検討            |
| 6 | 2月14日（水）   | 公開授業① 2年「昔話を伝えよう」<br>立花南小学校 中村 智美 教諭           |
| 7 | 2月21日（水）   | 公開授業② 4年「尼崎市歌を作ろう」<br>立花小学校 宇都 亨 教諭            |
| 8 | 2月27日（火）   | 本年度のまとめ（成果と課題）<br>講話「本年度のまとめと今後の方向性」           |

① 第1回部会 平成29年6月2日（金）

第1回の部会では、今宮先生の講話「国語科における主体的・対話的で深い学びとは」の中で、新学習指導要領が目指すもの、地域素材をいかした教材開発の試みについて共通理解を図った。部会の流れは次の通りである。

1. 学習指導要領改訂の方向性
2. アクティブ・ラーニングについて
3. 新学習指導要領がめざすもの（演習）
4. 学力状況調査問題の分析（演習）
5. 伝統的な言語文化の指導について
6. 地域素材をいかした教材開発の試み



【第1回部会の様子】

部員のふり返り

- ・子どもがキラキラできる何かを考え、学びへとつながるように……。尼崎ならではの取り組みをぜひしたいと思いました。まずは地域にどっぷり入ること、つながることをします。
- ・教科書をなぞるのではなく、自分たちで教材（単元）をつくっていくということをまずは自分の学年でチャレンジしていこうと思います。
- ・今年度は「地域を題材にした教材の開発」ということで、今まで考えなかった視点で取り組んで、勉強できるのが楽しみです。
- ・これから向かっていく教育がどういうものなのか。どう指導し、どう学ばせていかないといけないのかを広めていきたい。
- ・国語科へのとらえ方、指導要領のとらえ方、勉強不足のことが多くありました。主体的・対話的・深い学びのそれぞれのつながり、よりくわしい目標の設定など、具体的にすすめて、考えていくことが大切だと感じました。
- ・現行の指導要領と、今後のものを比較することで、共通性を見出すことができました。しかし、マイナス面も表面化してきているため、児童にとって「何を」「どのように」「何のために」学ぶのか明確にする必要があると感じました。学校では指導の明確化を広めたいと思います。



【第1回部会の様子】

② 第2回部会 平成29年7月31日（月）午前10：30～

第2回の部会では、1学期に行った各自の実践の交流を学年グループで行った。特に実践を通して出された課題について、学年を超えて共有し合い、改善のための手立てを共通理解することができた。1年生の「は」「を」「へ」の指導で、話し言葉と書き言葉が繋がらないことについては「声に出しながら書くとよい」こと、3年生の語彙力を高めるためには「語彙力ノート（マイディクショナリー）の活用」など、今宮先生から具体的な助言をいただいた。



【第2回部会の様子】

③ 第3回部会 平成29年7月31日（月）午後1：30～

第3回の部会では、各自が持ち寄った教材化できそうな尼崎の地域素材の交流を行い、今宮先生に助言いただいた。教材化できそうな尼崎の地域素材としては、「尼崎の民話」や「尼崎市歌」などがあり、学年ごとのグループで地域素材の教材研究を進め、研究テーマ・単元名の設定、単元計画の作成へと活動を深めていった。



【第3回部会の様子】



④ 第4回部会 平成29年7月26日(水)

講話「新学習指導要領における国語科教育の方向性」

講師 元京都女子大学教授 吉永 幸司 氏

1. 新学習指導要領について

(1) 小学校国語科の目標

(2) 新旧学習指導要領を比べる

2. 授業改善の視点

(1) めあての例

- ・「登場人物の気持ちを考えましょう。」
- ・「登場人物の気持ちが変わったのはどの言葉でわかりますか。」
- ・「登場人物の変化や気持ちを表す文章を写しましょう。述語を比べましょう。」
- ・「場面ごとに題をつけましょう。」

(2) 主体的に学習を進めるために言語活動

「どうして」という問いを持つ 「そうか」という納得ができる

(3) 対話的に学習を進める

「同じ」を検討する 「違い」から考えを交流する

(4) 小集団の生かし方

- ・二人で話す…二人だからできること
- ・三人で話す…三人だからできること
- ・四人で話す…四人だからできること

(5) 音読のさせ方と評価

(6) 詩の指導



【第4回部会の様子】

3. 部員のふり回り

- ・今後の国語教育を考える上でとても大切なことを教えていただきました。校内でも今日の話、学んだことを広めていきたいと思います。吉永先生の書籍を通してではなく、直接お話を聞くことで学ぶことが多くありました。
- ・語彙力をつけることが今後の子どもたちの未来につながると改めて感じました。日々の生活から子どもたちが豊かになる国語教育を考えていきたいです。

⑤ 第5回部会 平成29年8月29日（火）

第5回の部会では、「単元構想を創る」をテーマに、地域素材を教材化するためには、どのような手立てが必要かについて議論を深めていった。4年グループでは、学校間交流を視野に入れ、それぞれの校区の紹介リーフレット作りを通して情報を発信する活動を計画した。その際、教科書「アップとルーズで伝える」を切り口に、「対比して述べる説明の工夫」「写真と対応した文章」をいかすことについて議論した。



【第5回部会の様子】

学年グループごとに決定した研究テーマ・単元名

| 学年グループ | 研究テーマ・単元名                    | 今宮先生からの助言              |
|--------|------------------------------|------------------------|
| 1年     | 学校かるたを作ろう                    | ジグソー学習                 |
| 2年     | 尼崎の民話をつたえよう                  | 音読に適するものと<br>適さないものの選択 |
| 3年     | つたえよう、ぼくたち・わたしたちの<br>〇〇小学校   | アドバイスの視点               |
| 4年A    | 学校しょうかいリーフレットを作ろう            | ビデオレター・評価              |
| 4年B    | 尼崎市歌を作ろう                     | グループ内での個人評価は           |
| 5年     | そら豆の物語を書き、しょうかいしよう           | 冊子→交流 発信先は？            |
| 6年A    | 意見を聞き合って考えを深め、<br>意見文を書こう    | 意見文か投書か                |
| 6年B    | やる気・ゆう気・あまが好き<br>尼崎のみ力を発信しよう | 提案文                    |



⑥ 第6回、第7回は代表者による公開授業を行った。詳細は4 実践事例にて後述する。

⑦ 第8回部会 平成30年2月27日（火）

第8回は今年度の「国語科教育アクティブ・ラーニング部会」のまとめの会である。始めに各学年グループによる授業実践の交流を行った。

- ・思い切って地域に協力を頼み、児童を公園に取材に連れて行けたことは、私たち教師にとっても児童にとってもよかった。子ども達が「授業はあたえられるもの」という考えから「時には自分で作り出すもの」へと変わったことが良かった。国語だけでなく主体的に動くようになった。
- ・今までは国語だけの学びになっていたような気がしますが、教科間でのつながり、日々の生活とのつながり、学年とのつながりなどを意識するようになりました。子どもの発言の中にも、前の単元とつなげて考えた発言や生活とつなげた発言があったり、以前の学びが生きていると感じることがあったりと、私も子どももつながりの中で学んでいることを実感することができたのが何よりの成果かなと思います。
- ・今回、グループの学校と協力してリーフレットを交換し、読み合えたので、子ども達の意欲も高まり、他の書く教材とは違った表情で活動していたのが良かったです。「またやりたい！」との声が多かったので、こういう機会があると国語力の向上にもつながりそうです。

教師自身や児童、授業創りに対する考え等の変容について多くの部員が自覚していた。一方で、下記のような課題に直面した部員の声も拾うことができた。

- ・今回、尼崎の地域素材を生かした授業作りをしてみて、カリキュラムの中に入れ込むのは難しいと感じた。しかし、子ども達の反応や取り組む姿勢を見ていると、学年によっては入れてもよいのではないかと感じた。
- ・国語の学習にどう組み込んでいくのか、授業時数の少ない中でどうやって行うのが課題だと思います。そのようなことを他の学校の先生方と話すことができ、とても勉強になりました。
- ・「尼崎」といわれても自分の生活圏内しか意識がないため、尼崎ならではの良さにまで取り組むことが難しかった。国語だけでなく、社会等他教科も横断して授業に取り組んでいく必要があると感じた。



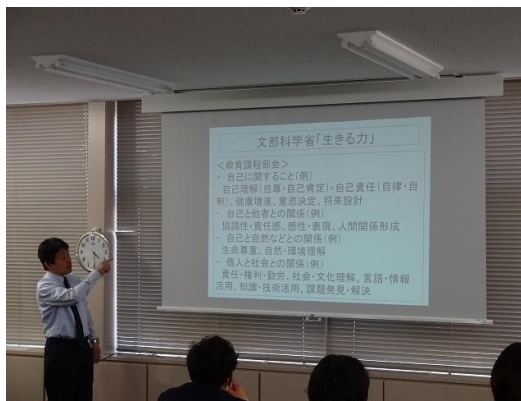
【第8回部会の様子】

交流の後、今宮先生から「本年度のまとめと今後の方向性」について講話いただいた。

- ・授業研究の主張点
  1. 地域教材の掘り起こし（教科書を活用しながら）
  2. 児童の主体性を引き出す（単元的な学習展開）
  3. 尼崎市内の連携を図る
- ・この1年間の研究は、自信を持って社会へと発信することができる。
- ・部員の実践事例集を分類して整理し、近く発表したいと考えている。
- ・評価について
  1. 目標と規準（ルーブリック）
    - 目標＝事前に想定する
    - 規準＝授業の最中に生かす→評価セッションの実現
  2. めあて ふりかえり
    - 学びの自覚化＝深い学びの判断
- ・授業論としての要素
  1. つけたい力の明確化 カリキュラム・マネジメント
  2. そのための活動の意味づけ 活動の目的・意味を子どもと共有
  3. 教師の働き どんな時に、どんな働きかけを 判断できる教師に
  4. 思考の活性化と定着 対話の中身を見つめる（深い学びのために）

講話を終えて、各部員には今後の抱負を記述してもらった。

- ・教科を横断する学びや、国語で培った力を他教科にいかすことは、今後、単元を組んでいくにあたって取り組んでいきたい研究です。子どもたちが心から「話したい、読みたい、聞きたい、書きたい」と思えるような授業をつくるためどのようにすればよいのか考えていきたいです。
- ・カリキュラム・マネジメントに力を入れていきたいです。今年も社・総・国のリンク、算・国のリンク、理・国のリンクを図りましたが、最終的にどのように落とせばよいのかわかりませんでした。（例）「ありの行列」を読んだ後、理科でやっている磁石の実験を、問い→実験→結果→考察の報告文の型でまとめた。でも、その後どのようにつなげればよかったか・・・。



【第8回部会の様子】

## 4 実践事例

### (1) 実践事例① 立花南小学校 第2学年

#### 1. 実践の概要

(1) 単元名 「昔話をつたえよう」

教材名 「三まいのおふだ」(光村図書)

「金衆寺のマメダ」(「尼崎の民話」 三好美佐子 作)

#### (2) 単元目標

①自分が感じた物語や言葉のおもしろさが伝わるように、音読劇をすることができる。

【関心・意欲・態度】

②自分の考えを進んで話し、友だちの考えを最後まで聞くことができる。

【話すこと・聞くこと ア】

③場面の様子について、登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読み、声の出し方などを工夫して音読をすることができる。

【読むこと ア】

#### (3) 評価基準

①自分が感じた物語や言葉のおもしろさが伝わるように、音読劇をしようとしている。

【関心・意欲・態度】

②自分の思いや考えを相手に伝わるようにわかりやすく話そうとしている。友だちの考えに興味をもって聞こうとしている。

【話すこと・聞くこと ア】

③人物の様子や気持ちを想像し、物語の様子が伝わるように工夫して音読している。

【読むこと ア】

#### (4) 単元の指導計画(全8時間)

| 次 | 時      | 学習活動                                                              | 指導上の留意点(○評価の観点)                                                                            |
|---|--------|-------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 一 | 1      | ①「三まいのおふだ」を聞き、感想を話し合う。<br>②学習課題を設定し、学習計画を立てる。<br>『1年生に昔話を伝える会を開く』 | ①昔話の独特な語りの口調に親しむ。<br><br>②学習に見通しをもたせる。<br>○読み聞かせを聞き、人物の行動を中心に場面の様子を想像している。<br>【関心・意欲・態度】   |
| 二 | 2<br>3 | ①「金衆寺のマメダ」を読み、物語の大まかな内容をつかむ。<br><br>②音読劇をするために、だれの会話文であるかに注意しながら  | ①登場人物・場所・話のあらすじ等について、児童に考えさせて確認する。<br>○物語のあらすじを読み取れている。<br>【読むこと ア】<br>②登場人物の会話を区別して音読させる。 |

|   |             |                                                            |                                                                                                                                                   |
|---|-------------|------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|   |             | 全文を読む。                                                     | ○登場人物になりきって読むことができる。<br>【読むこと ア】                                                                                                                  |
|   | 4           | マメダがおさとにわるさした場面<br>①読み方の工夫を考え、班で練習をする。<br><br>②全体で音読発表をする。 | ①登場人物の様子や気持ちが表れるように、声の大小、間の取り方等に気をつけさせる。<br>○本文の言葉や文を根拠にして、考えることができる。【読むこと ア】<br>②友だちの発表のいいところを交流させる。<br>○全体で聞き合い、感想を発表し合って語り方を工夫する。【話すこと・聞くこと ア】 |
|   | 5<br>本<br>時 | まめたとおさとが出会った場面<br>①読み方の工夫を考え、班で練習をする。<br><br>②全体で音読発表をする。  | ①登場人物の様子や気持ちが表れるように、声の大小、間の取り方等に気をつけさせる。<br>○本文の言葉や文を根拠にして、考えることができる。【読むこと ア】<br>②友だちの発表のいいところを交流させる。<br>○全体で聞き合い、感想を発表し合って語り方を工夫する。【話すこと・聞くこと ア】 |
|   | 6           | おさとの手紙を読んだ場面<br>①読み方の工夫を考え、班で練習をする。<br><br>②全体で音読発表をする。    | ①登場人物の様子や気持ちが表れるように、声の大小、間の取り方等に気をつけさせる。<br>○本文の言葉や文を根拠にして、考えることができる。【読むこと ア】<br>②友だちの発表のいいところを交流させる。<br>○全体で聞き合い、感想を発表し合って語り方を工夫する。【話すこと・聞くこと ア】 |
| 三 | 7           | ①伝えたい場面を決めて、音読劇の練習をする。                                     | ①音読のよさや工夫を学び合ったこれまでの学習をいかして練習させる。<br>○意欲的に音読に取り組むことができる。<br>【関心・意欲・態度】                                                                            |
|   | 8           | ①1年生に昔話を伝える会を開く。                                           | ①聞き手に伝わるように意識させる。<br>○言葉のまとまりやリズムなどに気をつけて音読劇をすることができる。<br>【関心・意欲・態度】                                                                              |

(5) 本時の学習（5／8時間）

ア 目標

- ・自分で考えた読み方の工夫に気をつけて班で音読劇の練習を行い、互いの音読の方法について感想を伝え合うことができる。

イ 展開

| 学習活動                      | ○教師の支援<br>(■発問・予想される児童の反応)                                                                                                       | 評価                                        |
|---------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| 1. 本時の中心となる場面を音読する。       |                                                                                                                                  |                                           |
| 2. 本時のめあてを確認する。           |                                                                                                                                  |                                           |
| 読み方のくふうを考えて、はんでれんしゅうをしよう。 |                                                                                                                                  |                                           |
| 3. 読み方の工夫を考える。            | ○どのように読むと相手に伝わりやすいか考えさせる。<br>■人物の様子や声をどのように音読すればいいか考えよう。                                                                         | ○本文の言葉や文を根拠にして、考えることができる。                 |
| 4. 班で練習をする。               | ・「ま、ま、まめた」のところはドキドキしているから少し小さい声で読む。<br>・「きのう、戸口に…」はホッとしたから優しい感じで読もう。<br>・「きのう、戸口に…」は下を向いて聞いているマメダをのぞきこんで読みたい。                    | ○読み方の工夫に気をつけて、班で協力して音読劇の練習を行うことができる。      |
| 5 全体で音読発表をする。             | ○発表を終えるごとに良かったところを話し合わせる。<br>■聞く人は「読み方の工夫」と「動き」について注意して聞こう。<br>・「あんた、だれや」をマメダの目を見て言っているのが良かったです。<br>・「こっくり」のところであなづいているのが良かったです。 | ○友だちの音読の工夫についてよいところを発表することができる。           |
| 6. 役割読みをする。               | ○役割読みをさせる。                                                                                                                       | ○友だちの発表を聞き、よさに気づき、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。 |
| 7. 本時の学習をふり返る。            | ○学習を通して、思ったことやわかったことをふり返らせる。                                                                                                     |                                           |



## 2. 実践の考察

### (1)教材について

児童にとって身近な地名や方言が含まれる尼崎の昔話を取り入れることで、教科書「3まいのおふだ」との比較から、昔話の特徴について共通点や相違点を見出させたいと考えた。教科書の文章を切り口にしながら、児童にとって身近な尼崎の民話を題材にすることで、興味・関心がわき、「なぜマメダっていうの?」「金衆寺ってどこ?」「昔話ってね…」と、主体的に昔話としての共通点を見出していける教材であった。

### (2)活用について

音読劇とは? 音読一声で伝える 劇—身体表現を加えて 音読劇の条件をあらかじめ決めておくことが必要である。「これとこれはしましょうね。(条件)」というように、学び方を教えることも大切である。そうすることによって評価の観点が定まるので、各学校版「音読劇とは」を決めておかなければならない。

### (3)深い学びについて

教師＝指導者＋評価者である。机間指導の中で評価情報を集め、深い学びが成立していることのエビデンスを集めなければならない。その上で学習計画を子どもたちと立てることも大切である。単元のゴールを設定し、つけ加えたり消したりしながら、子どもたちともに授業を作っていくことで、子どもたち自身の学びを自覚化させることができる。



【立花南小学校 公開授業の様子】

## 3. 今後の課題

本時のめあては「読み方のくふうを考えて、はんでれんしゅうしよう」であったが、めあての設定は活動だけではなく、つけたい力、気づかせたいことを語尾に持ってくる必要がある。「音読劇をして～の工夫に気をつけよう」などと設定すると、ふり返りの視点が明確化され、ふり返りの内容の質がより向上するであろう。

地域素材の活用については、児童の主体性を引き出すことに効果的であったが、教科書を切り口にして活用していく必要があるので、教科書とのつながりという点では、単元構想が難しかった。特に時間配分についての課題が多く挙げられたが、今宮先生から教科横断型の学習（カリキュラム・マネジメント）について、指導・助言いただき、次の実践事例②において、国語科と社会科の教科横断型学習の展開について提案する。

## (2) 実践事例② 立花小学校 4 年

### 1. 実践の概要

(1) 単元名 「尼崎市歌を作ろう」

教材名 「尼崎市歌」 土井晩翠・作詞 東京音楽学校・作曲 (1940)

### (2) 単元目標

- ①尼崎市歌に関心を持ち，尼崎の良さを調べようとしたり，尼崎の良さを伝えるために七五調で歌詞を作ろうとしたりすることができる。
- ②伝えたいことを明確にして七五調の歌詞を作ったり，書いたものを読み合い意見を述べ合ったりすることができる。
- ③歌詞を作るための表現の仕方を理解することができる。

### (3) 評価規準

| 関心・意欲・態度                                       | 書く能力                                                    | 言語についての知識・理解・技能                                                                     |
|------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| ・尼崎市歌に関心を持ち，進んで調べ学習に取り組み，尼崎の良さを伝える歌詞を作ろうとしている。 | ・伝えたい尼崎の良さを明確にして，観点に沿って歌詞を作ったり，作ったものを読み合い意見を述べ合ったりしている。 | ・テーマに沿った具体的な事例を挙げること，伝えたいメッセージが明確であること，七五調のリズムや体言止め等の表現技法を使うことなど，歌詞を作るための観点を理解している。 |

### (4) 単元計画 (全 8 時間 社会科 3/16 時間・国語科 5 時間)

本単元は，国語科と社会科の教科横断的な学習（カリキュラム・マネジメント）を展開する。

| 国語科 (全 5 時間)                                                               | 社会科 (全 16 時間)                                                                                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ①尼崎市歌を知り，学習課題，学習計画を立てる。<br>②歌詞を分析する。<br>③尼崎市の特徴を調べる。<br>④歌詞を作る。<br>⑤詩を届ける。 | ①尼崎市は，兵庫県のどこにある？尼崎はどんなところ？ (3 時間)<br>②兵庫県の土地，交通と主な都市，産業について知る。 (3 時間)<br>③豊かな自然を生かす淡路島について調べる (5 時間)<br>④伝統的な工業が盛んな篠山市について調べる (5 時間) |

| 時                    | 学習活動                                                                                                                    | 教師の支援                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 評価規準と評価方法                                                                                                                                                                                                                   |
|----------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1<br>～<br>2<br>(国語科) | <p>①尼崎市歌を作るという課題を設定し、学習計画を立てる。</p> <p>②歌詞の特徴をつかむ。</p>                                                                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習のゴール(市役所、地域研究資料館に届ける)を示し、課題解決のために必要なことを考えさせることで、児童自ら学習計画を立てられるようにする。</li> <li>・校歌と市歌を比較させる。</li> <li>・テーマごとに歌詞が作られていること、伝えたいメッセージが含まれていること、具体的な事例が挙げられていること、七五調や体言止め等の表現技法が使われていることなどに気付かせ、歌詞を作る際の観点としてまとめる。</li> <li>・校歌の他にも童謡・唱歌など、身近な歌に七五調の歌詞があることに気付かせる。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・尼崎市歌に関心を持ち、尼崎市歌の歌詞を作るための見通しを立てようとしている。【関心】(学習の様子や記述内容から)</li> <li>・伝えたいメッセージが明確であること、具体的な事例があること、七五調のリズムや体言止め等の表現技法が使われていることなど、歌詞を作るための観点があることを理解している。【言語】(学習の様子や記述内容から)</li> </ul> |
| 3<br>～<br>5<br>(社会科) | <p>③尼崎の特徴を整理する。</p> <p>④⑤尼崎の良さを調べる。</p>                                                                                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・3年生の学習を振り返り、地理、施設、工業など、テーマに分けて整理する。</li> <li>・調べ方を指導する。</li> <li>・模造紙は教室に掲示し、いつでも書き加えられるようにしておく。</li> </ul>                                                                                                                                                               | (社会科としての評価を行う)                                                                                                                                                                                                              |
| 6<br>～<br>8<br>(国語)  | <p>⑥⑦歌詞を作る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループに分かれる。</li> <li>・伝えたいメッセージ、使いたいキーワード(具体的な事例)を考える。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の興味関心に応じて、テーマを選ばせる。</li> <li>・1グループ4人までにする。</li> <li>・ボーン図にまとめさせる。</li> </ul>                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                             |

|  |                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                   |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・キーワードをつなげて、歌詞を作る。<br/>(ここから本時)</li> <li>・歌詞を読み合い、交流する。</li> </ul> <p>⑧歌詞を完成させ、学習をふり返る。</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホワイトボードを用意しておく。</li> <li>・違うグループの歌詞を見て気付いたこと（良さ、改善点）をワークシートに書かせる。</li> <li>・ワークシートをもとに、ペアで伝えさせる。</li> <li>・それぞれが聞いたアドバイスを共有させてから、歌詞を見直させる。</li> </ul> <p>・観点に沿って歌詞を作ることができたか、話し合うことが歌詞を作るうえで効果的だったか、尼崎の良さに気付くことができたかの3点を中心にふり返らせる。</p> <p>・作った歌詞は、尼崎市ひと咲きまち咲き担当局，地域研究資料館に届ける。</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞を読み合い，観点に沿って評価したことを基に意見を述べ合っている。【書く】（学習の様子や記述内容から）</li> </ul> <p>・尼崎市歌を作る学習を振り返り，成果と課題をまとめようとしている【関心】（学習の様子や記述内容から）</p> |
|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



【立花小学校 公開授業の様子】

(5) 本時の学習（本時 7/8 時間）

①目標

- ・作った歌詞を読み合い，観点に沿って歌詞を評価したことを基に，意見を述べ合うことができる。

②準備物

- ・ホワイトボード，ワークシート (PMI シート)

| 児童の学習活動             | 教師の指導・支援                                                                                                                                                                               | 評価規準と評価の方法                                                                                               |
|---------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. めあてとふりかえりの観点を作る。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭学習で歌詞を考えさせておく。</li> <li>・グループ毎に座らせる。</li> <li>・本時の学習内容から，具体的な評価基準を考えさせる。</li> </ul>                                                          |                                                                                                          |
| 2. グループで歌詞を作る。      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞作りの観点を掲示しておく。</li> </ul>                                                                                                                     |                                                                                                          |
| 3. 歌詞を読み合い，意見を述べ合う。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・まず，ワークシートに評価を書かせる。</li> <li>・話したり聞いたりすることに責任を持たせるため，ペアで伝えさせる。</li> <li>・ペアで伝えさせた後，同じテーマのグループ内で情報を共有させる。</li> <li>・時間があれば，歌詞を作り直させる。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞を読み合い，観点に沿って評価したことをもとに意見を述べ合っている。【書く】(学習の様子や記述内容から)</li> </ul> |
| 4. 本時の学習をふり返る。      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の初めに共有した評価基準にそってふり返らせる。</li> <li>・ふり返りはノートに書かせる。</li> </ul>                                                                                  |                                                                                                          |

(6) 本時の観点別達成目標と評価手法

| A 基準                                                                     | B 基準                                                                                               | C 基準（支援・手立て）                                                               |
|--------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・B基準に加え，具体的な提案ができています。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞を読んで見つけた良い点や改善点（評価）をワークシートに書き，それを基に意見を述べています。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞作りの観点に沿って歌詞を見るよう指導する。</li> </ul> |

## 2. 実践の考察

戦前に作られた「尼崎市歌」を掘り起こし、現代の自分たちが生活している尼崎との比較を通して、尼崎の良さを伝える七五調の歌詞を作る単元計画であった。

めあてやふり返りの観点を子どもたちと決定していく授業スタイルを提示し、「子どもの学びの自覚化」についての理解を深めることができた。めあてとふり返りの設定の仕方について、本実践を通して今後も発信していきたいと考える。

本時では、思考ツール（PMI シート）が効果的に活用されており、著作権のない思考ツールは、今後もどんどん活用していきたい。ボーン図：理由をつける PMI シート：評価をする など、思考ツールの活用法についての理解を深めることができた。

実践①での課題であった、教科横断的な学習展開について、本実践では国語科と社会科を関連づけた単元計画を作成した。次期学習指導要領を見据えた、カリキュラム・マネジメントの視点からも、地域素材を掘り起こして教材化することは、授業改善のための一つの要素であったと考える。



【立花小学校 公開授業 事後研究会の様子】

## 3. 今後の課題

PMI シートの活用について、本時ではP（プラス）から書こうとする児童がほとんどであったが、M（マイナス）から書こうという指示があってもよかった。なぜなら、M（マイナス）は決して相手をけなすことではなく、よりよいものへと変容させるための視点となるからである。また、個人の歌詞を持ち寄って、グループで歌詞を作ることの難しさも見られた。個人の学習において作った歌詞にはその子どもの思い入れがあり、個人評価の対象となる。共同で作ることで、個々の歌詞が消えてしまうことに対して、何かしらの手立てが必要であろう。

本部会として、児童のどのような学びを期待するのか。本時のように、めあてやふり返りの観点を子どもたちと作り上げる授業にするためにも、内容と方法の両方のルーブリックが必要である。

教師の役割は①指導者として②評価者としての二つの側面がある。本時のように、児童の作品を評価する際には、「あの子はAやな、あの子はBやな」というように、教師集団による評価セッションの実現が必要不可欠である。そのためにもルーブリックの作成が重要になってくるのである。



## 5 尼崎の教師力を発信する契機に

プール学院大学 今宮 信吾

### (1) 3年目を終えて

2018年度から、道徳が教科になり、外国語活動と外国語科の先行実施も始まります。この講座も3年を終え、4年目を迎えることとなります。今までの総括として、「アクティブ・ラーニング」としての留意点を「主体的・対話的で深い学び」に絞ってまとめたいと思います。

#### ① 主体的な学び

「学びに向かう力」を存分に発揮しながら、受動的でない学びを子どもたちに経験させていきたいと思います。ここには、教育の永遠の課題でもある、学びに対する興味・関心・意欲をどのように高めるのかという問題が秘められています。最初から興味・関心・意欲の高い子どもは、ほんのわずかです。私たち教師の醍醐味は、後ろ向きになりそうな子どもをどうその気にさせて、前を向かせるのかということです。始めのうちはやらされている、どこかで方向を変えることができるようにサポートしてあげたいと思います。一人ひとりの興味・関心・意欲には差があるため、かなり個別な対応も必要になってくるでしょうが、教師のみとりの精度を高めながら学ばせたいと思います。読書百遍と同じように子ども百編で臨みましょう。

#### ② 対話的な学び

対話する時には、どうしても人との対話を考えがちですが、それだけが対話ではありません。「ひと・もの・こと」を対象にしながら、「自己との対話」「他者との対話」「対象との対話」というように対話の幅も広く捉える方がいいでしょう。文章を読みながら自分を見つめ直すような対話、話し合いで相手の意見に耳を傾け、その共通点や相違点に気づき、学びを深めるような対話、文学作品に書かれている情景描写を味わい、自分でも同じような表現をしてみたいと文章を綴る対話など、より広がりや深みのある対話を創り出したいと思います。対話のことをダイアログということもこのことと関係してきます。そうした考えを教師が持つことによって、学び・教える方法が変わってくると思います。

#### ③ 深い学び

深いということは、学びがどんな状態のことを言うのでしょうか。はっきりと言えることは、「浅い学びではない。」ということです。数量的にどのくらいが浅いのかなどと限定できませんが、質的な高まりを期待していると言うことは言えると思います。

そこで、評価の問題が関係してくるのですが、目標と評価規準と判断基準であるルーブリックをうまく使って、目の前の子どもたちの学びの現状を質的に捉えて高めていくことが求められます。ここでも主体的な学びで述べたことと同じように、子ども百編で、教師の評価の眼を肥やすことが一番の近道となります。「今日のあの子の学びは深まっていたね。」「あの子はもう少しこんなことができればより深まっていたのに。」と言うように、子どもたちの学ぶ姿を材料にした事後研究会を積み重ねることが大切になるでしょう。

### (2) 授業を共に創る楽しみ

「アクティブ・ラーニング」という概念が提示された結果、児童中心の学びが展開され、知識注入ではない、社会構成的な学びが保証されるようになりました。それによっ

て、教師の役割・働きにも変化が見られるようになって来ました。「教える」ということよりも「育む」という要素が強まり、自然と教師が見守るという姿が多く見られるようになってきています。

しかし、そこで気をつけたいことは、ただ見守っているだけになっていないのかということです。指導者としての役割を放棄してしまえば、学びがどこに向かっているのかという指針を示してあげることができなくなってしまう。学ぶ途中において、迷うことも大切な経験ですが、出口の見えない迷いは、学ぶ喜びや自信を失わせることとなります。「別の方法でやってみたら」という学び方の提示や「こんな考えもあるよ」という論点の提示など、学ぶ過程において、方向性や位置を確認する働きかけは必要だと思います。その上で、評価者として「ここまでたどり着いている」「この学びは素晴らしい」という価値づけや学ぼうとする意欲を高める働きも大事になって来ます。

教師が学びについての見通しを持ち、学ぶ喜びを共に感じながら、時には寄り添い、時には引っ張りながら、授業を共に創る喜びを見つけないといけないと思います。

### (3) 学校としての組織力を高める(カリキュラム・マネジメント)

かつての学校は、個人商店のように自分が担当している場所が繁盛すればいいという風潮もあったように思います。それぞれの学級、授業がいいものになることによって全体が高まって行けばいいという考え方も強かったように思います。教師が腕を磨くことは必要なことですが、名人のような授業をする人が重宝され、その授業をモデルとして自分たちも高まって行こうとしていたようにも思えます。

しかし、今は、個人商店のように教師個人が高まっていくだけではなく、その商店街全体が繁盛し、活気にあふれていなければ、児童・保護者や地域の信頼が得られないようになっていきます。言い換えると学級や授業が、組織として働き、その組織を支えるための授業力、教師力を高め合うことが必要となってきているように思います。学校チームという言い方もされるようになってきています。

そこで新しく言われるようになって来たのが、「カリキュラム・マネジメント」という概念です。

「カリキュラム」は元々、「クレレ」ということばに由来するようで、轍(わだち)の意味です。馬車の轍を辿っていくと、目的地へ着くことができるという意味で「カリキュラム」は使われるようになって来ました。学校で言えば、時間割、指導計画、教育課程など、経験に基づいて計画された教育の方針のことをいうことが多いです。

では、「マネジメント」とはどういうことでしょうか。辞書的には「1 経営などの管理をすること。2 経営者。管理者。トップマネジメント」と言うように、管理することに力点が置かれています。しかし、日々変化する子どもたちの成長を見守る学校では、調整、修正、改善などと言うように状況に応じた対応のことを指す方がいいでしょう。そのためにも、今まで述べてきた子ども百編と言う教師の子どもを見る目を研ぎ澄ます必要があると思います。

### (4) 世界に一つだけの授業(新教育課程実施に向けて)

歌の歌詞ではありませんが、目の前にいる子どもたちと一緒に授業という世界に一つしかない芸術作品を創作しているそんな気持ちで、来るべき新教育課程に立ち向かってほしいと思います。文部科学省の動向や他校の様子なども視野に入れながら、子どもたちの課

題を見つけるところから出発してほしいと思います。そうした「Research」を着実に  
行い、それに基づいて「Plan」を立てて、実行「Do」し、実践した授業を「Check」しなが  
ら、次の授業に向けての「Action」を立てて改善していくような授業創りのサイクルを生  
み出してほしいと思います。

私たち教師が、日々学ぶ楽しさを追究し、「明日も学校へ行きたい」と思えることが、  
子どもたちを「アクティブ」にする一番の近道です。尼崎の先生方にはそれを学ぶ機会  
が、教育総合センターの企画の元、たくさん与えられています。是非とも尼崎の教師力を  
発信しながら子どもたちのために邁進してほしいと思います。微力ながら私も一緒に、楽  
しみ、お手伝いさせていただきます。

(2018. 3. 5)

## 6 おわりに

本研究紀要を作成している最中、研究部員の先生から授業実践後の報告書が届いた。  
「授業をして本当に良かったです。一から自分の授業を見直す機会となりました。(中  
略)あの後、子どもたちと歌詞を仕上げ、できた歌詞を市役所と地域研究資料館に送りま  
した。驚くことに、尼崎市役所から、歌詞を市のHP か facebook に掲載していただけると  
の連絡がありました。また、地域研究資料館からは資料館の所蔵資料として受け入れてく  
ださると連絡を受けました。子どもたちは、自分たちが作った歌詞がこのような形で多く  
の人の目に触れることとなり、とても喜んでいます。」子どもたちとともに教材と向き合  
い、単元的な学習展開に取り組んだ結果、達成感に満ちあふれたクラスの様子が目に浮か  
んでくる。

また、地域へ出向き、地域の方々をゲストティーチャーとして迎え、地域にまつわる民  
話を読み聞かせたグループ、学校紹介リーフレットを作り、学校間での交流を行ったグル  
ープなど、今まで踏み出せなかった一歩、地域に向けた一歩、他校との交流へ向けた一  
歩、そして社会との関わりへ向けた一歩を、それぞれが踏み出している。地域素材を掘り  
起こし、教材開発に努めることで、教材に主体的に関わり、教材と対話し、そして子ども  
たちとともに深い学びへと向かう、一つの学びの道筋が提起できたのではないだろうか。

一方で、今宮先生の提案する、ループリックの作成や評価セッションの実現に向けて、  
教師が一人で思考を巡らすのではなく、チームによる協同的な学びの推進が今後も求めら  
れるであろう。不断の授業改善に向けて、学び続ける教員どうしのネットワークを大切に  
しながら、尼崎市として胸を張って誇れるような授業改善、授業実践を継続して行ってい  
きたい。

### 【参考資料及び文献】

\* 1 今宮 信吾 「羅針盤を持って進む」教育 PRO ERP 教育研究所

2015 年 2 月

\* 2 二瓶 弘行 最高の「言葉の力」を育む国語科単元づくり 東洋館出版社

2016 年 8 月

## 「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び） で創る算数科の授業を目指して」

指導主事 相 方 伸 二

### 【内容の要約】

本研究部会では、算数科における「授業改善」を図り、「アクティブ・ラーニング」（主体的・対話的で深い学び）で創る授業を構築していく上で、以下のような実践に取り組む。

○部会での学びを通して、目標とする授業の様相や子どもの姿を明確にしていく。

- ・専任講師による継続した指導をもとに、自分の授業の問題点を自覚するとともに、それらを日々の算数授業における授業改善に役立てる。
- ・専任講師により示された「子どもの声や問いに常に寄り添って、問いが連続するような授業を展開すること」を授業変革の第一歩とする。

○教師自身もアクティブに学びを得られるよう参加型の研修を設定する。

- ・教材を研究する力、教材提示や指導技術等の実践的な授業力を身につける。
- ・「授業を観る力」、「子どもを観る力」を鍛え、「授業を創る力」に直結させる。
- ・各自が事前作成課題を持ち寄り、授業実践交流を行う。

○代表者による公開授業を年間2回設定する。

キーワード： 4つのズレ、問いを引き出す、問いが連続する授業展開

- 1 はじめに……………
- 2 研究について……………
- 3 研究経過について……………
- 4 研究部員による実践報告および考察……………
  - (1) 実践1【1年生】(園和小学校 亀岡 優子)  
自由に自分の想いを出せる場づくりの工夫……………
  - (2) 実践2【4年生】(武庫東小学校 吉向 良太)  
自ら考える子どもを育てる指導の工夫……………
  - (3) 実践3【6年生】(水堂小学校 春名 祥吾)  
子どもの思考が自然と動き出す教材の工夫……………
  - (4) 実践4【2年生】(武庫小学校 山本 正貴)  
子どものわくわく感が生まれる かけ算指導の工夫……………
- 5 専任講師による研究の総括  
子どもの思考を価値付ける(関西大学初等部 尾崎 正彦)……………
- 6 おわりに……………

## 1 はじめに

来年度より学習指導要領改訂に伴う「移行期間」を迎える。今回の改訂では、「深い学び」の鍵となるものとして、「見方・考え方」が挙げられており、『「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という、各教科等の学びの中で鍛えられた「見方・考え方」を働かせながら、世の中の様々な物事を理解し思考し、よりよい社会や自らの人生を創り出していく。』と示されている。

具体的には、この「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ることが明記されている。

今から80年前の1937年（昭和12年）に刊行された吉野 源三郎 氏の「君たちはどう生きるか」を漫画化した書籍が昨夏に発行されると、瞬く間に200万部を突破し、それに伴い原作も50万部を突破するという異例の大ヒットとなっている。まさに時を越えて、吉野氏の「君たちはどう生きるか」という人生への「問い」が、200万人を超える読者に大きな「思考」の渦を創りだしている。

この作品は、主人公である中学2年生のコペル君が親戚の叔父さんとの対話を通して、「自分は何を大切にし、どう生きていけばよいか」という「問い」と向き合う姿が描かれており、中には、「ものの見方について」という章もある。また、「心をうごかされたことから出発してその意味をごまかさずに考える」、「僕たち人間は、自分で自分を決定する力をもっている」など生きる道筋を照らす言葉であふれている。

そして、今年度、基調講演の講師としてお迎えした筑波大学附属小学校 山本 良和 氏（全国算数授業研究会全国常任理事）が『子どもたちが自ら「問い」を見出し、自分で「決める」、そして自分で「決め直す」という行為に着目して子どもたちを捉えていくことが「深い学び」を実現する上で重要である』と語られていることにも通ずる示唆であると考えます。

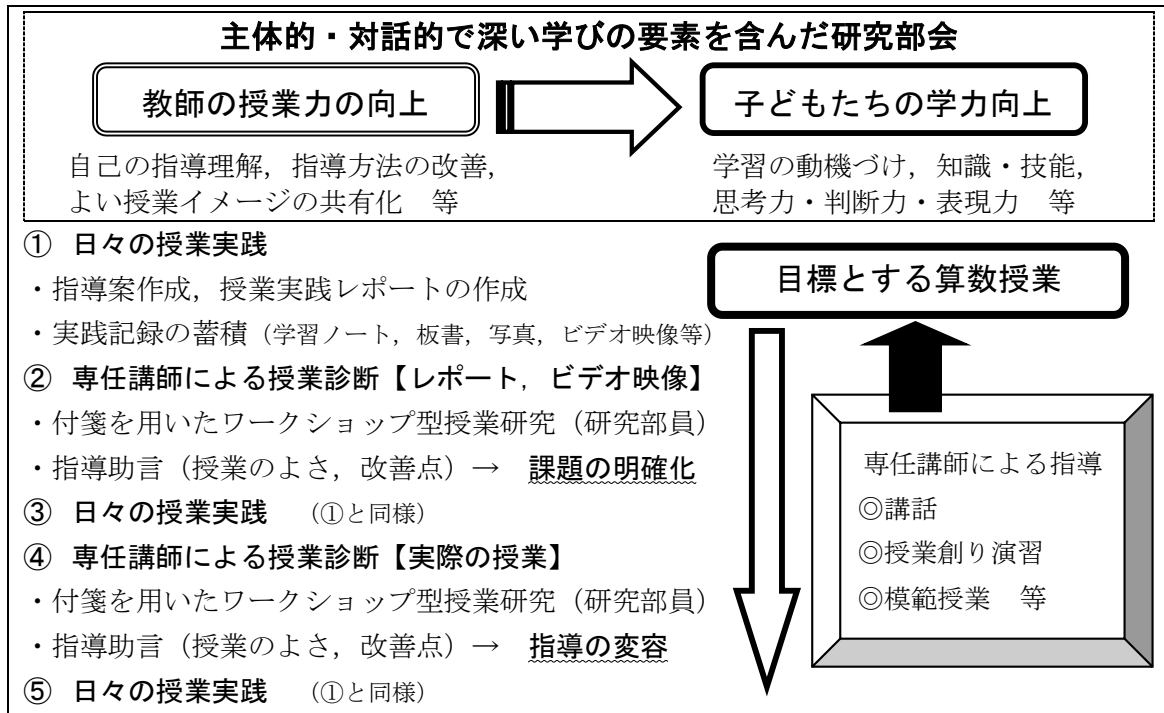
尼崎市教育委員会では、小学校における2020年（平成32年度）の全面実施に向けて、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と尼崎の子どもたちの実態に適した学習・指導方法の改善、そして、それらの改善した内容を市内へ普及させることを目的として、昨年度より「アクティブ・ラーニング学習モデル研究事業」を実施している。

本研究部会は、本市において2014年（平成26年度）より継続的な指導をいただいている関西大学初等部 尾崎 正彦 氏（全国算数授業研究会全国常任理事）を専任講師として迎え、尼崎市内全41校から推薦された43名の教員で構成している。

専任講師の尾崎氏が昨年度の研究総括として寄せた『子どもの思いに寄り添う姿勢をこれからも大切にして、日々の授業を「授業スキルを鍛える場」として意識することが大切である。子どもの思いを大切にする授業展開を継続していくと、やがては子どもの思いが教師の思いを超えていく。そんな授業創りをめざして、今後も教師としての授業スキルを高めてもらいたい。』との指針をもとに、本研究部会では「授業改善」に焦点をあて、『アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）で創る算数科の授業』について研究を進めることとした。

## 2 研究について

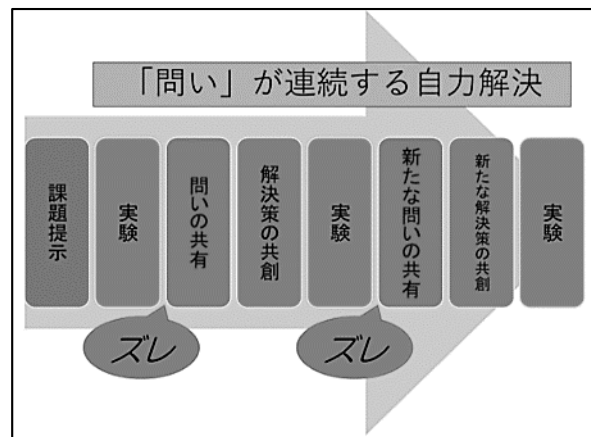
### (1) 小学校算数科教育アクティブ・ラーニング部会の構想



### (2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の方向性

専任講師の関西大学初等部 尾崎 正彦氏より授業を変革する第一歩として示されたのが，子どもの声や問いに常に寄り添って，問いが連続する授業を展開することであつた。

そして，右図の「問い」が連続する授業展開プランについて，授業創り演習や尾崎先生の具体的な授業実践を通して提示いただいた。（ただし，あくまで一例であり，形式的指導に当てはめるものではない。）



特に，次の三点を意識して授業実践を行ってきた。

- ① 導入場面など授業のどこかに「友だちの考えとのズレ」「予想とのズレ」「感覚とのズレ」「既習事項とのズレ」をしかけることで，子どもの「問い」を引き出すこと
- ② 「だったら」「例えば」「たまたまじゃないの」「絶対に」「もし…だったら」「でもさあ」「やっぱり」など授業のなかで生まれる子どもの価値あるつぶやきを教師自身がキャッチし，そのつぶやきを価値づけたり，学級全体に読み解かせたりするなど共有化を図ること
- ③ 教師が親切に解説しすぎず，子どもの「問い」を中心に据えた授業を展開すること

さらに，部会においては，授業力の向上を図る上で，次の三点が効果的であると考える。

#### (ア) 授業創り演習を設定

例えば，6年生「対称」の授業の導入について，まずは個人で検討した上でグループ



交流，そして各グループの代表による模擬授業を行った。最後に，専任講師の授業実践が子どもの姿とともに具体的に提示された。このような「自分ならどう実践するか？」を思考，プランニングする場面を必ず設定することで，日々の授業実践に直結させる仕掛けとなった。

(イ) 担当学年による少人数グループを構成（１０グループ） １グループ４～５名

年間を通じて，学校を越えた担当学年によるグループを編成しており，所属の学校は異なるが，同じ尼崎市の子どもたち，同じ学年の子どもたちという共通点をもった先生方が集い日々の算数の授業創りについて刺激し合えるコミュニティとなった。

(ウ) 事前作成課題をもとに交流する場の設定

部会では，必ず「事前作成課題」を持ち寄ることとした。ある程度の負荷がより学びを充実させるものとなった。

- ・各自が公開授業を想定して作成した指導案をもとにプレゼン交流をする。
- ・自分が本時の授業を実施することを想定し，「どんなふうに展開したいか」等について指導略案（本時案）にまとめたものを持ち寄り，代表者による公開授業（年間２本）を参観する。
- ・算数授業実践レポートをもとにプレゼン交流をする。

年間８回の部会での『学び』と毎日の『授業実践』が直結し，往還的な関係性を保ち続けられるような教師自身が学びを継続できる実践的なサイクルにより，授業改善を図ってきたところである。

### (３) 小学校算数科教育アクティブ・ラーニング部会 部員

|    | 学校名     | 氏名     | 学年  |
|----|---------|--------|-----|
| 1  | 明城小学校   | 葛原 稔久  | 4 年 |
| 2  | 難波小学校   | 浦井 政高  | 5 年 |
| 3  | 難波の梅小学校 | 中尾 武史  | 1 年 |
| 4  | 竹谷小学校   | 西浦 一樹  | 1 年 |
| 5  | 下坂部小学校  | 望月 康一  | 6 年 |
| 6  | 潮小学校    | 川中 啓   | 6 年 |
| 7  | 長洲小学校   | 佐藤 由佳  | 4 年 |
| 8  | 清和小学校   | 川端 千尋  | 2 年 |
| 9  | 杭瀬小学校   | 下村 一貴  | 1 年 |
| 10 | 浦風小学校   | 福田 晃大  | 6 年 |
| 11 | 金楽寺小学校  | 丸橋 弘和  | 3 年 |
| 12 | 浜小学校    | 山田 慎哉  | 4 年 |
| 13 | 大庄小学校   | 田村 和香子 | 4 年 |
| 14 | 成文小学校   | 田所 明子  | 1 年 |
| 15 | 成徳小学校   | 伊藤 雄司  | 新学習 |
| 16 | わかば西小学校 | 安部 裕子  | 4 年 |
| 17 | 大島小学校   | 井上 慧   | 5 年 |
| 18 | 浜田小学校   | 渡部 真広  | 6 年 |
| 19 | 立花小学校   | 渡邊 由香  | 4 年 |
| 20 | 立花南小学校  | 濱口 明依  | 5 年 |
| 21 | 立花西小学校  | 小野 裕未  | 6 年 |
| 22 | 立花北小学校  | 荒井 直樹  | 4 年 |

|    | 学校名     | 氏名     | 学年   |
|----|---------|--------|------|
| 23 | 名和小学校   | 西川 千裕  | 2 年  |
| 24 | 塚口小学校   | 谷垣 諒   | 4 年  |
| 25 | 尼崎北小学校  | 今井 泰子  | 新学習  |
| 26 | 水堂小学校   | 春名 祥吾  | 6 年  |
| 27 | 七松小学校   | 関井 康人  | 1 年  |
| 28 | 武庫小学校   | 山本 正貴  | 2 年  |
| 29 | 武庫小学校   | 増田 慶子  | 4 年  |
| 30 | 武庫南小学校  | 木口 範彦  | 特別支援 |
| 31 | 武庫南小学校  | 池淵 正樹  | 3 年  |
| 32 | 武庫北小学校  | 高山 睦   | 1 年  |
| 33 | 武庫東小学校  | 吉向 良太  | 4 年  |
| 34 | 武庫庄小学校  | 山本 有恒  | 6 年  |
| 35 | 武庫の里小学校 | 中尾 絵梨奈 | 1 年  |
| 36 | 園田小学校   | 安部 美佳  | 新学習  |
| 37 | 園田北小学校  | 前川 亮治  | 5 年  |
| 38 | 園和小学校   | 犬持 卓也  | 3 年  |
| 39 | 園和小学校   | 亀岡 優子  | 1 年  |
| 40 | 園和北小学校  | 中野 佑   | 5 年  |
| 41 | 上坂部小学校  | 村上 沙織  | 6 年  |
| 42 | 小園小学校   | 芝 朋来   | 3 年  |
| 43 | 園田南小学校  | 小西 崇久  | 6 年  |

(4) 小学校算数科教育アクティブ・ラーニング部会 年間の取り組み

| 回 | 実施日              | 研修内容 等                                                                                                           |
|---|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 7月7日(金)          | 講話:「算数科で創る主体的・対話的で深い学び」<br>授業創り演習:6年生「対称」の授業プラン                                                                  |
| 2 | 8月1日(火)          | 講話:「算数科で創る主体的・対話的で深い学び」<br>授業創り演習:6年生「比とその利用」の授業プラン<br>指導案演習①:各自が作成した指導案提案, 質疑<br>指導案演習②:各学年グループで代表授業を決定(10グループ) |
| 3 | 8月22日(火)         | 基調講話:「全員参加の算数授業づくり」<br>講師:筑波大学附属小学校 教諭 山本 良和 氏                                                                   |
| 4 | 8月24日(木)<br>【午前】 | 授業映像を使った研究<br>武庫小学校 山本 正貴 教諭 2年「水口d1をはかろう」<br>研究協議, 指導助言                                                         |
| 5 | 8月24日(木)<br>【午後】 | 学年等のグループによる指導案交流, プレゼン協議<br>各グループ代表プレゼン発表(10グループ)→代表授業者2名選出                                                      |
| 6 | 12月19日(火)        | 4~6年 授業者代表者による公開授業①<br>水堂小学校 春名 祥吾 教諭 6年「順序よく整理して調べよう」<br>研究協議, 指導助言                                             |
| 7 | 2月6日(火)          | 1~3年 授業者代表者による公開授業②<br>園和小学校 亀岡 優子 教諭 1年「おおきいかず」<br>研究協議, 指導助言                                                   |
| 8 | 2月20日(火)         | 学年等のグループによる授業実践レポート交流(グループ→全体)<br>指導助言:『数学的な考え方』のよさを自覚する授業創り                                                     |

### 3 研究経過について

(1) 第1回 平成29年7月7日(金)教育総合センター601・602研修室

講話・演習「算数科で創る主体的・対話的で深い学び」

講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏

1. 主体的・対話的で深い学びって?

○目標の3つの柱(2020年版学習指導要領告示)

①知識及び技能が習得されるようにすること

②思考力, 判断力, 表現力等を育成すること

③学びに向かう力, 人間性等を涵養すること

○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた

授業改善



[専任講師の授業実践を通して]

各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら, 知識を相互に関連付けてより深く理解したり, 情報を精査して考えを形成したり, 問題を見いだして解決策を考えたり, 思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること

①主体的な学び→問題を見いだす(問い)

②対話的な学び→話したい・聞きたい場面設定 ×形式的対話

③深い学び→一般化や新しい場面の創造 ×発展問題

2. 主体的になる仕掛けはありますか？ → 主体的な学びを引き出す仕掛けが「問い」

○先哲の言葉より「算数授業は導入で8割決まる」

「材料7部に腕3部」

①形式指導では思考力は深まらない  
算数で鍛える思考力

帰納的な考え方, 類推的な考え方,  
演繹的な考え方, 一般的な考え方,  
算数的読解力, 再現力

②「たい」を引き出す授業構成を  
→ ズレを授業場面に位置付ける

友だちの考えとのズレ, 予想とのズレ, 感覚とのズレ, 既習事項とのズレ

③「問い」の連続が授業を変える

3. 授業創り演習

○表現力&要約力UP トレーニング…15秒で自己紹介, 45秒でクラス紹介

○6年生「対称」導入場面の授業プランについて教科書をもとに考えよう。

個人→グループ検討→代表による模擬授業→尾崎先生の授業実践を通して

4. 子どもが使う言葉を共有化し価値づけよう！

○価値ある子どもの声や姿などを授業の舞台に載せ, クラス全体で共有・発展させていくこと

5. 次回に持ち寄る課題

○公開授業の単元を決める

○公開授業の略案を持参 (A4版1枚)

6. 研究部員の振り返り

- 子どもたちが自ら問題を見いだそうとするための仕掛けを考えることが, より深い学びにつながるのだとわかりました。現段階での自分の授業では, そのような仕掛けが足りないと感じるので, 本研修を通して今後力をつけていきたいと思います。
- 子どもが思わず考えてみたくなるような授業展開のヒントをたくさん教えていただき, 勉強になりました。意図的に考えや予想のズレが生じるように仕組むことが大切だと思いました。今日学んだことを実践できるよう努力していきたいと思います。



[担当学年グループでの授業創り演習]

## (2) 第2回 平成29年8月1日(火)教育総合センター601・602研修室

講話・演習「算数科で創る主体的・対話的で深い学び」

講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏

1. 先哲の言葉より

「本当に学ぶべきなのは, 問題とどう取り組むか, どういう戦略を立てるべきかということである。」

2. 6年生「比とその利用」の場面をどう構成しますか？



[専任講師による講話]

個人検討→グループ検討→全体交流  
(全グループ発表…模擬授業 等)  
尾崎先生の授業実践を通して

### 3. 指導案演習 その1

#### ①指導案提案

… 各自が事前に作成してきた課題

#### ②質疑 (グループ内で)

同意点 (青付箋), 疑問点 (赤付箋)

次の提案者が司会

→同意できる点とその根拠や代案を示す  
ことも大切な教師の授業技量

### 4. 指導案演習 その2

#### ①各学年グループで代表授業を選出

#### ②各代表授業者プレゼン→本代表授業2本選出…次回8/24に実施

### 5. 次回に持ち寄る課題

同学年の代表授業と同じ場面の授業略案作成 (他グループも可)

A4版1枚以内 (裏表可), 参加者分印刷

### 6. 研究部員の振り返り

- 同じ単元の導入でも各グループによって違った導入を考えていたので、とても勉強になりました。導入場面では、子どもが「解きたい!」「なぜ?」と思えるようなしかけが必要だと思いました。

□普段、教科書の流れ通りに授業をしており、自分のアイデアをだすなど「考える」「工夫する」といった大切な活動がおろそかになっていたことに気づかされました。一つの単元を複数の者で研究、指導案づくりをしていくことは、とても勉強になり、価値があると感じました。



[グループ代表者による模擬授業]

## (3) 第3回 平成29年8月22日(火) 教育総合センター隣接 学生会館

講話 「全員参加の算数授業づくり」

講師 筑波大学附属小学校 教諭 山本 良和 氏

### 1. 算数授業のとらえ直し

指導内容のとらえに関する教師の思い込み

指導方法に対する教師の固定化したとらえ

算数的活動の曖昧な解釈 (狭義のとらえ)

→算数に対する教師の意識改革

→授業に対する教師の意識改革

### 2. 授業構成の見直し

一般的な算数授業 (1時間毎の細切れで連続性がない)

本時のめあて → まとめ 終息 「めあて」に対する答え

毎時間の授業の連続性を子どもが意識する

そのためには、授業の終わり方は発展的思考 (拡張・深化) を促す形となる。



[基調講演として講師招聘]

問題提示 → 初期の問いの意識化 → 問いの整理 → 問いの明確化  
→ 問いの解決 → 発展的な問いの意識化（活用型習得）

### 3. 全員参加は子どもの学びを「揃える」ことから始まる

○授業の導入段階の子どもを揃える

教科書教材をそのまま与えたら子どもの学びは揃わない！

○自己決定する場の設定

これならわかる、

この数（形）ならわかる、

これはありえない…等

→判断力の育成、自分の意識化、

他との違いの意識化

○「お客さん」をつくらない

→活動量の確保

○解釈する（読む、想像する）

→「わからない」を明確に自覚させる

→「わかりたい」「知りたい」を引き出す

○「学び合い」を実現するためには、まず「教え合い」ができること

→安心感、信頼感、「わからない」が言える、「教えて」が言える（ばかにされない）、

「わからない」子の気持ちがわかる教師、仲間

○算数は笑顔で学ぶもの→わくわく感、ドキドキ感

○算数を学ぶと、子どもは笑顔になるもの →達成感、成就感、見える

○「笑顔」は算数の評価基準



〔部員を含め尼崎市教員167名が受講〕

### 4. 研究部員の振り返り

- ☐ 授業の導入部分で、教師自身が「しかけ」と「しこみ」をする必要があると思いました。子どもが「わかりたい」「知りたい」と思うと、自然と「話し出す」「手をあげる」「話している人の方を見る」など子どもが主体的に取り組むということがわかりました。教師は、子どもから学ぶ存在だということを常に意識して子どもと関わっていきたいです。
- ☐ これからの授業の中で「決める」、「決め直す」、「出力させる」、この活動を大切にしていきたいと思います。
- ☐ 「授業したい！」「子どもたちにもやらせてみたい！」という気持ちにさせられました。今日のように自然と笑顔になれるような授業をつくっていききたいと感じました。

## （４） 第４・５回 平成２９年８月２４日（木）教育総合センター６０１・６０２研修室

講話・演習「算数科で創る主体的・対話的で深い学び」

講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏

### 1. 山中 伸弥 先生（京都大学 i P S 細胞研究所所長・教授）の講演より

i P S 細胞研究所のチーム力

「学生や仲間に恵まれたことが受賞につながった」

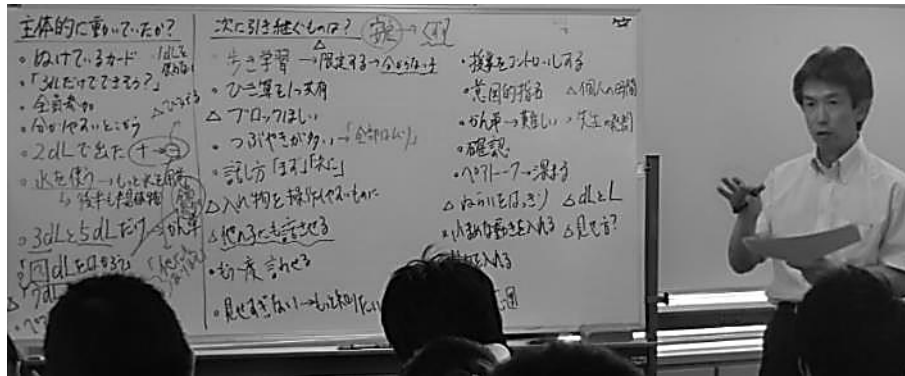
「ノーベル賞受賞の自分の力は１％」

## 2. 山本先生の授業を分析しよう（個人→グループ交流→全体交流）

第2学年「水口d1をはかろう」→のこり1, 4, 7d1でもはかれるかな？

（授業者 武庫小学校 山本 正貴 教諭）

|                                                                                                                                                     |                                                              |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| <p>視点①：子どもは主体的に動いていたか<br/>→子どもが動いた瞬間はどこか？<br/>→動いた瞬間を引き出すために有効な働きかけは何か？</p> <p>視点②：次の公開授業に引き継ぐものは何か<br/>→同じ手立てで試すことは何か？<br/>→改善した手立てで提案することは何か？</p> | <p>青付箋…よい手立て<br/>自分も使いたい</p> <p>赤付箋…課題</p> <p>黄付箋…改善策，代案</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|



〔各グループからだされた成果・課題・代案等をもとに専任講師による指導助言〕

## 3. 指導案交流，プレゼン協議

○同学年の代表授業と同じ場面の授業略案を各自で作成の上，持参（A4版1枚以内）

○各グループの代表者が模擬授業でプレゼンするための，グループ内での最終検討

模擬授業で使用するフラッシュカードや教材の作成 等

## 4. 各グループ模擬授業でプレゼン発表（10グループ）→代表授業者2名選出

○模擬授業，使用する教材（具体物）を提示 等

○1～3年代表授業者 園和小学校 亀岡 優子 先生 1年「おおきいかず」

4～6年代表授業者 水堂小学校 春名 祥吾 先生 6年「順序よく整理して調べよう」



〔担当学年グループでの指導案交流〕



〔グループ代表者による模擬授業でプレゼン発表〕

## 5. 次回の課題

○代表授業と同じ場面の指導略案作成（どちらかの代表授業）

○A4版1枚以内（裏表可），参加者分を印刷

## 6. 研究部員の振り返り

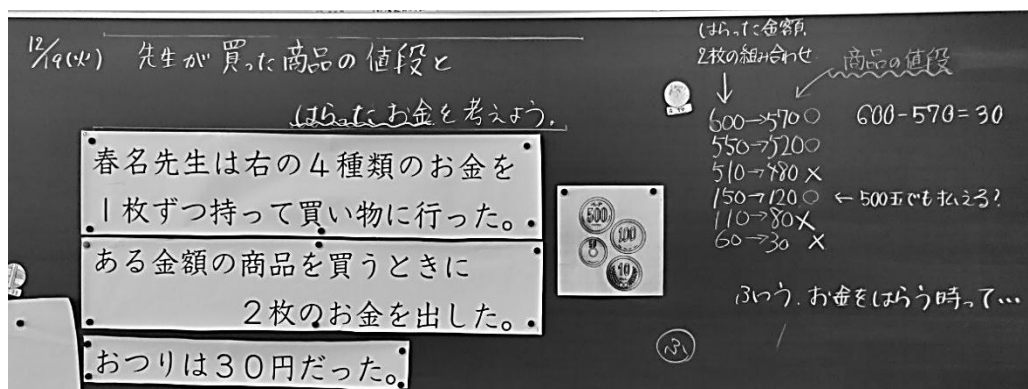
- グループで検討した指導案も4人で考えることで、自分では思いつかないアイデアがでて、よりよいものになったと思います。みんなで一つのものを練る大切さも実感できました。
- 様々な切り口や考えがあり、おもしろかったです。自分ならどのような意図をもって、子どもたちを自由にさせ、授業をコントロールしていこうか、2学期の授業へ向けての意欲につながりました。
- 指導案をこれだけたくさん手に入れることができたり、短い時間ではあるが、模擬授業をたくさん見られたりすることは、とても有意義で勉強になります。
- 尾崎先生に教えていただいたことは、日々の授業の考え方を変えていく大きなヒントとして勉強させていただいています。このことは、少しずつですが、自分の力にし、また自分の学校で広めてみたいと思います。今回考えた指導略案をもう少し練り直して校内で紹介できる授業にしたいと思います。
- 昨年度の部会で学習したことを今年度の学級で少しずつ実践してきました。授業記録を残すために、できるだけ算数の板書を写真に残すようにしています。

## (5) 第6回 平成29年12月19日(火) 水堂小学校

### 1. 公開授業 第6学年 算数科 「順序よく整理して調べよう」

『春名先生が買った商品の値段と払ったお金の組み合わせを考えよう。』

指導者 尼崎市立水堂小学校 春名 祥吾 教諭



【本時の板書（研究協議会において本時の学習履歴が振り返られるよう拡大提示する）】

### 2. 公開授業についての研究協議会

(ア) 受講者による研究協議（付箋を用いて、個人→グループ→全体の順で）

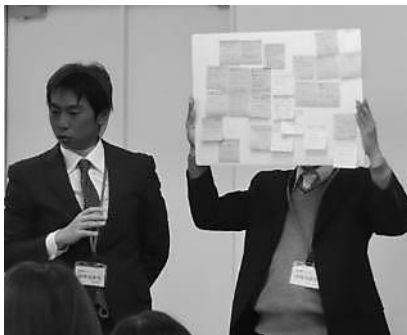
|                                                                    |                      |
|--------------------------------------------------------------------|----------------------|
| 視点①：子どもは主体的に動いていたか<br>→子どもが動いた瞬間はどこか？<br>→動いた瞬間を引き出すために有効な働きかけは何か？ | 青付箋…よい手立て<br>自分も使いたい |
| 視点②：次の公開授業に引き継ぐものは何か<br>→同じ手立てで試すことは何か？<br>→改善した手立てで提案することは何か？     | 赤付箋…課題<br>黄付箋…改善策，代案 |

※自分が本時の授業を実施することを想定し、「どんなふうに展開したいか」等について指導略案（本時案）にまとめたものを持ち寄っています。

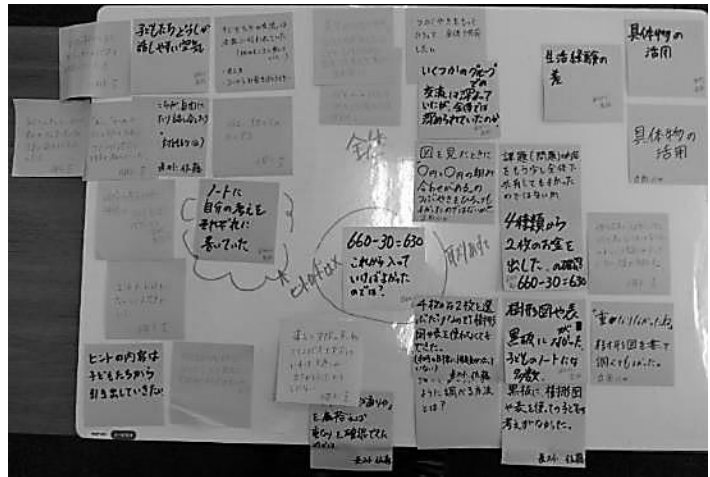




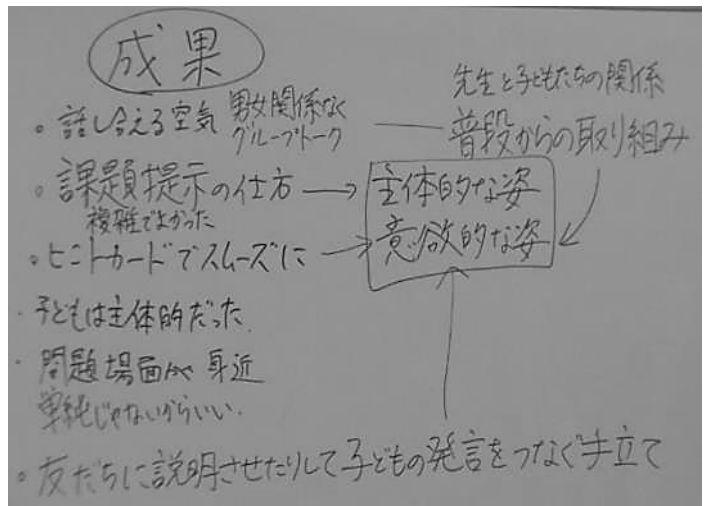
〔グループで研究協議〕



〔グループ代表者による発表〕



〔付箋やホワイトボードを用いて成果や課題を明確化する〕



〔部員が各グループからだされた成果・課題・代案等をまとめる〕

(イ) 指導助言 講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏

#### 【この授業のよさ】

- 生活に直結する場面設定
- 既習を生かせそうで生かせない設定
- 問題設定の演技力
- 小まめに次の手だてを用意している
- 自由に呟ける空気感がある
- グループ学習が効果的に展開されている
- 焦点化してから任せたら違う展開では
- 正解を知った時の驚き  
→予想とのズレ、素直さ、  
学びへの集中力の高さ

#### 【この授業の課題】

- 今日やりたいことはなに？
- 答えは1つがいいのでは
- 問いはあったのか
- ヒントカードは必要？→困りを共有する
- 問題文理解に時間がかかり過ぎ→例示する
- 後半は教師が強引に展開している
- 「もう少し絞れない」を多用→買い物体験
- 指示が曖昧→相談タイムが焦点化できない
- まとめの内容はこれでよいのか  
→深い学びへ

#### 【尾崎先生の授業実践より】

「順序と組み合わせ」の導入場面を通して

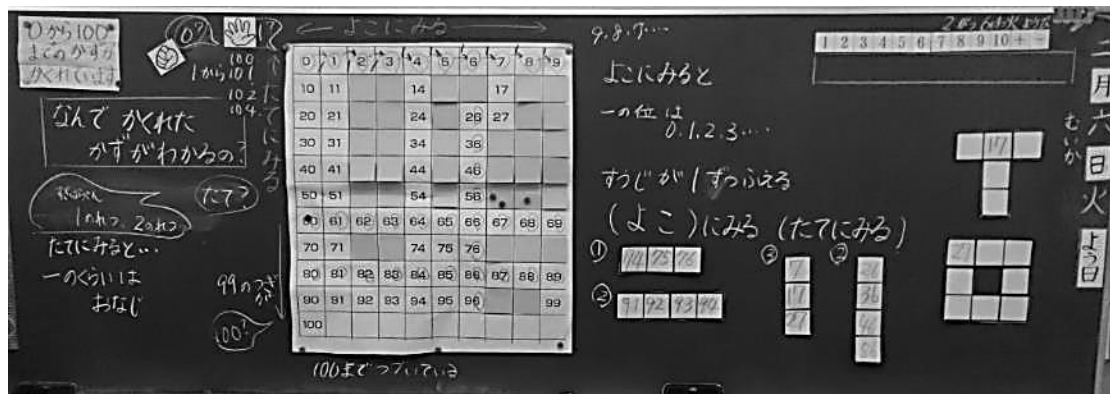
### 3. 研究部員の振り返り

- 子どもたちがとても素直な反応をしていて、気づきや疑問をストレートに表出していました。日頃から子どものつぶやきを認めて大切にされているから6年生であってもこれだけつぶやきが出てくるのだと感じました。
- 改めて課題設定の難しさを感じました。より子どもたちが主体的になれるような課題、さらには、その後の深い学びにまでもっていけるように考えないといけないなと思いました。
- 「何を考えさせたいか」ということを授業者が明確にもつことが大事だということ、授業者がぶれずにしっかりもっていることで、子どもが想定とちがう反応を示した時にも十分に対応できるようになることを学びました。
- 授業をみる視点がグループ交流を通して、共感できる部分がたくさん増えてきたように思います。また、尾崎先生の指導助言を通して、子どもから問いを自然に引き出していく大切さを改めて学ぶことができました。
- 今日の授業と尾崎先生の指導助言で「今すぐ教材研究したくなる」そんな気持ちになりました。子どもたちをアクティブにさせる部会ですが、私たちが一番、アクティブにさせていただける、そんな素敵な会をありがとうございました。

### (6) 第7回 平成30年2月6日(火) 園和小学校

#### 1. 公開授業 第1学年 算数科『かくれたかずがわかるかな』

指導者 尼崎市立園和小学校 亀岡 優子 教諭



〔本時の板書（研究協議会において本時の学習履歴が振り返られるよう拡大提示する）〕

#### 2. 公開授業についての研究協議会

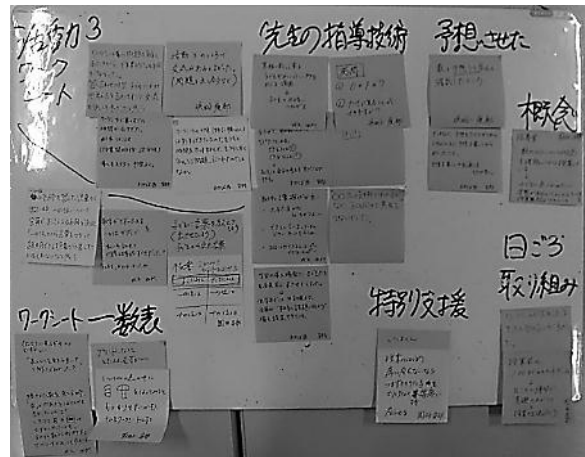
(ア) 受講者による研究協議（付箋を用いて、個人→グループ→全体の順で）

|                                                                                                                                                                 |                                                              |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| <p>視点①：子どもは主体的に動いていたか</p> <p>→子どもが動いた瞬間はどこか？</p> <p>→動いた瞬間を引き出すために有効な働きかけは何か？</p> <p>視点②：次の公開授業に引き継ぐものは何か</p> <p>→同じ手立てで試すことは何か？</p> <p>→改善した手立てで提案することは何か？</p> | <p>青付箋…よい手立て<br/>自分も使いたい</p> <p>赤付箋…課題</p> <p>黄付箋…改善策，代案</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|

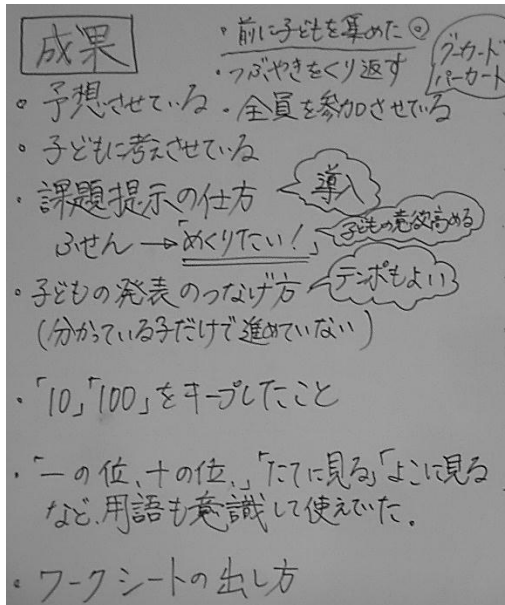
※自分が本時の授業を実施することを想定し、「どんなふうに展開したいか」等について指導案（本時案）にまとめたものを持ち寄っています。



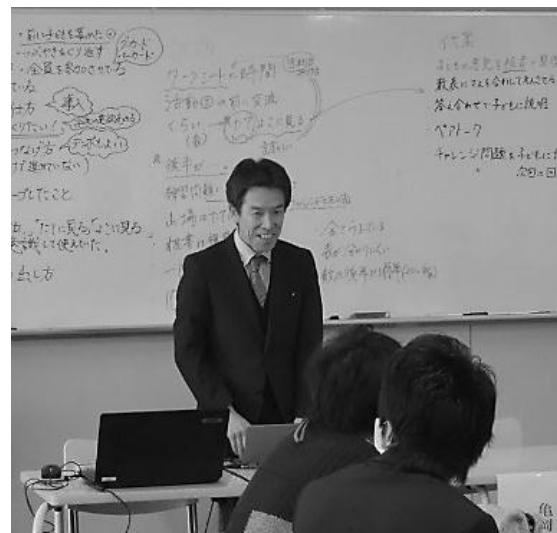
【グループ代表者による発表】



【付箋を並び替え、カテゴリーごとにラベリングする】



【部員が各グループからだされた  
成果・課題・代案等をまとめる】



【専任講師による指導助言】

(イ) 指導助言 講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏

#### 【この授業のよさ】

- 「かくれた数はわかるかな」発問の仕掛け
- 予想→確かめが意欲を引き出す
- きまりを引き出す展開の巧みさ
- できない子への寄り添い方
- 横、縦の見方の新しい視点で迫る
- 児童の考えの価値づけ
- 偶然性を問う発問
- ジェスチャーで理解を確認，定着
- 練習問題と問題場面の関連性

#### 【この授業の課題】

- 縦の見方は難しい
- 横も縦もめくる活動をゆっくりと
- 1の列の意味をていねいに
- 数字が正解できた根拠を語らせる
- 「だって」の共有が不十分
- 「気付いたこと」は子どもから引き出す
- 縦の言葉は子どもから引き出したい
- 70までを提示し，  
その先を予想させるまとめ

#### 【尾崎先生の授業実践より】

「きまりはあるのかな」（第6学年での実践）を通して

### 3. 研究部員の振り返り

- 子どもからだされる言葉から展開する授業のすばらしさとそのための準備の大切さをいつも以上に感じました。
- つつい「教えなくては」と思いがちですが、子どもたちからでてくるつぶやきを大切に子どもたちが気づける授業をしたいと思います。
- 教師が子どものつぶやきをどのように価値づけするのかが改めて大切だと感じました。発問の仕方やできていない子への寄り添い方などとても勉強になりました。
- 子どもたちが「〇〇したい」とどんな時に思うのか、そこにアンテナをはっていききたいと改めて感じました。
- グループ交流では、論点をしばって交流ができたように思う。成果も課題も共通することが多くあり、AL授業の見方というものが定着しつつあると感じた。

### (7) 第8回 平成30年2月20日(火)教育総合センター601・602研修室

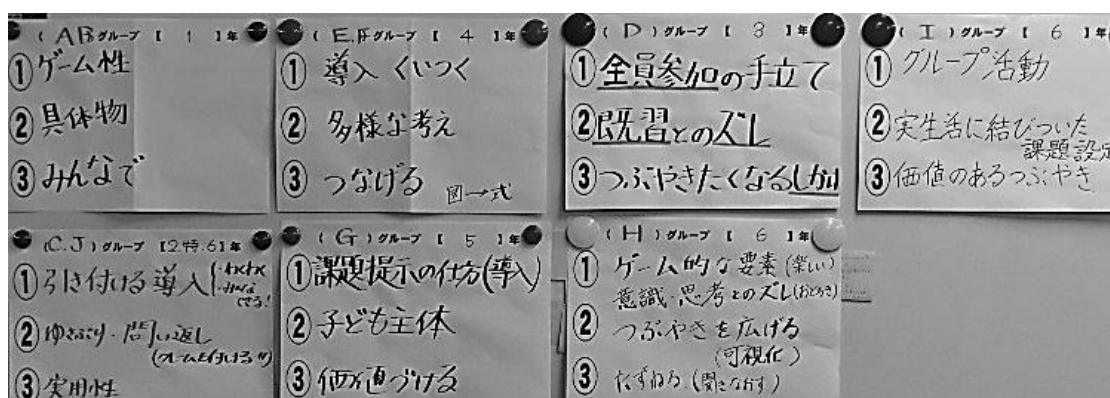
#### 1. 算数授業実践レポートをもとにしたプレゼン交流(グループ交流→全体交流)

※「一番うまくいった算数授業」、「一番愉しく展開できた算数授業」をテーマとした授業実践レポートを各自で作成の上、持参(A4版1枚以内)

- 青付箋…同意点(よい手立て、自分も使いたい) 赤付箋…疑問点(課題、代案)
- 一番うまくいった授業の共通点を3点にまとめる。
- (例) Dグループ ①全員参加の手立て ②既習とのズレ ③つぶやきとなるしかけ
- Gグループ ①課題提示の仕方 ②子ども主体 ③価値づける
- 発表について他のグループが感想や意見等を述べる。



[担当学年グループによる授業実践レポート交流、共通点を3点にまとめる]



[各グループがまとめた一番うまくいった授業の3つの共通点]

## 2. 指導助言『『数学的な考え方』のよさを自覚する授業創り』

講師 関西大学初等部 教諭 尾崎 正彦 氏

### ○「数学的な考え方」って何？

単に算数のことを考えることが、「数学的な考え方」を働かせるのではない。

→算数の授業では、それまで見えなかったことが見えてくる瞬間がある。

→その時に有効に働くのが「数学的な考え方」である。

→見えなかったことが見えてきたとき、

子どもたちは「数学的な考え方」のよさを実感する。

### ○よさの実感の原点は、子どもが着目したくなること

子どもが「数学的な考え方」を使いたくなる状況を設定すること

→授業のどこかで子どもが問いを見つける場を設定すること

→子どもたちが「何とかして解決したい」←「数学的な考え方」

→子どもたちがよさを実感する「そういうことか、すっきりした、わかりやすい」

→子どもたちはそのよさを活用して場面を拡張して考えを深めていく

### ○「数学的な考え方」の成長を左右する教師の態度

「数学的な考え方」が発揮され問いを乗り越えた時

→教師がそれらの考え方を価値づける、クラス全体に共有する

○授業創りミニ演習「2年 かけ算」→尾崎先生の授業実践より（かけ算）

#### 「数学的な考え方」10の視点

- ①帰納的な考え方(きまりを見つける)
- ②類推的な考え方・発展的な見方
- ③演繹的な考え方
- ④単位の考え
- ⑤揃える考え
- ⑥観点を決めて分ける
- ⑦同じものを見つける
- ⑧絞り込む
- ⑨置き換える
- ⑩広げる



【専任講師による年間総括】

## 3. 一年間の学びを振り返って

- 子どもの思考のズレやつぶやきを拾っての展開など意図的にまわり道をさせることで、思考力の高まりや意欲の高まりを実感できる授業実践ができました。
- 常に「ズレを生む」「つぶやきたくなる」ような授業を考えたいという思いをもてるようになった。また、つぶやきを拾えるように、普段から子どもに対して接する大切さも学べた。子どもの意見・考えを価値づけると子どもは、さらにつぶやくようになったし、意欲も高まったと感じる。
- 子どものつぶやきをひろうということを意識すると普段おとなしい子が素直にわからないと言えたり、できる子が教えてあげたり、自然と優しい雰囲気になりました。教科指導だけでなく、学級づくりにもつながることをたくさん教えていただきました。

□一時間だけの思考ではなく、連続性のある授業をすることで考え方が発展的になったり、既習事項との関連などを自ら探すようになってきたりしてきました。授業も数時間単位で考えることで余裕のある展開にすることができ、子どもの考えを拾う時間も多く確保できました。

#### 4 研究部員による実践報告および考察

研究部員が年間を通じた研究実践の積み重ねを振り返り、今一度、自分自身の授業の現在地を捉えるため、今後、授業における改善が必要な点、伸ばすべき点等を加味しながら「自己診断」を行うことが大切である。このような考えから、本部会の研修を通して学んだことをもとに、実践を通して、「子どもの変容が肌で感じられた場面」、「有効であった取り組み（導入、指導技術、学習方法等）」といった主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善への取り組みについて、具体的な授業場面を中心に各自が設定した「主張点」を踏まえて振り返りを行っている。

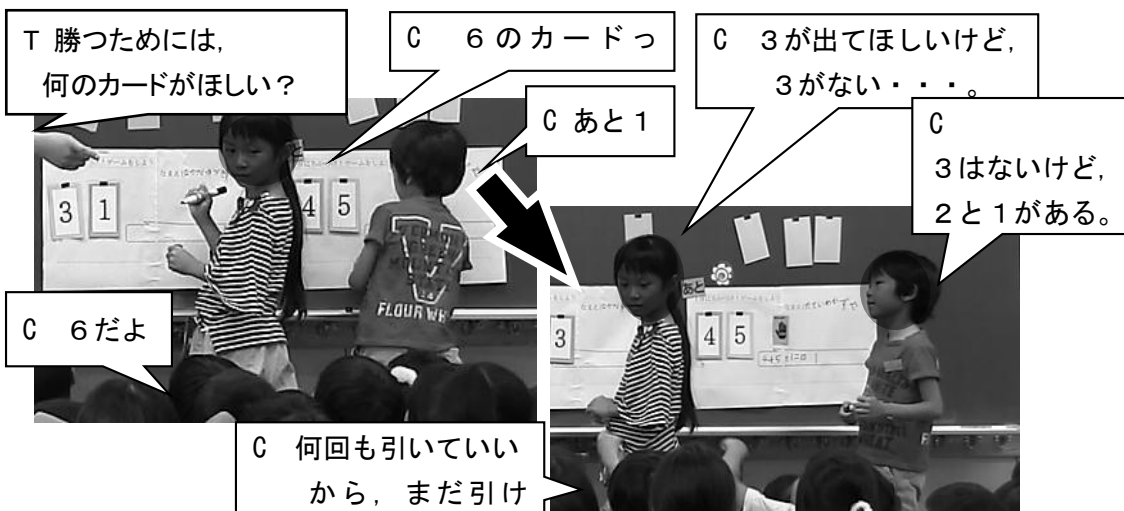
##### （１） 実践１【１年生】 自由に自分の思いを出せる場づくりの工夫

１年生の子どもたちは、経験や語彙が少ないため、自分の思っていることを伝えることが難しい。今年度は、子どもたちからでてくる言葉を大切にしたいかったので、自分の思っていることを表出しやすくするために二つのことに力を入れた。一つは、子どもたちが主体的になるゲームなどの活動を多く取り入れた。その際、友だちと作業するなかから生まれる会話を大切にしてきた。もう一つは、ノートにふり返りを書くことである。自分の思いを書くことを楽しい、うれしいと感じられるように実践してきた。

##### 1. 実践の内容

##### ① 「１０にちかづけ！ゲーム」 ３つのかずのけいさん

１～５の数カードを使って、どんな数を合わせたら１０に近づくことができるかを考えさせるゲーム活動をした。ピンクと水色の２色の１～５の数カードのうち好きなカードを引く。しかし、裏向きにカードを置いているため、引きたい数カードを思った通り引くことが難しくなってくる。ルールを説明する際には、黒板の前に子どもを集め、実際に子どもとゲームを行いながらすることで、理解させていくようにした。黒板前に集まった子どもたちは、友だちが近くにいるので、自由に話すことができていた。



先攻、後攻ともに2枚引いたあとに、勝つために何の数が必要かを考えさせた。見ている児童たちも口々にアドバイスをしていた。

教師が「9のKくんの勝ち」と言った時、多くの子どもたちは、「そうそう。」と同意した。しかし、一部の子どもが、「まだ終わってないよ。」と言い出した。

その後、先攻だった子どもが1と2を引き、10を作った。

ゲームの中で出てきた困ったこと（問題）を全員で解決することができた。3つの数の計算しかしていなかった子どもたちの頭の中は、3つ以上の数でもたして数をつくることができることに気付くことができた。

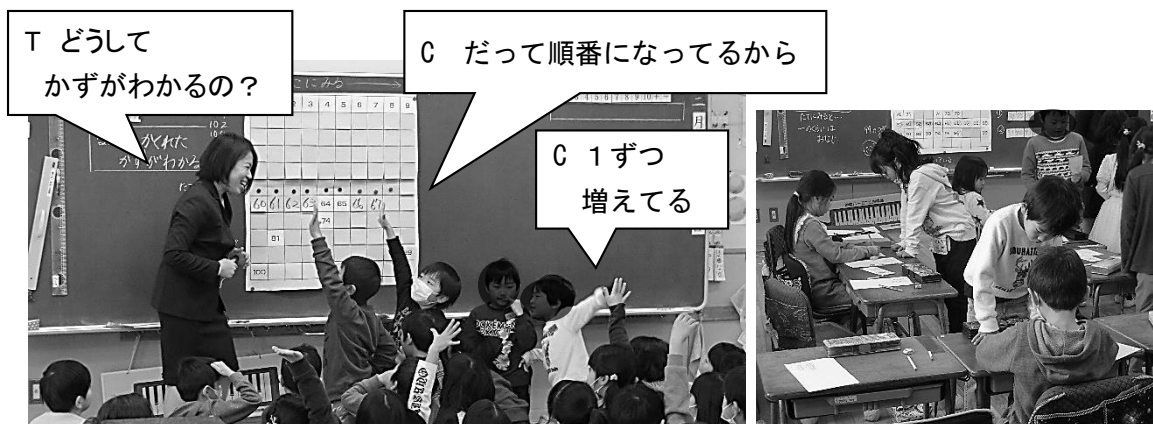
### 実践のポイント

- ①ゲームをすることで勝ちたいと思う気持ちを利用し、どうしたら勝てるかを考えさせる。
- ②子どもを黒板の前に集め、自由に話すことができる場をつくった。

② 「どんなかづがかくれているかな？」おおきなかづ

0～100までの数が、すべての付箋で隠されている状態の表を掲示する。付箋をめくりたいという気持ちから、隠れた数何なのかをあてたいという気持ちに変わり、子どもたちは予想したことを次々と口にした。数を当てる中で、「どうして分かったの？」と問うことで、数表のきまりに目を向け、理由を答えたりした。子どもたちは、表を横に見ると数が1ずつ増えることに気付いたが、教師が「たまたまじゃない？」と問い返したことで、他のところもめくって確認しようとする姿が見られた。この授業では、どうしてその数になるのかと根拠を子どもたちに語らせる時間が十分でなかったため、表を縦に見た時のきまりが一部の子どもしか理解できていなかった。

きまりが定着していない中で、練習問題を取り組んだので、解くスピードに時間差ができてしまった。そのため、早くできた子どもには、困っている友だちに答えではなくヒントを教えるように伝えた。子どもたちは、必死に教えてあげようと説明をしていた。



翌日、練習問題の誤答を掲示して、「これはどうかな？」と尋ねた。すると、子どもたちは「ちがう。」「1ずつ増えてるからこれは横の答え。」と答えた。「じゃ、この問題を間違えないようにするにはどうしたらいいのかな？」と聞くと、「縦だから10ずつ増えたらできる。」や「十の位はかわって、一の位はそのまま。」などと自分なりの解法のポイントを教えてくれた。前時では、表の縦の見方のきまりが分からなかった子どもも縦の問題を答

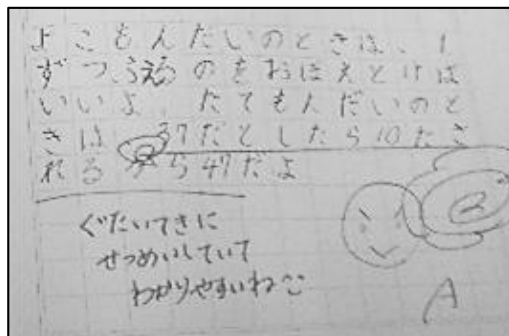


えることができるようになった。

ノートをまとめる時に、「この表のクイズを絶対に間違えないようにするためのポイント」をノートに書いて、まだクイズをしたことのない友だちに教えてあげよう。」と指示した。子どもたちなりに、自分で大事だと思ったことをノートに書いていた。

掲示した誤答

|    |
|----|
| 17 |
| 18 |
| 19 |



問題の考え方を説明する際に、自分で例を挙げて説明している。

### 実践のポイント

- ①めくる活動からあてる活動に変わっていき、子どもたちからきまり（ポイント）をみつけさせる。
- ②目的を意識させることで、子どもたちが説明をしたり、ノートに自分の考えを書いたりすることができる。

## 2. 実践を振り返って

今年度も1年生の担任をし、昨年度と同じように子どもたちに楽しんでもらえるように子どもたちを引きつける導入や、ゲーム活動、掲示物（カード、くじ）などを取り入れるようにした。子どもたちが楽しみながら取り組んでいる中にはたくさんのつぶやきがあった。黒板前で話し合いをさせたときには、話し手との距離がどの子も近くなるため、注目して聞くことができた。すぐに反応し、返事をする姿も見られた。注目すべきところに指をさすなど、意識していることも伝わってきた。つぶやきを全員で共有しやすい環境であったと思う。

日々の授業で子どもの気持ちを認めることを大切にしてきた。全ての子どもの気持ちを授業中に把握し、価値づけすることが難しかったので、ノートに花丸やコメントをつけるようにした。はじめは何も書けなかった児童も、少しずつ自分の思いをノートに書けることができるようになった。ノートを返却すると、うれしそうにノートを覗く子どもの姿があった。この時点では、子どもは教師に向けてノート（手紙）を書いている。しかし、感想だけのまとめでは、数学的な思考力はつかない。数学的な思考力をつけるために、2学期後半以降からは、ねらいを明確にするようにした。まとめに入る前に、「今日の勉強を、まだ習っていない人にわかるようにお手紙に書いて教えてあげよう。」や「今日の問題のテストで絶対に100点をとれるように、間違えないポイントを教えてあげよう。」など子どもに伝えた。すると、子どもたちの中で、大事なところ、気を付けるべきところなどをノートに書き出す姿が見られた。また、ノートを見ていると、だれか友だちに教えてあげようとノートを書いているように思える。1年生で難しいこともあるが、自分なりに思ったことを表現することができるようになってきた。まだ語彙が乏しく、上手く書けないこともある

ので、どのように書けばよいのかを例示していく中で、書くという表現力を身につけさせていきたい。

子どもたちのつぶやきを上手く引き出し、価値づけることが教師の役目だと思う。ただ、そのつぶやきが出てこなければ、教師が強引に引っ張っていく授業となってしまう。そうならないためにも、子どもたちの言葉が自由に飛び交い、子どもたちで問題を解決していく授業を創るようにしたい。

## (2) 実践2【4年生】 自ら考える子どもを育てる指導の工夫

学習指導要領の改訂により、「主体的・対話的で深い学びに向けての授業改善」が求められている。1学期からの児童の様子を見ていると、課題に対してしっかりと向き合い解決に向けて取り組むことができるが、より深く練り合ったり、検討したりすることを苦手としている児童が多いように感じる。そこで、児童のつぶやきや発言を引き出せるような授業の工夫に取り組んだ。そこから、児童が主体的に話し合いや検討事項に参加していけるように指導していきたい。

### 1. 実践の内容

#### ■授業実践 ～導入場面での課題提示の工夫～

##### ① 「わり算の筆算(2)」

商が等しいわり算の式を見てわり算にどんな性質があるかを調べていく学習において、本時では式を短冊に記入しておき少しずつ提示していった。

商が等しいわり算の式を見て、わり算にどんなせいしつがあるか調べましょう

|                   |
|-------------------|
| $4 \div 1 = 4$    |
| $8 \div 2 = 4$    |
| $24 \div 6 = 4$   |
| $240 \div 60 = 4$ |

答えのない式のみの短冊を作り、少しずつ提示していった。

はじめに $4 \div 1$ を提示し、次に $8 \div 2$ を提示した。この時点で、児童は「次は $16 \div 2$ だ。」(被除数の8の2倍のもの)や「いや $12 \div 2$ やろ?」(被除数が $4 \cdots 8 \cdots 12 \cdots$ と4ずつ増えるもの)など、短冊を2枚提示しただけで、児童のつぶやきを引き出すことができた。この段階で予想を立てさせ、学級全体を授業に巻き込むように仕組んだ。3つ目に、 $24 \div 6$ を提示することによって、被除数や除数ではなく、商に目を向けることができた。

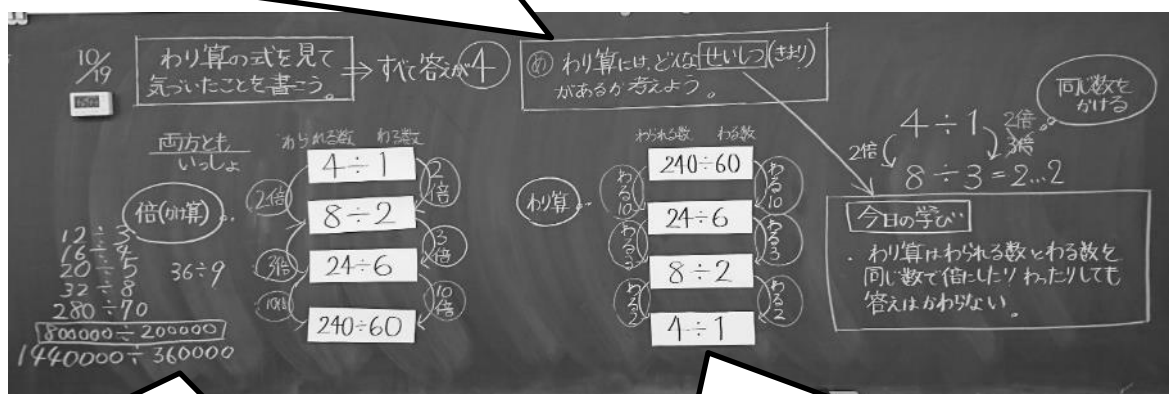
そして最後の4つ目では、児童は「ああ～」というような発言をし、本時の課題で扱う式には「わり算の式の答えが全て4になる」ということに気づくことができた。そして、「他にはないかな」と気づきを問うことで、本時の学習課題へと展開していった。

児童に、「共通点は何か」「きまりは何か」などの興味・関心をもたせることができた。

### 実践のポイント

- ①場面によっては、課題をはじめからすべて見せないようにする。
- ②いくつか見せたあと、子どもに予想させる時間をとる。
- ③子どもの正解の発言をすぐに捉えず、全体でじっくりと共有していく。

「きまり」や「性質」という言葉は出てこなかったが、感覚としてそういったものがあるという共通認識で子どもたちとめあてを立てることができた。



提示した式のみでなく、他の数字にも置き換えて考えを広げる児童もいた。

導入部分で、式についていろいろな見方をしていたため、被除数や除数についても縦に見ることができる児童が多かった。

## ② 「小数のわり算」

小数倍の意味の学習においても、本部会で学んだ課題提示の工夫を活用した。はじめに、たいちさんの一輪車の練習の記録の表を提示する場面において、月曜日のみ記録の長さが見えるようにし、他は付箋で隠した掲示を行った。本時の問題は、「月曜日の記録をもとにするとほかの曜日が何倍か」であったので、子どもたちからは、「火曜日がほしい」「他の曜日は？」という声が上がった。

右の表は、たいちさんの一輪車の練習の記録をまとめたものです。  
月曜日の記録をもとにすると、他の曜日の記録は何倍ですか。

|   | 長さ(m) |
|---|-------|
| 月 | 20    |
| 火 | 40    |
| 水 | 60    |
| 木 | 50    |
| 金 | 30    |

|   | 長さ(m) |
|---|-------|
| 月 | 20    |
| 火 |       |
| 水 |       |
| 木 |       |
| 金 |       |

付箋で隠して提示

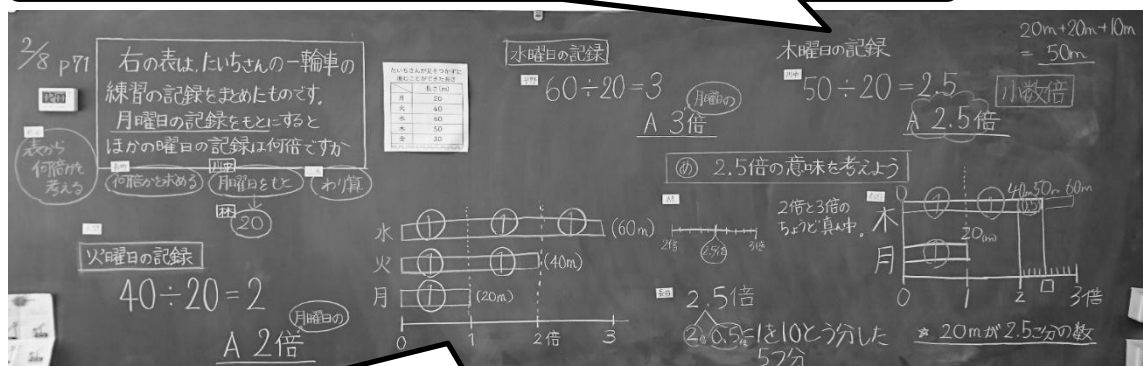
火曜日、水曜日と付箋を1枚ずつめくって記録を確認していき、数直線図などを用いながら、まずは整数倍について取り組んだ。また、だんだん記録が伸びてきていることなど、場面についてもおさえながら表を見ていき、次の木曜日への意識を持たせた。ここまですると子どもたちは、表の中の記録を予想している児童が多く「次は100mかな?」「いやいや次は下がってるで」など、考えを巡らせていた。そして、木曜日の記録も今まで同様に立式( $50 \div 20$ )でき、割り切ることもできたが、2.5倍という小数倍の意味について考える学習に展開していった。

その後、「意味を説明する」ということに苦戦していたが、数直線図などを用いて「2.5倍は、20mが2つ分と10mが1つ分(0.5)だから2.5になる。」や「20mをもとにすると50mは、2.5つ分」などの言葉で、説明することができた。

このように、段階的に示していくことで、まずスモールステップで課題に入っていくこ

とができた。つまり児童も少なく、「次もできそうだな」という気持ちをもって取り組むことができていたように思えた。また、段階を踏むことで、本時の課題である小数倍と整数倍の違いにも気づくことができやすく、また最初に月曜日をもとにすることも児童にとっては、理解しやすかったのではないかと考える。

段階的に学習を進めることで、これまでとの違い(小数倍)に気づくことができた。



整数倍の時から、数直線図を用いて説明させることで、小数倍の説明へとつなげた。

## 実践のポイント

- ① スモールステップで本時の課題へとつなげていく。
- ② 初期の情報量を少なくすることで、「基準」を明確にする。
- ③ これまでとの違いに気づかせる。

## ■校内における啓発活動について

### ～指導力向上委員会～

本校は、校内研究の一環として、教員全員が国語科の授業を公開している。

さらに、指導力向上委員会を設置し、担当教諭のコーディネートのもと、経験年数3年未満の先生は年間2回、経験年数4年目以上10年目未満の先生は年間1回、算数科の授業を公開し、

「主体的・対話的で深い学び」を目指して、授業改善に努めている。私自身も参加し、アクティブ・ラーニング部員として部会での学びを伝達するとともに、授業研究や実践を行い、学びを深めている。

年度初めに指導力向上委員会を開き、年間のどの時期どの単元で授業を行うかを決定する。今年度の実践では、第1学年「どちらがひろい」、第3学年「まるい形を調べよう」、第4学年「概数」、第6学年「単位のしくみを調べよう」の単元で授業実践が行われた。以下は、行われた授業実践と事後研究会の内容の一例を紹介する。

## 【AL部会での学びをプリントにまとめ伝達】

アクティブ・ラーニング算数部会 報告資料  
尼崎市立庫裏小学校 吉向 良太

講師：関西大学初等部 尾崎 正彦 先生  
主体的・対話的で深い学びとは？

…各教科等の特長に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を発見して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること

■算数科で創る主体的・対話的で深い学び  
主体的な学びを引き出す仕掛けが「問い」です。

問いが連続する自力解決

課題提示 → 実験 → 問いの共有 → 解決策の共有 → 実験 → 新たな問いの共有 → 新たな学習の共有 → 実験

スレ

■授業のスキル

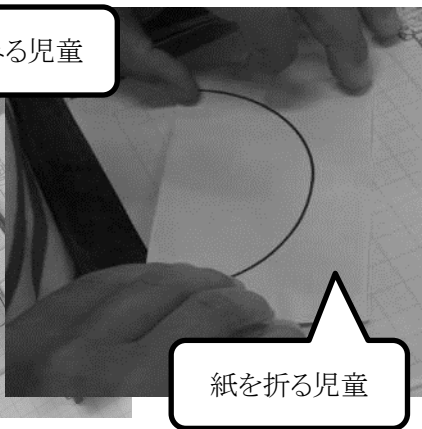
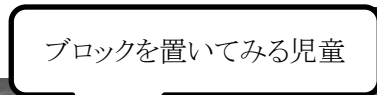
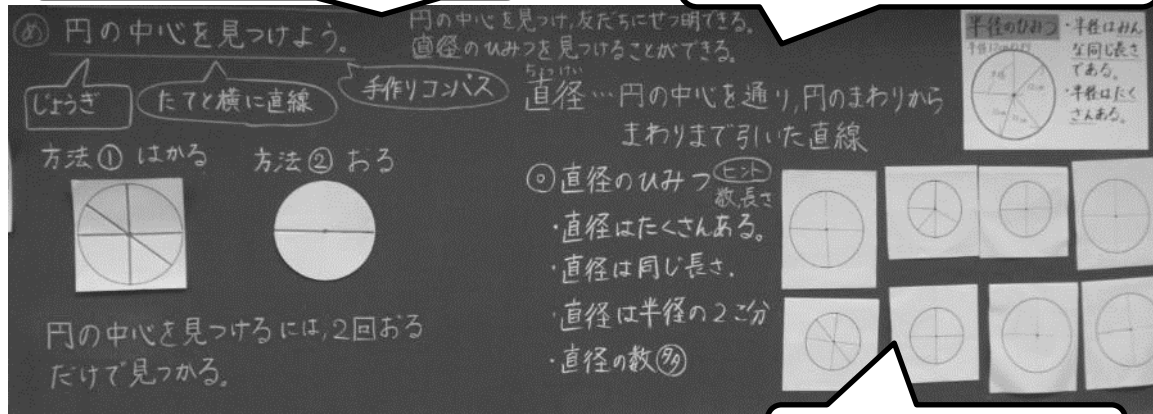
- ★課題・めあてを出し過ぎない…「もっと条件が欲しい」「〇〇が知りたい」など。
- ★意図的指名…自由だけと授業をコントロールする。
- ★ベアトーク…目的を持って取り入れることが大事！
- (例)・話す内容を焦点化する。・確実に身に付けさせたい内容などの時に取り入れる。
- ★グループ挙手…授業の中で、全員1度は自分の意見を表現できる場をつくる。
- ★問い返し…「〇〇って書いてるけど、どういうことかな？」→「それは…」「だって…」を生む。

### 第3学年「まるい形を調べよう」

目標：円の中心を見つけることができる。円の直径の意味を知り、その性質を調べることができる。

本時のめあてを全員で確認した後に、  
解決に向けての見通しをもたせる。

用語など、指導しなければならない内  
容は、こちらから押さえをきちんと行う。



本時の学習は、まず課題に対して見通しをもたせてから、課題解決へ向けて進んでいったところがよく、子どもたちが何をすべきかを捉えていた。また、自由な発想にも対応できる場が用意されており、子どもたちに寄り添って指導していく様子が見られた。さらに、学習のまとめについても、子どもたちと一緒に考えていくことができ、直径の定義についてもきちんと押さえて授業を終えることができていた。

しかし一方で、与えたワークシートに余白（写真参照）があるために、円の中心を見つけるために折って考えようとしている児童が、正確に折れないことや、定規で測って中心を見つけようとしていた児童など、一人一人が正確に中心を見つけることができていたかの検討方法などに課題が見られた。今回の実践を通して、以下のような授業づくりの視点が大切であると改めて学ぶことができた。

#### 【授業づくりの視点】

- ・授業を考える際に子どもがどう動くのかをイメージして、展開を考えていくこと
- ・不正確さや不便さを提示することで、利便性に気づかせることもできること

また、事後研究会では、本時の展開と学習指導要領とを照らし合わせて振り返りを行っ

たり、授業内容以外にも指導案の書き方や用語の意味・算数教具の使い方等の素朴な疑問についても出し合ったりしながら、若手教員の学びを深める場としている。

## 2. 実践を振り返って

専任講師の尾崎先生のお話の中で、「算数の授業は、導入で8割決まる」とあった。子どもたちを惹きつけるための方法として様々な導入があり、楽しく面白い算数の授業がしたいといつも考えている。さらにそれが、算数の本質に迫るような“面白さ”になればと思う。「何かきまりがありそうだな」とか「これは、どうなっているんだ?」と思えるような、「問い」がどんなところで生まれるのかを教材研究では考えるようになった。学びに向かう子どもの意欲の高さは、授業の要になると実践を通してとても強く感じている。課題解決への意欲が高ければ、必然的に主体的な学びにつながっていくであろうし、次時の学習へとつながっていく。

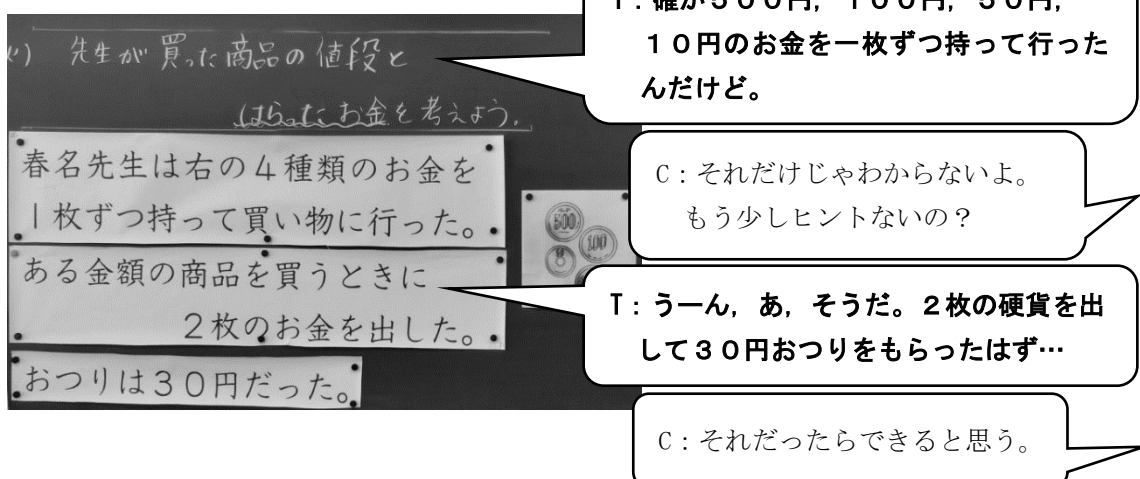
本年度の実践を通して浮かびあがってきた課題は、教師がどのような場面で子どもたちの学習の中に関わっていくのかということである。「子どもたちに議論してほしいところはどこなのか」、「子どもたちから引き出したい言葉は何なのか」といった点を意識して教材研究を行い、学びに向かう姿をもった子どもたちをいかに対話的に学習させていくのか、教師の発問や関わりが重要であると考えた。これからも、子ども自身で問いがもてるような授業展開を行い、子どもたち同士で解決していけるような授業を行っていきたい。

### (3) 実践3【6年生】 子どもの思考が自然と動き出す教材の工夫

子どもの能動的な態度や思考を引き出すには、教師自身が教科書題材をかみ砕き、子どもが考えたくなるしかけを意図的に準備できるかにかかっている。それゆえに子どもの思考が偶然の産物でなく、「教師によって意図的に引き出された授業」「数学的な思考をつかいたくなる授業」を目指し実践へと取り組んだ。

#### 1. 実践の内容

お金の組み合わせを用いて、落ちや重なりがないように調べる学習の発展として、「先生は家計簿をつけないといけないんだけど、レシートを捨ててしまってどうしても買った商品の金額が思い出せない。一緒に考えてくれない?」と投げかけた。すると子どもと以下のようなやり取りになった。



先生が買った商品の値段と  
はらったお金を考えよう。

春名先生は右の4種類のお金を  
1枚ずつ持って買い物に行った。  
ある金額の商品を買うときに  
2枚のお金を出した。  
おつりは30円だった。

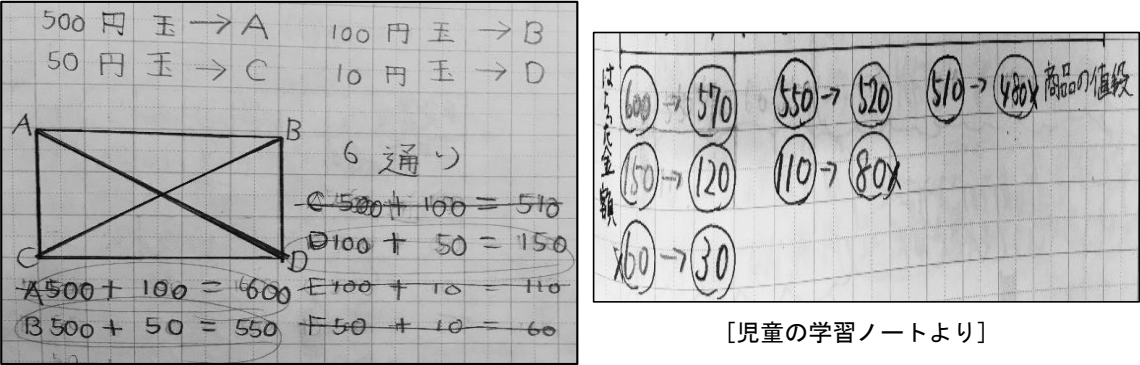
T: 確か500円, 100円, 50円,  
10円のお金を一枚ずつ持って行った  
んだけど。

C: それだけじゃわからないよ。  
もう少しヒントないの?

T: うーん, あ, そうだ。2枚の硬貨を出  
して30円おつりをもらったはず...

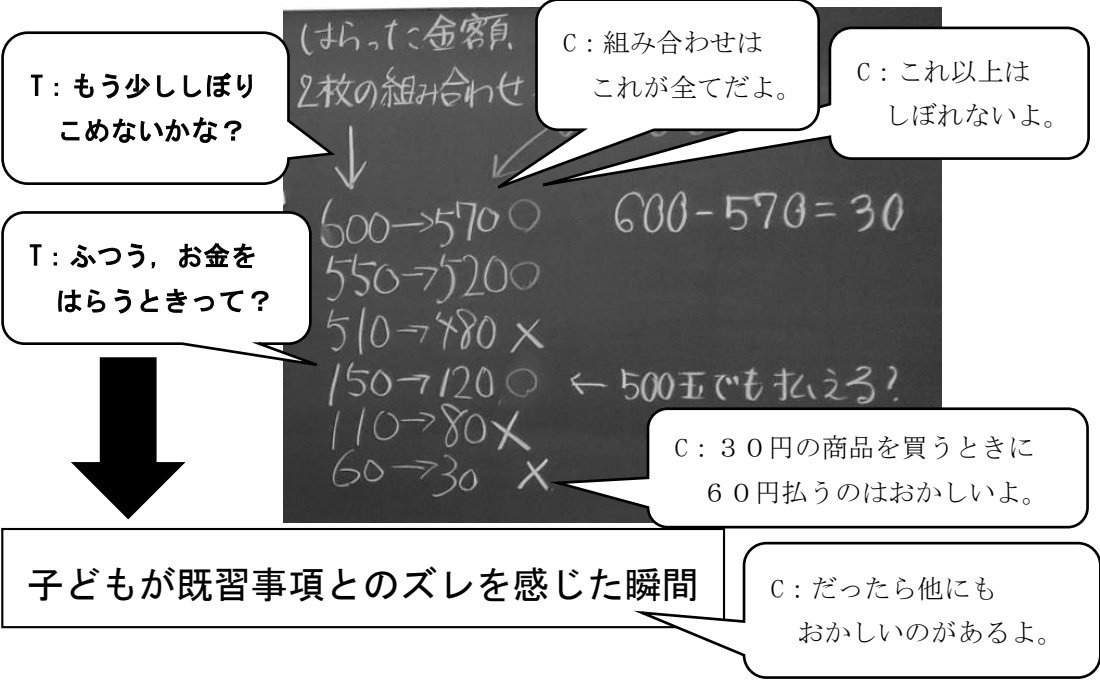
C: それだったらできると思う。

課題の一部しか見せないことで、子どもの方から「知りたい」という意欲を引き出すことに成功した。知りたい情報がそろった子どもたちはこれまでの学習をいかし、様々な方法で先生が支払ったであろう硬貨の組み合わせと買ったであろう商品の値段を考え出した。



| 児童から出てきた 2 枚の硬貨の組み合わせ | 払った金額 | 買った商品の金額 |
|-----------------------|-------|----------|
| 100 円と 500 円          | 600 円 | 570 円    |
| 500 円と 50 円           | 550 円 | 520 円    |
| 500 円と 10 円           | 510 円 | 480 円    |
| 100 円と 50 円           | 150 円 | 120 円    |
| 100 円と 10 円           | 110 円 | 90 円     |
| 50 円と 10 円            | 60 円  | 30 円     |

子どもたちにとって組み合わせの学習は既習事項で、重なりやもれもなく組み合わせを考えることができた。ここでさらに子どもの思考を揺さぶってみた。



本実践では、数学的な思考と実生活をリンクさせることを取り入れた。500 円、100 円、50 円、10 円のお金を一枚ずつ持っているとき、30 円の商品を買うために60 円を出す人はふつういない。50 円玉一枚を出せば済むからだ。そのことに気が付いた子



どもたちは、「80円の商品に対して110円払う」「480円の商品のために510円払う」という組み合わせも可能性から排除することができた。

組み合わせの学習だけではこのような思考にたどり着かない。実生活とリンクした課題設定だったからこそ6通りからさらに3通りへと絞り込むことができた。算数は授業時間だけに留まらず、実生活の中にこそ数学的な考え方が隠れていることに気付かせていきたい。



〔歩き学習による考えの交流〕

### 実践のポイント

- ①課題の全てを見せず、一部ずつ見せる。
- ②実生活に関わる題材設定をする。(より身近で子どもが体験したことのあるもの)
- ③既習事項とのズレをしかける。

## 2. 実践を振り返って

### ①授業づくりと学級の意識改革

本実践に至るにあたって、部会で学びを深める中で自分の学級の雰囲気や授業スタイルを見直すことからスタートした。具体的には、挙手制を極力減らしたことで、気が付いたことや疑問を自然とつぶやける空気感ができあがった。さらに、隣に座っている友だちだけでなく広く交流できるように、考えを交流する際は好きなところに移動して話し合う「歩き学習」も取り入れ、活発に話し合える学級にすることに成功した。本実践で行った課題の一部しか見せず、知りたい情報を子どもが先生に求める場面もつぶやける空気感から生まれてきたものである。

### ②安心からズレを生じさせる

本実践の前半、知りたい情報を手に入れた子どもたちは、既習事項で解決できる道筋が見え安心して学習へと取り組むことができた。しかし、後半は既習事項だけでは解決できないこと(ズレ)が生じ、再度思考が始まる展開を準備した。教師に情報を求める姿、歩き学習で交流する姿は一見するとアクティブな学びに見えるが、授業後振り返ってみると、子どもは教師からのヒントを頼りにしていただけで、子どもの思考は常にその場に留まっていたのではないかと考えた。それは、子ども同士の学びの中で新たな気付きや発見がなかったこと、そして教師からのヒントで課題解決に向かったことが大きな理由だ。そういった意味で本実践には主体的な学びという点で課題が残った。

### ③生活の中にこそ数学的な思考が…

実生活と関わった題材設定は子どもにとって興味深いものとなる。今回は買い物という誰もが体験したことのある身近な場面設定を行ったため、算数が苦手な子どももすんなりと授業に参加できていた。本実践以外にも、一年間を通して部会で学んだことを実践してきた。「宝くじの当選方法をあげる方法(比例の単元)」や「台風21号の実際の速さは?(速さの単元)」などは子どもを学習活動に引き込むには非常に有効な題材設定だった。

一年間の実践を通して、様々なことを本部員とともに学び実践へと返してきた。しかし、

まだまだ教師から課題を一方向的に与えていることが多いと感じた。本実践でもそうだが、導入でのズレの中から「問い」を見つけ、それが子どもの「めあて」になっていない。『授業での「めあて」は子どもから生まれた「問い」でなければいけない』と専任講師の尾崎氏が述べている。授業づくりの基本として「問い」を生み出す導入と良い考えが出てきたときの「良さ」＝「価値」を共有することを常に意識して授業構成、そして実践をこれからも意識して行いたい。

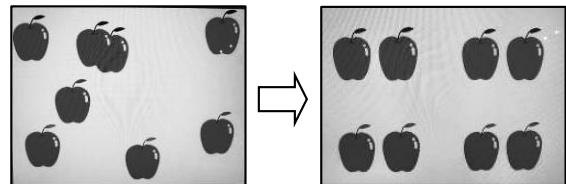
#### (4) 実践4【2年生】子どものわくわく感が生まれる かけ算指導の工夫

2年生の算数と言えば、だれもが「かけ算の九九」を想像するだろう。九九の暗唱に挙げられるように知識・技能の習得に特化した授業展開が多く見られるのが現状である。かけ算の指導において、実際には目に見えない子どもの思考部分、子どもの学習に向かう姿勢をどのようにすれば高めることができるかに着目し、子ども達が考えたいと動き出し、思考がゆさぶられる授業展開を心がけた。

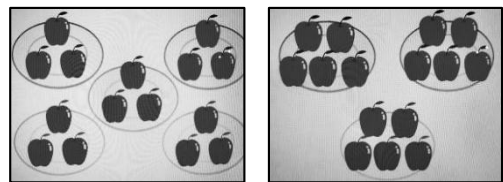
##### 1. 実践の内容

##### ①「数えにくさ・数えやすさ」からまとまりを見つけるという必然が生まれる単元の導入

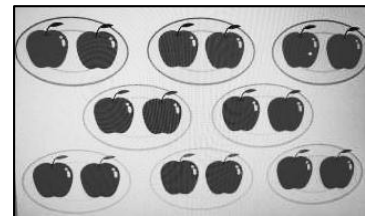
「りんごは何個あるかな？」と投げかけ、右のようなスライドを見せていく。必死で数える子どもたちから、「バラバラで数えにくい」や「並べられているから数えやすい」という声が生まれてきた。1つ1つ数えないといけ



ない左図に比べ、右図は、「2こずつに分けられている」といったまとまりに目をつけたり、「 $2+2+2+2$ で計算できる」という式に着目したりする様子が見られた。その言葉を共有し、続けて、次のようなスライドを提示した。子どもたちが「もうわかった!」と口々に言う。「もうわかったの? その気持ちわかる?」と全体に促したり、「どうして、すぐにわかったの?」と問い返したりした。「1つのまとまり(お皿)に何個りんごがあるのか」と「まとまり(お皿)が何個あるのか数えたらいい!」と子どもたちから返ってくる。そこで、「○つずつ」、「□まい分」で「 $\bigcirc+\bigcirc+\bigcirc+\bigcirc$ 」といった図と言葉とたし算の共有を図った。



さらに、1皿2こずつ、お皿が8まいのスライドを提示した。先程のように、図と言葉とたし算の共有を図る際に、教師がわざと足す数を少なく板書した。数秒後、「ひとつ足りない」という声。「お皿が8まいなんだから、8つ足さない!」、「ん? いくつ足せばいいの?」

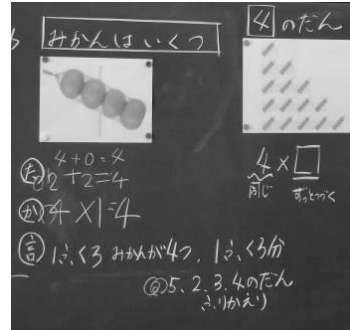


たし算に2つという数字が何個あればいいの?」と問い返す。すると、子どもたちから「 $2+2+\dots$ 、ややこしい!」、「ノートに書くと $2+2+\dots$ 次の行にいく。長い!」という声があがった。この面倒くささや複雑さが生まれたその瞬間こそ、かけ算の有用性が強く感じられる場面である。つまり、今までのたし算の面倒さ、複雑さがかけ算という新たな計算方法を知りたいというきっかけの入り口となったのである。

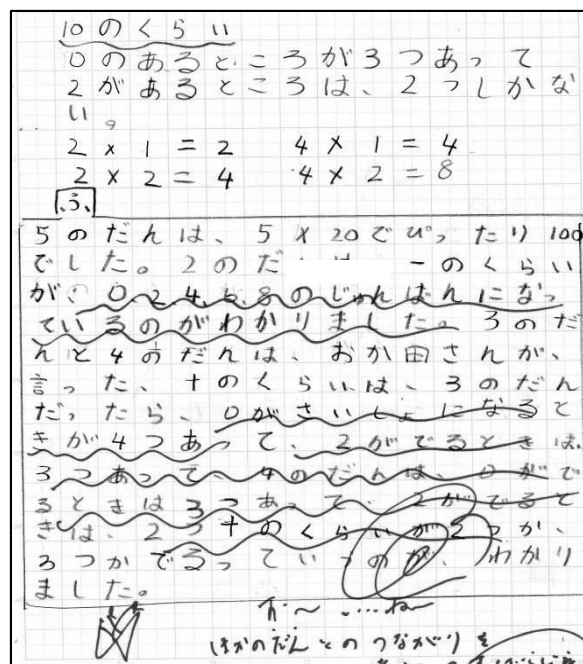
## ②暗記だけではなく、新たな気づきに焦点をあてる

それぞれの段を学習していく時の授業の展開は、(ア) 例題をたし算・かけ算・言葉で解く、(イ) その段のかける数を20まで増やしていく、(ウ) かける数を増やして気づいたことを共有するが主な流れである。既習した気づきを活かしていくことと、新たな発見を共有することを徹底した。子どもから生まれた気づきと算数の言葉をリンクさせながら進めた。以下のような気づきがあった。

- ・ かけ算はずっと続いている
- ・ □ずつふえている、へっている
- ・ □が何こあるかで決まる。□はずっと同じ(かけられる数とかける数の指導)
- ・ 時計を見たらわかる
- ・ 一の位の数字の変化や、規則性
- ・ 十の位の数字の変化や、規則性
- ・ かけられる数が増えると答えも増える
- ・ かける数が0の時はすべて答えが0
- ・ かける数が10や20などの時の答えの一の位は「0」がつく
- ・ かけられる数とかける数を反対にしても答えは同じ
- ・ 2の段と4の段と8の段はにている
- ・ 3の段と6の段と9の段はにている
- ・ 1, 3, 7, 9の段は1の位が「0」～「9」まですべてある



[4の단을学習した際の板書]



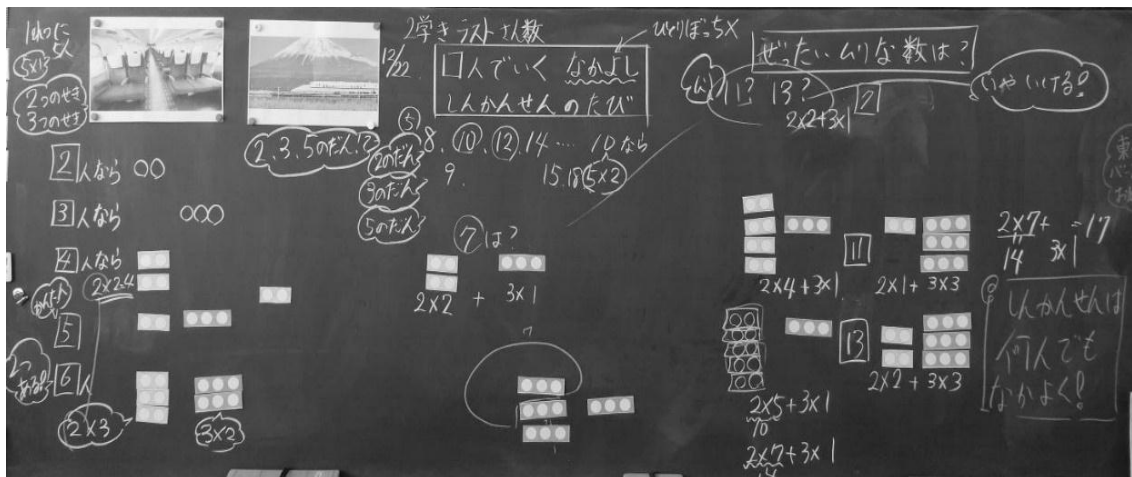
[4の단을学習した際の児童のノート]

### ③かけ算を応用して使うきっかけをつくる

かけ算を応用的に扱う授業にチャレンジした。「□人でいく、なかよし新幹線のたび」と投げかけ、スタートした。新幹線の写真を見せ、「T:乗ったことある?」、「T:座席ってこんな風になっているんだよ!」と興味をひきつける。すると「C:2つ席と3つ席がある」、「C:1列に5人座れる」、「C:5×1だ」、「C:5の段だ」とかけ算とすでに結び付けている子も見られた。「T:2人で旅するよ。どうやって座る?」、「C:2つ席に2人」「T:3人で旅に行ったら?」、「C:3つ席に3人」、「T:4人旅だったら?」ここで意見がわれた。「C:2つ席に2人ずつ」、「C:2つ席に2人と3つ席に2人」、「T:なるほど〜、色々な乗り方があるんだね。」と多様な意見を価値づけ、「T:でも今日はみんなで仲良くいきたい!」と強調した。「C:席がぴったりで行くってこと?」という発言から、(ア)ひとりぼっちはダメ、(イ)知らない人が来るかもしれないから、空席もつくらないというルールを定めた。

続けて、人数を増やしていく。「T: 5 人は?」, 「C: 簡単!」, 「T: 6 人だと?」 6 人の座り方を図にしていくなかで、「C: 先生、2 つあるよ!」と言う子が多数見られた。「T: 2 つの乗り方があるって言っているけど、気持ちわかる?」と問い返し、どういう乗り方があるのか共有した。その後、「C: だったら、2 の段の数は絶対行けるよ!」 「C: 1 0, 1 5 の 5 の段でも行けるはず」 「C: 3 の段の数も仲よく行ける!」といった「○の段だったら、行ける!」という声を全体に広めた。「C: だって、2 つ席に、2 人ずつ乗っていけば、2, 4, 6, 8・・・となっていくから、絶対大丈夫」という子どもの発言を再現させることで、3 の段の数字も仲よく行ける、5 の段の数字でも大丈夫という気づく子が増えてきた。

そんななかで、「C: 7は無理だ!」という声があがった。それに対して「C: いや, 7でも行ける!」というズレが生まれた。そして, 自分で図に書き込んだり, ペアで確認したりすることで「C: できる, できる!」の声が広がった。「2人席に2人ずつ」, 「3つ席で3人」について, リレー的に説明を行ったり, 図を式に表現させたりした。



〔『口人でいく、なかよし新幹線のたび』を学習した際の板書〕

そして、「T:何人でも仲良く行けそうだね」と問う。すると「C:いや、無理な数もある!」  
「C:11とか、13とか無理だ!」といったズレの声が生まれた。「T:11と13って無理なの?気持ちわかる人?」「C:11とか13ってかけ算に出てこない!」,「C:2や3や5の段にないから無理だ!」とできないと思う子が多数見られた。一方で、「C:いや、その数でも行ける気がする」「C:もし、こうしたら…」と図に示そうとしている子もいた。「だった

ら、無理な数があるのか、すべての数でも行けるのか調べていこう」と問いが生まれた。

子どもの今の問いに寄り添い、「1 1 や 1 3 など行けない数があるのか？」の思考で授業を進めた。実験を進めていくうちに「C:できるできる!」、「C:これも2つのパターンがある!」と次々に声のでてきた。1 1 人や 1 3 人でも行けるということを全員で説明や板書、図式化を子どもたちでつないで共有していった。「C:もしかして、本当に全部行けるんじゃない?」という意見が増えていった。

「2の段と3の段を使えば、すべての数をつくることができる」という理想のまとめまでは至らなかったが、「新幹線は、どんな数でも仲良く行くことができる」については、は理解することができたようである。

## 2. 実践を振り返って

今年は昨年度に引き続き、子どもが前のめりになり、自ら問いを見いだすような教材づくりや、導入での見せ方を工夫した。この単元での問題提示は、数値や場面をかくしたり、場面を動かしたりした。また不思議な事象を見せたり、手間がかかったりするような仕掛けをした。そうすることで、考えにズレが生じたり、「おかしい!」「ズルい!」といったつぶやきが出たりした。そこを切り口に本時のめあてが定められ、子どもが動き出すきっかけになったように思う。

昨年度の課題であった、子どもたちとの対話の中で、解決していくことについても力を入れた。教師の発問を工夫したり、問い返したりすること、子どもの価値あるつぶやきをキャッチして、価値付け、全体に共有することである。多様な考えを認めながらも、本質である数学的な考えに焦点を当て、仕組んでいく。「なんで?」「どうして?」といったモヤモヤを解決していく過程で、それぞれの立場で子どもはつぶやき、それを紡いでいくことが、クラス全員参加、全員理解につながるのではないかと考えた。「でもね〜」「もしも〜だったら」「たとえば〜なら」「まず〜次に〜」と子どもが使う言葉を称賛して、広めることもそうである。子どもが思考して語っていることや、「〜ですよ」と全体に確かめながら説明する時には、本時のなかのキーワードが生まれやすい。価値ある発言には、他の子にも説明させたり、ペアで再現させたりもした。

また、ふりかえりの時間も大切にできた。板書を見ながら、もう一度自分と向き合う時間を設けた。この1時間の流れ、この1時間で自分が変わったこと、それはだれの発言や考えからなのか具体的に書かせた。まだ文章力に乏しい子もいるが、継続して行うことで、自信をもって書く子も増えた。

しかし、まだ課題も山積みである。1時間の展開は工夫したが、その1時間の授業が単発で終わるような展開になっている。ふりかえりや授業の終盤で、子どもが新たな発見や問いを見出したり、場面を拡張したりするなど次時へつながるような連続性のある展開、次学年を意識した展開を目指していきたい。そのためには、子どもがどんな思考をするのかを事前に予想し、その時間内でどんな思考をしているのかを把握し、寄り添いながらどう促せばさらに思考は動き出すのかという次の一手を様々なパターンで用意しておかなければならない。まだまだ教材研究、子どものみとりなどを研究していく余地があり、これからも研鑽していきたい。

## 5 専任講師による研究の総括「子どもの思考を価値付ける」

関西大学初等部 尾崎 正彦

一年間に渡る連続講座が終わる。同じテーマで講座に参加し続けることで、先生方の授業に対する見方は確実に向上してきたことを実感している。それは、指導案作成演習や授業検討演習での先生方の姿に見ることができる。

「今の授業には、ズレはあったかな？」

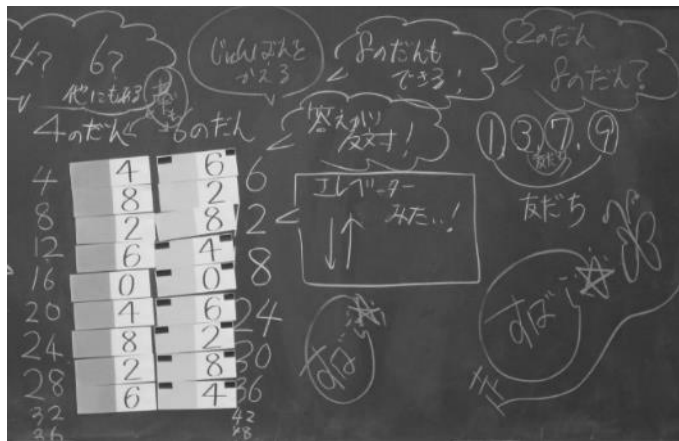
「この展開で、問題を解く必要感はあるかな」

「なんのために、この問題を解くのかな」

アクティブ・ラーニングのある授業を創る前提条件は、子どもが「問い」を持つことである。新学習指導要領の言葉を使えば、「主体的な学び」を具現することである。それを具現するための授業構成の一つの切り口が「ズレ」である。この視点で、先生方が自分の授業を構成したり、他の先生の授業を検討したりできるようになった点は大きな成果である。

算数の授業で大切なことは、ズレを切り口に構成された授業から浮かび上がってきた問いを授業の「めあて」とすることである。一般的に授業冒頭に教師から一方的に提示される「めあて」と、問いから生まれる

「めあて」は全く異なるものである。アクティブ・ラーニングのある算数授業を構成する上で必要なのは、問いから生まれる「めあて」である。筑波大学附属小学校の田中博史氏は一般的な「めあて」に対して、「あれは“めあて”ではなく、教師からの命令です」と述べている。「めあて」は子どもから生まれた「問い」でなければいけないのである。



〔2年 かけ算の学習場面における板書〕

さて、この一年間で先生方の授業を見る眼・授業構成のスキルは向上してきた。一方、課題もある。その最大のものは、子どもから生まれた価値ある考え方（数学的な考え方）を、教師がクラス全体に共有させ価値づけることが不十分なことである。ズレを感じた子どもたちは、自分の思いを自由に発信する。子どもには、どの発言や考え方に価値があるのかは分からない。それを分析し価値づけることができるのは教師しかいない。教師によって価値付けられた発言や考え方は、別の問題解決場面でも子どもから生まれてくる。この繰り返して、価値ある数学的な考え方が子どもたちに培われてくるのである。従って、子どもの考えの価値付けができる教師が担当するクラスの数学的な考え方は、日を追うごとに着実に向上していく。この意味でも、教師の役割は大きい。

ズレのある授業構成を考えるのは、授業開始前である。発言や考えの価値付けは、授業を展開しながらである。授業構成を考えて安心するのではなく、授業がスタートしたら子どもたちの声や表情を見極め、的確な価値付けを進めていくことが必要である。価値づけには、言葉での価値づけ、板書での価値づけ等がある。このことを意識して、楽しい算数授業創りの更なるレベルアップをめざしてもらいたい。

## 6 おわりに

平昌オリンピックで日本選手団主将を務めた小平 奈緒 選手は、スピードスケート女子500メートルで念願の金メダルを獲得するとともに、閉会式において国際オリンピック委員会会長より、競技を通じてフェアプレーと友好の大切さを世界に伝えた選手の一人としても紹介されている。

試合前後の記者会見などにおける豊かな表現力から「氷上の詩人」と称される小平選手は、「与えられるものは有限，求めるものは無限」，「自ら選択して，決断して，覚悟を決めて，成功も失敗も経験して，でもそれを全て正解だったと言い切るには，やはり改善していくための行動と自己管理が必要です。」など競技人生に基づく研ぎ澄まされた言葉が多くの人々の心を響かせています。また，「メダルを通してどういう人生を生きていくかということが大事です。」と語り，アスリートとしての自分を「求道者」「情熱」「真摯」の三つの言葉で表現している。

専任講師による継続した指導のもと，本研究部員も授業を究めるべく「求道者」となっており，算数授業創りに対する考えの変容とともに，自分の授業の問題点と「真摯」に向き合い，毎日の算数授業における研究や実践に「情熱」を注いできた様子が年間振り返りシートへの回答や記述からも伺えた。

特に，「導入場面などにズレをしかけ，問いを引き出す工夫」や「子どものつぶやきや問いに寄り添う」といった視点については，実践意識が高く，授業改善において一定の効果があったと考えられる。

その一方で，例えば，導入場面など一場面においては，子どものつぶやきや問いを引き出すことができるが，一時間単位または単元単位における持続性などに課題が感じられ，問いが「連続する」授業展開という視点においては，今後も引き続き，研究や実践を積み重ねていく必要があると考える。

次に，所属校における周知・伝達については，校内研究授業をはじめ，若手教員に向けた公開授業などが実施されている。また，校内研究会，職員会議，学年研究，若手教員勉強会などにおいて，主に研修内容等をまとめたプリントを通じて発信している。

さらに，市内全体に対しては，本部会の代表者による公開授業をはじめ，算数教育研究会研究授業，アクティブ・ラーニング推進事業に係る研究授業等を通じて発信している。兵庫県内教育研究所連盟研究発表大会においても代表者が本部会での学びや実践について発信している。

次年度も研究部員が所属校を中心として，研究部会における学びや授業実践をより一層普及するとともに，教師の「授業改善」を推進するリーダーとしての「啓発力」を高めていきたい。そのことにより，所属校内や市内においても日常的に教師同士が「学び合う場」が生まれ，活性化されていくことが望まれる。



【 参考・引用文献 】

『算数の授業がもっとうまくなる50の技』

著 者 尾崎 正彦 (明治図書出版株式会社 2017/6)

『アクティブ・ラーニングでつくる算数の授業』

著 者 尾崎 正彦 (株式会社東洋館出版社 2016/4/27)

『小学校 算数の授業づくりははじめの一步』

著 者 尾崎 正彦 (明治図書出版株式会社 2016/3)

『算数学力日本一への挑戦－問題解決型授業離脱の校内研修改革ヒント－』

著 者 尾崎 正彦 (明治図書出版株式会社 2014/10)

『すべての子どもを算数好きにする「しかけ」と「しこみ」』

編著者 山本 良和 著 者 子どもの心に「こだま」する算数授業研究会  
(株式会社東洋館出版社 2017/8/8)

『山本良和の算数授業 必ず身につけたい算数指導の基礎・基本55』

著 者 山本 良和 (明治図書出版株式会社 2017/7)

『漫画 君たちはどう生きるか』

著 者 吉野 源三郎 (原作) 羽賀 翔一 (漫画)  
(株式会社マガジンハウス 2017/8/24)

『君たちはどう生きるか』

著 者 吉野 源三郎 (株式会社マガジンハウス 2017/8/24)

## 主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング） の授業づくりを通して

### － 「アクティブ・ラーニング」の授業実践と校内での広まり －

情報教育担当係長 民谷 洋 二

#### 【内容の要約】

中学校の「アクティブ・ラーニング授業実践部会」は、市内全中学校から推薦された部員により組織された部会であるが、各校からは、可能な限り、昨年度の部員とは違う教員を推薦してもらおうようお願いをして、部会を組織した。

取組内容については、今年度も引き続き、次の2点を大きなねらいとする。

○アクティブ・ラーニングの授業づくりを通して、その重要なポイントを明確化することができる。

○上記の視点をもとに、教員向けの研修等をデザイン、実施することができる。  
年間7回実施される部会を通して、以下のような活動に取り組む。

○「アクティブ・ラーニング実践のポイント」について学ぶ。

○先行事例に学びながら、自らが「アクティブ・ラーニング」を授業で実践する。

○「アクティブ・ラーニング実践」について、考えを深める。

○「シンキングツールの活用」について学ぶ。

○部会での内容等を、校内でどのように広めるかを考える。

○自分以外の教員（できれば他教科）も巻き込んで、「アクティブ・ラーニング」の授業実践を広める。

キーワード：主体的・対話的で深い学び、授業実践事例の積み重ね、校内での広まり、シンキングツール

- 1 はじめに……………
- 2 研究について……………
- 3 研究経過について……………
- 4 アクティブ・ラーニング通信について……………
- 5 終わりに（研究のまとめ）……………

## 1 はじめに

教職員の学び支援課が、昨年度から実施している「アクティブ・ラーニング学習モデル研究事業」では、求める成果として「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）の効果的な活用により、教員の授業力向上を図り、児童生徒の学力向上をめざす。」と示している。

市内全中学校17校から推薦された部員により組織された「アクティブ・ラーニング授業実践部会」では、「これから必要とされる資質・能力の育成をめざし、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的に学ぶ学習の充実と尼崎の子どもたちに適した学習・指導方法を学び、市内への普及を図るとともに指導方法の工夫改善を一層推進する」ことを目的とし、部会を通じて「アクティブ・ラーニング授業実践」について学び、その内容等を各学校及び市内全体に広めることをめざす。

2年目を迎える今年度は、各中学校に、可能な範囲で、昨年度と違う教員を部員として推薦していただくようお願いした。校内に、本部会で学んだ先生が複数名いることで、その取組等が、より一層、校内で広まっていくことを期待してのことである。

昨年度の取組を通じて積み重ねた実践事例をもとに、今年度も多くの実践事例を積み重ねながら、各学校での「アクティブ・ラーニング授業実践」の推進につなげたい。

昨年度に引き続き、授業実践部会には、大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授の寺嶋浩介氏と鳴門教育大学大学院学校教育研究科講師の泰山裕氏を専任講師にお迎えして、年間の活動に取り組んだ。

## 2 研究について

### (1) 研究について

本授業実践部会の研究・活動については、第1回部会の中で、寺嶋氏から次のように示された。

まず部会の開催にあたって「互いに学び、広げよう」と、次の5点を確認した。

- ICTは必ずしも、必要ではない。アクティブ・ラーニングの本質を追究しよう。
- みんなが参考となる地に足ついた取組をし、互いから学び合おう。
- 教科を越えた「中学校での日常の授業改善」をしよう。
- 成果を市内の先生方へ還元し、広げよう。
- まずは、自分たちがアクティブに取り組み、楽しもう。

次に、「この講座の大きなねらい」として、次の2点を示した。

- アクティブ・ラーニング（AL）の授業づくりを通して、その重要なポイントを明確化することができる。
  - ・アクティブ・ラーニングの特徴がわかる。
  - ・アクティブ・ラーニングの授業づくりや実施のポイントがわかる。
  - ・授業実践事例集としてまとめる。
- 上記の視点をもとに、教員向けの研修等をデザイン、実施することができる。
  - ・研修のデザイン・実施技法を習得できる。
  - ・普及できる。

また、授業実践事例集につながる具体的な取組として、「アクティブ・ラーニング通信」の作成をしていくことを伝えたり、ICTの活用にこだわることなく、アクティブ・ラーニング授業実践のツールとして、「ホワイトボード（まなボード）」（書き込みができる透明シート付きのホワイトボード）の活用を紹介し、第1回部会で、各学校に10枚の「ホワイトボード（まなボード）」を配布した。

## （２） アクティブ・ラーニング授業実践部会 部員について

部員については次のとおり、昨年度と同様に、国語、数学、理科、社会、英語の5教科の教員が参加した。

| 中学校名     | 教員氏名   | 教科 |
|----------|--------|----|
| 成良中学校    | 山下 賢二  | 数学 |
| 中央中学校    | 眞喜屋 実之 | 数学 |
| 日新中学校    | 川口 智枝子 | 国語 |
| 小田中学校    | 山本 裕   | 英語 |
| 小田北中学校   | 久井 瞭   | 社会 |
| 大成中学校    | 窪野 春生  | 数学 |
| 大庄中学校    | 山本 綾   | 数学 |
| 大庄北中学校   | 西村 歩樹  | 理科 |
| 立花中学校    | 池本 浩之  | 数学 |
| 塚口中学校    | 上野 泰輔  | 国語 |
| 武庫中学校    | 田原 俊記  | 国語 |
| 南武庫之荘中学校 | 寺岡 亮   | 理科 |
| 武庫東中学校   | 柏木 千裕  | 数学 |
| 常陽中学校    | 福田 量   | 国語 |
| 園田中学校    | 山下 雅啓  | 英語 |
| 園田東中学校   | 磯田 秀行  | 社会 |
| 小園中学校    | 佐久間 直紀 | 社会 |

## （３） 年間の活動について

年間の活動については、以下のとおりである。

| 部 会 | 実施日   | 曜日 | 場 所      | 内 容                                                                 |
|-----|-------|----|----------|---------------------------------------------------------------------|
| 第1回 | 5月25日 | 木  | 教育総合センター | アクティブ・ラーニングのポイント<br>自己紹介（今年度の取組について）<br>先行事例から学ぼう<br>ホワイトボードの活用について |
| 第2回 | 7月27日 | 木  | 教育総合センター | 1学期の授業成果報告<br>アクティブ・ラーニングに対する疑問について                                 |
| 第3回 | 8月9日  | 水  | 教育総合センター | シンキングツールの活用について<br>アクティブ・ラーニングに対する疑問点について考える                        |
| 第4回 | 9月21日 | 木  | 教育総合センター | アクティブ・ラーニングについて考えを深めよう<br>アクティブ・ラーニングを校内でどのように広めるか                  |

| 部 会 | 実施日   | 曜日 | 場 所      | 内 容                                                                         |
|-----|-------|----|----------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 第5回 | 12月1日 | 金  | 教育総合センター | 各学校でのアクティブ・ラーニングに関する取組の交流<br>昨年度部員(修了生)からの体験談<br>アクティブ・ラーニングを校内で広めるポイントについて |
| 第6回 | 1月23日 | 火  | 教育総合センター | 2学期の授業成果報告<br>学力向上担当者研修会への参加                                                |
| 第7回 | 2月15日 | 木  | 教育総合センター | 年間の授業成果報告<br>本年度のまとめと次年度に向けて                                                |

### 3 研究経過について

#### (1) 第1回 平成29年5月25日(木) 教育総合センター 602号室

##### 1. 「アクティブ・ラーニング実践のファーストステップ」

(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授 寺嶋 浩介 氏)

##### ①アクティブ・ラーニング概論

##### ②アクティブ・ラーニングの学習過程の3要素

- ・学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結びつけていく「主体的な学び」
- ・多様な人との対話や先人の考え方(書物等)で考えを広げる「対話的な学び」
- ・各教科等で習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせて、学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いをもとに構想・創造したりする「深い学び」

##### ③アクティブ・ラーニングを意識する価値

- ・本時レベルでは…  
生徒主体の割合が多い授業で、楽しく意欲的に学べる
- ・単元レベルでは…  
学んだことについて、質的に深い定着を図る
- ・年間カリキュラムレベルでは…  
学んだことを利用して、問題を解決する(主体的学び)
- ・学校カリキュラムレベルでは…

| アクティブ・ラーニングを意識する価値 |                                    |
|--------------------|------------------------------------|
| 本時レベル              | 生徒主体の割合が多い授業で、 <b>楽しく、意欲的に</b> 学べる |
| 単元レベル              | 学んだことについて、 <b>質的に深い定着</b> を図る      |
| 年間カリキュラムレベル        | 学んだことを利用して、 <b>問題を解決する(主体的学び)</b>  |
| 学校カリキュラムレベル        | <b>汎用的能力</b> が育成され、未知の問題を解決できる     |

##### 【アクティブ・ラーニングを意識する価値】

汎用的能力が育成され、未知の問題を解決できる

##### ④アクティブ・ラーニング設計の4原則ー

- ・課題を設定する
- ・子どもが主体的・協働的に取り組むことの意義を明確にする
- ・子どもが情報に出会い、整理・思考し、発信する
- ・振り返らせる

### 解決すべき「課題」を示す

- ・パフォーマンス(外部に現れる行動)で示す
- ・どのような条件のもとでできればよいかを示す
- ・解決できる「課題」か？
  - － 解決のための前提知識を明確し、それを生徒にもたせておく
  - － 知識以外の学力として何が必要なのかを明確にする

### 課題の例

- ・ 3種類の金属のうち、2種類を電極として組み合わせる場合、必ず＋極(陽極)になる金属は存在するのか。その存在の有無について、その根拠となる映像と解説の図を添えて、班としてひとつの答えを出しなさい。(中・理)
- ・ 日本の食料自給率が低い状況と、高い(輸入に頼らない)状況とで、どのような違いがあるかを、各グループで意見を作り、説明しなさい。(小・社)

#### 【課題を設定する 1 (課題を示す)】

#### 【課題を設定する 2 (課題の例)】

### 子どもが動機づけられる「課題」

#### ARCSモデル

- ・ 面白そうな課題か？ 主
- ・ 自分に関係がありそうな課題か？ 主
- ・ やってみれば、何とかできそうな課題か？ 主、協
- ・ 解決したら、達成感が得られそうな課題か？ 主、協

子どもが行う  教師が設定する

#### 【課題を設定する 3 (子どもが動機づけられる課題)】

### 主体的・協働的に 取り組むことの意義を明確にする

- ・ 子どもにとって出される成果物にメリットがある場合
  - －  $0.5+0.5=1$  (例:ジグソー学習)
  - －  $1+1=3$  (新しい価値の創造)
- ・ プロセスにメリットがある場合
  - － 他の人を見て、「なるほど、こうすればいいんだ」と考え、次に活かすことができる(スキル)
  - － 他の人と一緒に取り組んで、達成感がある(情意面)
  - － 他の人にはない自分の良さの発見(情意面)

#### 【主体的・協働的に取り組むことの意義を明確にする】

### 子どもが情報に出会い、 整理・思考し、発信する場面づくり

- ・ 子どもが情報に出会う
  - － 必要な情報を用意する
  - － 子どもの実態に応じて、広げたり、絞ったりする
- ・ 子どもが情報を整理し、思考する
  - － シンキングツールの活用
- ・ 子どもが発信する
  - － まなボードの活用
  - － すぐ書ける、みんなで情報を共有しやすい

#### 【子どもが情報に出会い、整理・思考し、 発信する場面づくり】

### 振り返らせる

- ・ 自分たちがどう考えて、問題解決に至った(至らなかった)のか
- ・ (至った場合)  
何が効果的に機能し、問題を解決できたのか
- ・ (至らなかった場合)  
知識のなさが問題なのか、  
解決方法に問題があったのか  
教師にとって、授業づくりに対する評価にもなる

#### 【振り返らせる】

#### ⑤アクティブ・ラーニングの段階制をどう見るか

- ・ 第一段階は、生徒自らが少しでも楽しく、学べるように工夫すること。
- ・ 第二段階は、生徒が納得でき、必要性がある形で、知識・技能を習得していくこと。
- ・ 第三段階は、生徒が得られた知識や技能を活用する場面を取り入れていくこと。

- ・第四段階は、単元間の連携や教科を越えた能力やスキル獲得を視野に入れていくこと。

## 2. 「自己紹介」

初めてのグループワークなので、まずは自己紹介を行った。

自己紹介の前に、次の2点を示し、自己紹介の話の中に入れてもらうよう、まずは個人で考える時間を設けた。

- ・この1年で、自分が部会員として学校に貢献できそうなことを考えてみましょう。
- ・各2分で、自身の学校の学力上における課題を、自校の「学力向上アクションプラン」を用いて説明してみましょう。

これは、アクティブ・ラーニングによる授業改善を、自校の学力向上における課題の改善につなげることができないかとの考えからで、そのためにも、まずは課題の把握をしっかりとしたいとのねらいがあった。

## 3. 「先行事例から学ぼう」

今年度の研究にあたって、昨年度との大きな違いは、すでに「先行事例がある」ということである。実際に、今年度の部員が「まずやってみよう」という時に、昨年度の事例を参考にしたという声もあった。

①昨年度部会の年間の取組紹介

②冊子『平成28年度アクティブ・ラーニング通信のまとめ』から5つの事例紹介

## 4. 「ホワイトボード（まなボード）」の活用事例紹介

「ホワイトボード（まなボード）」を、各校10枚ずつ配布した。

## 5. 次回までの課題について

「アクティブ・ラーニング通信（AL通信）」1号を作成する。次回までに実施したアクティブ・ラーニング授業実践のうち「ベスト2」を選び、通信にまとめる。

2つの実践については、最低限、次の項目を盛り込む。「教科、指導略案、使用した教材、ALのポイント、生徒の反応」。

## (2) 第2回 平成29年7月27日（木） 教育総合センター 601号室

ねらいを「自分たちなりの【良いアクティブ・ラーニング】について、説明することができる」ことと「アクティブ・ラーニング一般について、疑問点を明確にできる」こととして、それぞれが作成した「AL通信第1号」をもとに、1学期の授業成果報告を行った。

1. それぞれがまとめた「AL通信第1号」の中から、グループ内で「これはよい」と思う実践を決定し、グループの代表者が発表することで、全体でも共有する。



2. 「良いと思うアクティブ・ラーニング」について共有する。

- ①「良いと思うAL」について、付箋に書く。
- ②共有し、グルーピングする。
- ③グループごとに発表し、全体で共有する。



3. 「良いと思うアクティブ・ラーニング」で出た意見

- ・学んだという実感が得られる。
- ・振り返り活動を通して、生徒自身が課題に気づく。
- ・個人の意見が出しやすいので、付箋を使用してグループで意見交換してまとめる。
- ・全校で共通した取組
- ・考える力（課題を解決する力）が身につく。
- ・ひとりひとりが自分なりの考えをもつことができる。
- ・「わからない」や「なんで？」が言える。
- ・ペア学習やグループ学習。
- ・全員参加しやすい。
- ・他の教科にも活かせる。
- ・ICTなどを使ってイメージしやすい。

4. グループで、アクティブ・ラーニング一般についての疑問点を、できるだけ出してみる。

まとめると、次のような疑問点が出されたが、それについては、次回（第3回）の部会で回答につながるような取組を行うこととした。

①意義・意味について

- ・アクティブ・ラーニングの定義について
  - －何をすればアクティブ・ラーニングなのか
  - －協働学習、話し合いの場面があれば、それはアクティブ・ラーニングと認定されるのか
- ・アクティブ・ラーニングの意義について
  - －高校進学に結びつくのか
  - －本当に学力はつくのか

②形態、実際について

- ・時間運用について
  - －毎時間入れないといけないのか
  - －アクティブ・ラーニングを行うことで授業が遅れてしまわないか



- ・ ツール，手法について
  - ー ツールとしては，ホワイトボード以外に何があるのか
  - ー 簡単に取り入れられる手法はあるのか

③評価について

- ・ 評価をどのようにつけるのか
- ・ アクティブ・ラーニングでの学力が向上したことをはかる方法には，どんなものがあるのか

④普及について

- ・ 校内研修をしても，結局「アクティブ・ラーニングって何？」がわからなくて，やってみようと前向きになれない先生が多い現状をどうすればよいのか
- ・ 全教科でアクティブ・ラーニングの取り入れ方を共通することは可能なのか
- ・ 教師のアクティブ・ラーニングに対する認識の差をどう解消すればよいのか

⑤不安

- ・ 授業規律の整っている状態でないと，グループワークは私語が増えるだけではないか
- ・ 個々の生徒が，後から学習内容を復習することが難しいのではないか

(3) 第3回 平成29年8月9日(水) 教育総合センター 601号室

前半は，シンキングツール（思考ツール）の活用について学び，後半は，前回の部会で出た「アクティブ・ラーニング一般についての疑問点」をもとに，考えを深める取組を行った。

1. 「アクティブ・ラーニングのネクストステージ（思考ツールの活用）」

（鳴門教育大学大学院学校教育研究科講師 泰山 裕 氏）

①学校教育で育てるべき「思考力」「考える力」とは何か，を考えてみる。

②「考える」のイメージは，以下のとおり。『考えてごらん』とは？

- ・ 多面的にみる ・ 変化をとらえる ・ 順序立てる ・ 比較する ・ 分類する
- ・ 変換する ・ 関係づける ・ 関連づける ・ 理由付ける ・ 見通す
- ・ 抽象化する ・ 焦点化する ・ 評価する ・ 応用する ・ 構造化する
- ・ 推論する ・ 具体化する ・ 広げてみる ・ 要約する

③授業中に行われる「思考」の種類⇒具体化することで，思考を診とり，支援する。

- ・ 「生徒が何を考えるのか」 ・ 「先生が何を考えてほしいのか」
- ・ 「それをどう支援するのか」 ・ 「それをどう把握するのか」
- ・ 「なぜ考えられないのか」

④「思考スキル」…「考える方法」を指導する。

⑤「考え方」を示し補助するツール ⇒「シンキングツール」

⑥シンキングツールを活用することで

- ・ 具体化 … この授業で行っている「考える」は何か明示する。
- ・ 可視化 … シンキングツールに書き込むことで考えを可視化する。
- ・ 過程の共有 … 意見の途中や根拠を明示し，思考の過程を共有する。

⑦シンキングツールを選ぶ。

- ・これまでの教科等の指導で大事にしてきた思考はどの思考か。
- ・それに対応するシンキングツールは何か。

⑧やってみましょう「どんなシンキングツールをどう使うか」



【フィッシュボーンというシンキングツールを使って意見交流】

⑨まとめ

- ・アクティブ・ラーニングを通してどのような「見方・考え方」を育てるのかを意識する。→単に「考える」ではなく、「考える方法」の視点で具体化する。
- ・前ページの「考える」のイメージを、目的に応じたシンキングツールを活用して、具体化する。

2. 「アクティブ・ラーニング一般についての疑問点」について、考えを深める

前回の部会で出た疑問点について、寺嶋氏、泰山氏、担当指導主事によるパネルディスカッションを行い、部員の先生と一緒に考えを深めながら、疑問の解消に近づいていく取組を行った。以下、一部ではあるが、疑問点についての回答等をまとめた。

①意義・意味について

- ・「学力がつくのか」という疑問については、アクティブ・ラーニングも二通りに分けられる。
  - 知識・理解については、「教えたつもり、わかったつもり」になっていないか。習得するためには、それを活用する必要がある。
  - 活用力については、説明や論述の際、判断基準を出させることなどで、力を伸ばすことにつながる。
- ・「アクティブ・ラーニングの定義について」は、次のページの資料のとおり。話し合いの場面を取り入れているのは条件の一つとなるかもしれないが、「アクティブ・ラーニングの一般的特徴」を満たしきれているとは言えない。

**アクティブ・ラーニングに関する議論**

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)  
(平成24年8月28日)用誌集より

**「アクティブ・ラーニングとは、学生にある物事を行わせ、行っている物事について考えさせること」**

邦訳は、松下佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授) 編著『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』序章より  
Active learning: Creating Excitement in the Classroom (Bonwell & Eison, 1991)

**(アクティブ・ラーニングの一般的特徴として挙げられる点)**

- (a) 学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること
- (b) 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
- (c) 学生は高次の思考(分析、総合、評価)に関わっていること
- (d) 学生は活動(例:読む、議論する、書く)に関与していること
- (e) 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれていること
- (f) 認知プロセスの外化※を伴うこと

※問題解決のために知識を使ったり、人に話したり書いたり発表したりすること

(参考) 指導における「双子の過ち」  
「網羅に焦点を合わせた指導」  
「活動に焦点を合わせた指導」

松下佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授) 編著『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』序章より  
アクティブ・ラーニングの一般的特徴は「Active Learning: Creating Excitement in the Classroom (Bonwell & Eison, 1991)」に基づき著者が再構成  
「双子の過ち」は「Understanding by design」(Wiggins & McTighe, 2005)より 189

**教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)**  
補足資料より

## 【アクティブ・ラーニングの定義 ～アクティブ・ラーニングに関する議論から～】

### ②形態, 実際について

- ・「毎時間取り入れないといけないのか」という疑問について、まずは、教えるべきことの厳選が必要であり、毎時間同じように一般化はできないが、学んだことを適用する場面を作ることを心がけたい。そうしないと「教えた」という事実だけが残る、生徒が「学んだ」ことにならないのではないかな。
- ・「簡単に取り入れられる手法はあるのか」という疑問については、結論から言えば、どんな場面でも簡単に取り入れられる手法はなく、例えば、「グループで議論する」という活動の一つとっても、「お互いの多様性を理解する議論」や「一つの結論を出す議論」、「生徒が調べてまとめていく議論」と様々あるので、先生もいろいろなことをヒントにして、手法を考えていくことが必要ではないかな。

### ③評価について

- ・評価は、どのような学力をねらうのかで変わる。A学力だと、ペーパーテストではかれる学力なので、言語的な情報はテストでそのまま評価につなげて、知的技能であれば、新しい適用場面を課す等、考えられる。B学力は、パフォーマンス課題ではかることになるが、テストであれば、論述式のものを取り入れることになるのではないかな。その際には、評価の指標(ルーブリック)を明確にしておきたい。

### ④普及について

- ・アクティブ・ラーニングという言葉を経験しすぎると、とらえようがいろいろと出てきてしまう可能性も確かにある。ただ「考えさせる」のではなく、まず適切に教え、そこから考えさせる授業が、基本としては重要ではないかな。

⑤不安

・「まず、やってみよう」そして「改善していこう」という気持ちを、教員間で共有できればよいと思うが、学校の実情に合わせて、進めるのがよいのではないか。

3. AL通信第2号と第3号について

①第2号は「自分以外の先生にアクティブ・ラーニング授業実践をしてもらい、そのうち実践ベスト2の報告をする」。

②第3号は「アクティブ・ラーニング授業実践年間ベスト1の報告」と「アクティブ・ラーニングを広めるための校内での取組」について。

(4) 第4回 平成29年9月21日(金) 教育総合センター 601号室

「アクティブ・ラーニングを校内で広めるための研修」について、研修づくりについて学び、「良い研修とは何か」を考え、意見の交流しながら、実際に研修づくりを行った。

1. 「アクティブ・ラーニングへの理解を深める」グループワークを行う。

前回の、「疑問点を解消するパネルディスカッション」の内容をふまえて、4つのテーマを用意し、部員どうしでテーマについて意見交換する中で、「自分でテーマについての説明ができれば、より深くアクティブ・ラーニングを理解したことになる」として、グループワークを行った。テーマは、以下のとおり。

①アクティブ・ラーニングとは何か？

何をすればアクティブ・ラーニングと言えるのか、なぜアクティブ・ラーニングをする必要があるのか。

②アクティブ・ラーニングのための手法

アクティブ・ラーニングに適したツールは？

③アクティブ・ラーニングの導入

アクティブ・ラーニングをどうやって授業に導入するのか？何から始めればいいのか？時間はどれくらい使えばいいのか？

④アクティブ・ラーニングの評価

アクティブ・ラーニングの成果をどのようにとらえ、評価すればいいのか。

2. これまで受けた研修で「良かったと思う研修」について共有する。

①これまで受けた研修の中で、良かったと思う取組を箇条書きで書き出す。

②グループで、その理由とともに共有し、グルーピングする。

③グループごとに発表する。例えば、次のような意見があった。

- ・今すぐにでも使える内容の研修
- ・生徒の立場になって授業を受けてみる
- ・実際のケースについて、具体的にどうするかを話し合う研修
- ・自分がまったく知らない分野について学べた研修
- ・事前にアンケートをとり、何が知りたいのかがわかったうえでの研修
- ・エビデンスがある研修
- ・実践事例が聞ける研修



### 3. 「研修づくりのステップを考える」

①講義型研修と参加体験型研修について。利点は？欠点は？

②ワークショップとは。

- ・ 3つの特徴「参加」「体験」「相互作用」
- ・ 基本構造「導入」→「知る活動」→「創る活動」→「まとめ」

③まとめ

- ・ ワークショップ型研修には、次のように、基本となるスタイルや原則がある。  
→ 「ワークショップ」とは、講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して、共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル。
- ・ しかしながら、「こうすればワークショップ型研修が必ずうまくいく」という「唯一の正解」があるわけではない。
- ・ けれども、ワークショップ型研修の特徴や目指すものを理解した上で、デザインしてみることが重要である。

### 4. 「アクティブ・ラーニングに関する校内研修の内容を考えよう」

①グループで研修内容を考える。

- ・ 目的は？何を説明するか？どのような活動を展開するか？

②短時間研修（30分）と中時間研修（90分）

③グループごとに発表し、全体で共有する。

## （5） 第5回 平成29年12月1日（金） 教育総合センター 601号室

テーマを「アクティブ・ラーニングを校内に広めるための取組や工夫」として、各学校での取組や工夫、そして、成果や課題について意見を交流した。

### 1. 個人でワークシートに取り組む（部会終了後に提出する）。

ワークシートの質問項目は、以下のとおり。

- ①アクティブ・ラーニング（AL）を取り入れた授業を広める工夫やポイント等があれば、教えてください（視点としては… a 自分で取り組む b 数名の教師を巻き込んで取り組む校内で取り組む…等）。
- ②ALを校内に広めるための取組や工夫について、教えてください（a 校内研修 b 校内研究授業・研究協議 c 校内の研究推進体制 d AL通信等の活用…等）。



- ③A Lを校内に広めるための取組や工夫について、その成果や課題・改善点があれば、教えてください。
2. ワークシートをもとに、グループで各学校の取組等について意見を交流する。
3. 修了生（昨年度の部会参加者）からの体験談を聞く。
- 昨年度、部会に参加した先生の中から1名をゲストティーチャーとして招き、部会で学んだ内容等を今年度、学校の中でどのように活かしているのかを、経験談を通して話してもらった。

- ①職員研修について
- ②公開授業について
- ③教具・方法について

今年度、研究推進担当を務める立場として、具体的な取組の事例をまじえた話に、部員の先生も熱心に聴き入っていた。

## AL授業実践部会

～修了生からの体験談～

<内容>

はじめに

①職員研修について

②公開授業について

③教具・方法について

まとめ

平成29年12月1日(金)

14:30～14:45

尾崎市立岡田東中学校

研究推進担当 和田鐘



### 【修了生からの体験談】

4. 「アクティブ・ラーニング 校内に広めるための手立てや工夫」  
(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授 寺嶋 浩介 氏)
- 寺嶋氏から、「校内研修」「校内研究授業」「校内の研究推進体制」の3つの視点から、指導助言をいただいた。
- ①アクティブ・ラーニング校内研修のパターン
- ・背景や意義について説明する。
  - ・一般化する（良いアクティブ・ラーニングとは）。
  - ・A L通信等の事例を活用する（先行事例になる）。
  - ・（可能なら）アクションプランを立ててもらう。
  - ・良いと思う実践について事例をもとに話し合う。  
ー「なぜ良いのか」が重要。
- ②「アクティブ・ラーニングは曖昧だ」→どう語り合うか。
- ・特定の型はないが、とりあえず特定の型からチャレンジする。
  - ・自分たちで意味づける。
- ③校内授業研究
- ・教科が異なるので、何を共通の基盤とするか。
  - ・生徒の取組や関わりから見るのがよいか？教師には何が問われるか？

④校内授業研究「意味づけるための言語を持つておく」

- ・ 3つの視点「主体的」「対話的」「深い」学び
- ・ 生徒の学び          ・ 通常の授業の仕組み

⑤「授業をどう見るか」

- ・ 授業の目的（ねらい）は明示されているか？
- ・ 導入の（活動までの）時間の長さは適切か？
- ・ 生徒の活動にもっと置き換えられないか？
- ・ 話し合いにグラウンドルールはあるか？
- ・ 生徒に定着させられたか？

⑥寺嶋氏がアドバイザーとして工夫していること

- ・ 授業者に感謝          ・ 良い点について意味づけする
- ・ 一方的に語らず、授業者に尋ねる          ・ 全部は言わない
- ・ 主要な点を3点程度述べる          ・ 次の機会につながるように
- ・ 「持続可能」をキーワードに

⑦校内の研究推進体制 ～うまく取り組んでいる事例では～

- ・ ひとりで取り組んでいない（仲間と）。
- ・ 取組の工夫 … 段階的に。実践の交流。全員参加型の活動。新たなメンバーへの配慮。
- ・ 発信や連携 … 自校版AL通信の作成。教育委員会等の組織との連携。アドバイザー等講師への依頼。
- ・ 効果となるデータの蓄積 … 学力調査。子供の姿。

5. 「アクティブ・ラーニングを校内に広めるポイント」を考えよう！

- ①「ALを校内で広める工夫等」のポイント  
を個人で考える。
- ②グループで共有し、グルーピングする。
- ③グループを合わせて2つのグループにし、  
さらにグルーピングする。
- ④2つのグループの意見を全体で共有する。



(6) 第6回 平成30年1月23日(火) 教育総合センター 601・701号室

まず、「AL通信第2号」をもとに、実践事例の交流を行った。その後、学校教育課と共催で実施する「学力向上担当者研修会」に参加した。

1. AL通信第2号（自分以外の先生の、アクティブ・ラーニング授業実践）を全校分  
まとめた資料をもとに、事例を共有する。



## 2. 学力向上担当者研修会

小・中学校の学力向上担当者が出席し、以下のような内容で、研修会を行った。  
本部会も含めたアクティブ・ラーニング学習モデル研究事業の活動報告も行い、部会の専任講師である寺嶋氏から指導助言をいただいた。

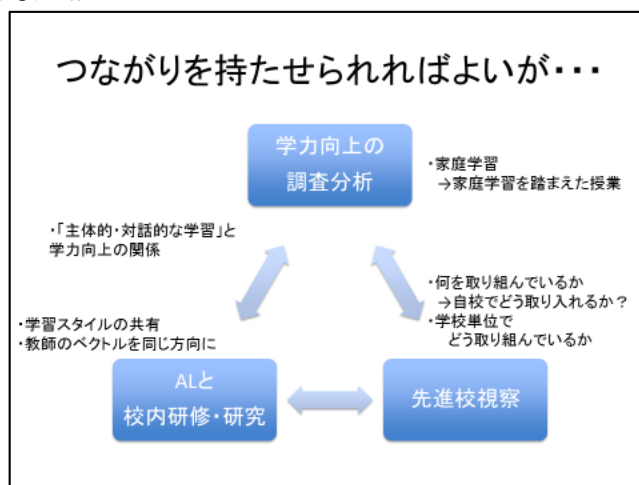
- ①教育委員会事務局等による先進校視察報告（学校教育課、学びと育ち研究所）
- ②各校における先進校視察報告（小学校1校、中学校1校）
- ③全国学力・学習状況調査に係る報告（学校教育課）
- ④アクティブ・ラーニング授業実践部会報告（教職員の学び支援課）
- ⑤指導助言（大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授 寺嶋 浩介 氏）

・「本日の会の位置づけは？」

- －施策を分断してとらえないこと。（学力向上、アクティブ・ラーニング）
- －各学校のアクションプランの振り返り
- －次年度アクションプラン設定のきっかけに
- －校内でひとりで取り組まないように
- －学校を越えて取り組めるように

・つながりを持たせられればよいが…

- －学力向上の調査分析
- －ALと校内研修・研究
- －先進校視察



【それぞれの取組等のつながりが必要】



- ・アクティブ・ラーニングの良い点は？
  - ー知識を活用することを求める
  - ー学習内容以外のスキルを志向している（問題解決能力、情報活用能力、等）
- ・アクティブ・ラーニング授業実践部会では
  - ー「型」を決めない（対話による意味づけを重視する）
  - ーアウトプット方法の例を提供する（ホワイトボードの活用等）
  - ー非参加者でも内容が簡単にわかるように（AL通信）
  - ー校内研修の進み方を考える場を入れる
- ・「校内で広げるには」
  - ー講師任せにするのはやめよう      ーまず自分たちが、アクティブに進めよう
  - ー学んだことを発展させる場を入れよう      ー研修での知見を参考にしよう

**（７） 第７回 平成 30 年 2 月 15 日（木） 教育総合センター 601号室**

各学校のAL通信1号～3号を一冊の冊子にまとめ、成果物として配布した。

それをもとに、部員がグループワーク形式で実践報告を行い、活発な意見の交流が行われた。

最後に、年間の活動のまとめとして、専任講師の寺嶋氏、泰山氏から講評をいただいた。

1. 実践事例発表グループワークⅠ
2. 実践事例発表グループワークⅡ
3. 各グループで、どのような意見交流      ができたか、全体で共有する。



4. 講評「アクティブ・ラーニング部会まとめ AL通信の実践から」  
（鳴門教育大学大学院学校教育研究科講師 泰山 裕 氏）

※詳細は「5 終わりに」に記載する。

## 5. 閉会あいさつ

(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科准教授 寺嶋 浩介 氏)

### ①アクティブ・ラーニングを推進し、成果を把握する（実践を共有する）

- ・共通化…自分たちの実践を意味付け、一般化する
- ・個性化…多様な実践を共有し、自身の授業を改善していく
- ・体系化…カリキュラムを通して汎用的な能力を体系的に育てる

#### アクティブラーニングを推進し、 成果を把握する(実践を共有する)

|     |                           |                        |
|-----|---------------------------|------------------------|
| 共通化 | 自分たちの実践を意味付け、一般化する        | 授 校<br>業 内<br>研 究<br>修 |
| 個性化 | 多様な実践を共有し、自身の授業を改善していく    |                        |
| 体系化 | カリキュラムを通して、汎用的な能力を体系的に育てる |                        |

【アクティブ・ラーニングを推進し、  
成果を把握する（実践を共有する）】

### ②終わりに

- ・「ゆるくいこう」ーやってみるとけっこうよかったと思える  
ー生徒が慣れる、生徒のほうが早く慣れる
- ・「教科を越える」ーいろんな教科でできそうな方法を  
ートータルでつきたい力は何かを明確に

## 6. 事後アンケート

最後に、部員にアンケートを実施したが、その中から、自由記述の設問についての回答を一部紹介する。

### ①「ご自身の学校で、アクティブ・ラーニング授業実践部会での取組等を、どのように周知していますか。教えてください。」

- ・職員会議の「研修及び出張報告」の際に、短時間で簡潔に伝えている。
- ・1年のまとめの際に、研究資料の中に、実践部会での活動報告を入れた。
- ・AL通信を全職員に配布しています。
- ・3月に行う職員会議で1年間の取組報告を行う。
- ・アクティブ・ラーニング白板を職員室に設置し、写真や情報を提示して、意識向上に努めた。

### ②ご自身の学校で、アクティブ・ラーニング（主体的で対話的な深い学び）が広まっていると感じることはありますか。感じるとすれば、どのようなことからですか、教えてください。」

- ・研究推進内では広まってきており、来年度は教科ごとに広めていきたい。

- [illegible]

## 5 終わりに（研究のまとめ）

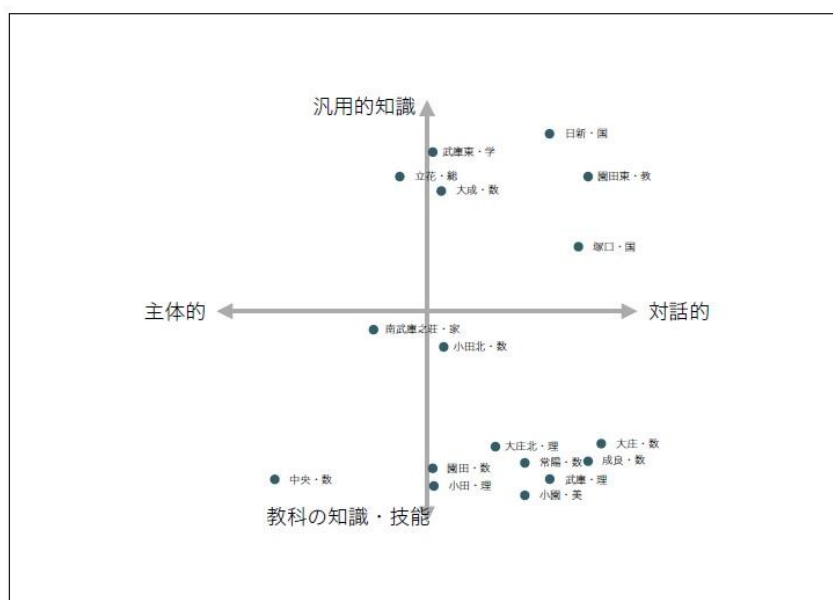
前述の、第7回部会の中で、専任講師の泰山氏から講評をいただいた。

ここでは、その内容をまとめることで、今年度の授業実践部会のまとめとしたい。

### （1）AL通信の分類

各部員により作成されたAL通信を分類し、授業実践事例からわかることを整理した。

1. アクティブ・ラーニングの視点に基づいた授業改善が見られた。
2. 「対話的な学び」及び「主体的な学び」については、通信から読み取れた。  
→ 主体・対話のどちらを重視しているか。
3. 「対話的な学び」及び「主体的な学び」がどのような「深い学び」につながっているのか。 → 「教科の知識・技能」か「汎用的知識」か。



【AL通信を分類】

### 4. アクティブ・ラーニングを広げるための工夫

- ①授業のイメージを共有する
- ②実践を重ねて子どもの姿を共有する
- ③無理のない範囲から少しずつ
- ④「ちょっとやってみよか」のためには、手軽に使える道具も大切

### （2）アクティブ・ラーニングをさらに進めるために

泰山氏からは、アクティブ・ラーニングをさらに進めるためには、まず「目的を共有すること」、すなわち「何のためのアクティブ・ラーニングか」を共有することが大

切であるとの話があった。

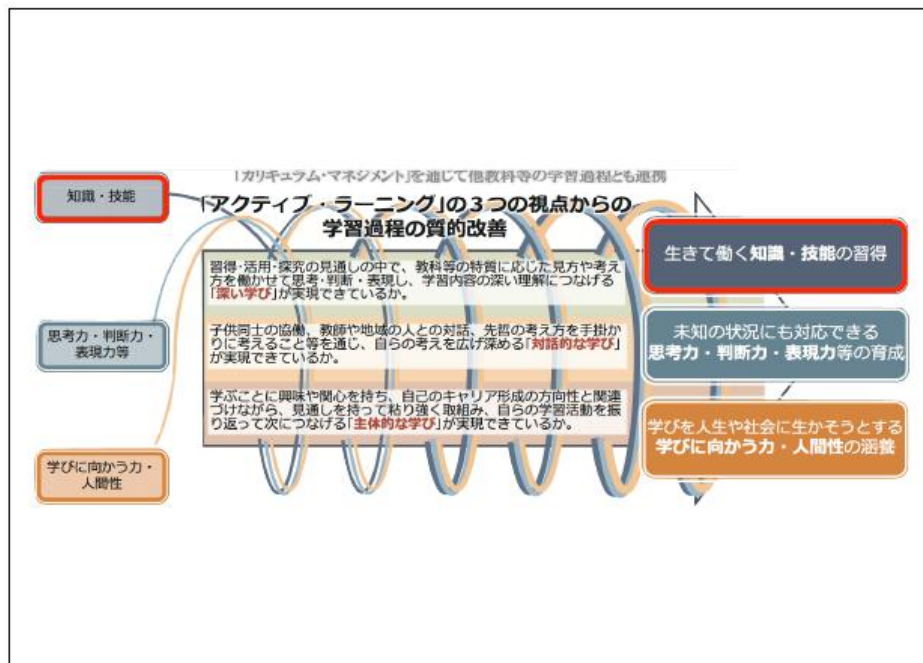
また、「本時の学習目標の具体化を」として、「本時の活動によって育成を目指す資質能力は何か」を明確にしておくよう話があった。

### (3)「アクティブ・ラーニング」の3つの視点からの学習過程の質的改善

「本時の活動によって育成を目指す資質能力」については、泰山氏の講評から、以下のようにまとめられる。

#### 1. 「生きて働く知識・技能」とは？

基礎的・基本的な知識を着実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容（特に主要な概念に関するもの）の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくことが重要である。



#### 【「アクティブ・ラーニング」の3つの視点からの学習過程の質的改善】

資質・能力の三つの柱は相互に関係し合いながら育成されるものであり、資質・能力の育成は知識の質や量に支えられていることに留意が必要である。

①同じ教科の別の場面へ ②別の教科の学習場面へ

②広く実生活や問題解決場面へ

#### 2. 「未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力」とは？

将来の予測が困難な社会の中でも、未来を切り拓いていくために必要な思考力・判断力・表現力等について、

- ・物事の中から問題を見いだし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程。



- ・精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面状況等に応じて互いの考えを適切に伝えあい、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程。
  - ・思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程。
  - ・「この授業で考えたこと」を「新しい場面でも使える思考力」につなげる。
3. 「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」とは？
- 資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素。
- こうした情意や態度等を育んでいくためには、体験活動も含め、社会や世界との関わりの中で、学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させていくことが重要である。
- ・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自分の感情や行動を統制する能力、自らの思考の過程等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。
  - ・多様性を尊重する態度と互いの良さを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性等に関するもの。
  - ・「今日の授業頑張るぞ！」を「学んだことをどの方向に使うかを決める、学びをコントロールする」につなげる。

#### (4) まとめとして

### アクティブラーニングの3つの視点

1. 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」
2. 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」
3. 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」

#### 【アクティブ・ラーニングの3つの視点】

1. アクティブ・ラーニングの3つの視点から
  - ①見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」

- ②自己の考えを広げ深める「対話的な学び」
- ③情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」
- 2. 上記のようなことにつなげるためには…
  - ①本時や単元を通して育成を目指す資質能力を具体的にイメージすること。
    - ほとんどの教科が「内容」を「知識・技能」「思考・判断・表現」を区別して記述。
    - ・どんな知識や技能を身につけるのか。
    - ・身につけた知識を活用して、どのように考えるのか。
  - ②教科での学びを教科横断的、汎用的なものに広げていく。
  - ③今日の授業で、生徒は「**何ができるようになったか**」を大切にする。

#### （５）部会のねらいをもとにした成果と課題についての考察

今年度部会の大きなねらいは、「アクティブ・ラーニングの授業実践に取り組むこと」と「各学校でアクティブ・ラーニング授業実践を広めること」であった。部会での取組を通して、それぞれのねらいが達成できたかどうか等、考察をする。

- 1. アクティブ・ラーニングの授業実践について
  - ①まず、部員の先生方が、それぞれの学校で、アクティブ・ラーニングの授業実践に取り組んだことは、「AL通信」にもまとめられており、各学校での実践事例が報告されている。
  - ②その実践事例の報告から、自ら考えたり、話し合い、考えを伝え合うような学習活動が授業の中に取り入れられており、部員の先生を中心として、生徒の考えを引き出したり、話し合い活動を通して思考を深めるような指導の工夫をしたことがわかる。
  - ③ただ、情報を整理してわかりやすい発表内容を組み立てたり、必要に応じて資料を使って発表するなど、学びを深める授業の工夫や改善をするまでにはいたっていないことから、「アクティブ・ラーニングの授業実践」については、実践できたといえるが、「学びを深める」指導の工夫については、課題があると考えられる。
- 2. 各学校での広まりについて
  - ①第7回部会後に実施した教員（部員）用アンケートの回答から、「AL通信」を配布したり、職員会議の報告の際に伝えるなど、個人での働きかけに取り組んでいることがわかる。
  - ②また、校内研修での紹介や、研究資料の中に活動報告を入れたり、校務分掌への位置づけをするなど、学校全体としての組織的な取組も多く見られた。
  - ③さらには、ホワイトボード（まなボード）の数を増やしたり、アクティブ・ラーニングを設置して、写真や情報を掲示するなど、環境面での整備も見られた。
  - ④「各学校での広まり」については、各学校の実情に合わせて取り組めたといえるが、より学校全体での組織的な取組につなげていく必要があると考える。



## 道徳性を育むための授業づくりの工夫

|       |                  |
|-------|------------------|
| 指導主事  | 田 中 かおり          |
| 研 究 員 | 小 山 陽 子 ( 浜 小 )  |
| 〃     | 立 半 博 満 (武庫南小)   |
| 〃     | 由 良 健 一 (武庫の里小)  |
| 〃     | 大 皿 紗 代 (武庫庄小)   |
| 〃     | 佐 藤 博 之 (南武庫之荘中) |

### 【内容の要約】

道徳の時間において、児童（生徒）が他者との対話を通して多様な考えに触れ、ねらいとする道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深めさせることは、他者と共により良く生きようとする道徳性を育むことにつながる。

本研究では、どのような発問をすれば道徳的価値に迫ることができるか、児童・生徒がより多面的・多角的な見方へと発展していくか、また、自分自身との関わりの中で深めていくことができるか等、発問の工夫と共に、多様な意見を出し合い高め合う授業のあり方を求めた授業実践の指導案の変遷を提示する。

キーワード：深い教材の読み 道徳的価値 道徳的な問題 基本発問 中心発問  
問い返し発問 補助発問 テーマ発問

- 1 はじめに .....
- 2 研究について .....
- 3 実践事例
  - (1) 第1学年 .....
  - (2) 第4学年 .....
  - (3) 第5学年 .....
  - (4) 第6学年 .....
- 4 研究のまとめ .....
- 5 おわりに .....

## 1 はじめに

近年、子どもたちを取り巻く環境は急激に変化し、「いじめ」や規範意識の低下に起因する問題が深刻化している。平成27年度3月に学習指導要領の一部改正により、小学校は平成30年度から、中学校は平成31年度から「特別の教科 道徳」が実施される。文部科学省は、道徳教育の抜本的改善・改革を図るため、「考え、議論する道徳科」への質的転換により、児童・生徒の道徳性を育むことを目指している。これは、これまでの「道徳の時間」が、主題やねらいの設定が不十分で、登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われている例があることや、効果的な指導方法が共有されていないことなどを背景としている。このことから、本研究部会では、ねらいの立て方や授業設計、発問の工夫、指導方法やその内容について、授業力を高めるための、また道徳性を育むための効果的な指導の研究を進めていく。

## 2 研究について

### (1) 研究のテーマ

道徳性を育むための授業づくりの工夫

### (2) 研究テーマの設定理由

「道徳の時間」は、子どもたちがよりよく生きるための基盤を養う場である。しかし教科化については認識しているものの、他教科に比べて研究が進んでいるとは言い難い。しかも、読み物の登場人物の心情をなぞる国語科的な授業の例があり、道徳としての授業やねらいに迫る発問の工夫がされていない等、多くの課題がある。

「特別の教科 道徳」の目標は「道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と規定されている。特に、学習活動において、児童・生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが求められている。

児童・生徒が、自分の考えをさらに深めていくには、自分の考えだけでなく、他者との対話を通して、人の考え方が多様であることに気付いていく必要があり、様々な立場や側面から物事を捉え、考えを深めたり広げたりする「多面的・多角的な思考」を行う事が大切である。

そこで、本研究では、課題解決を目指して、道徳的価値に迫る発問や多様な意見を出し合い高め合う授業のあり方について視点を置き、テーマを「道徳性を育むための授業づくりの工夫」として実践事例等を提案することとした。

### (3) 研究の仮説

道徳の時間において、児童が他者との対話を通して多様な考えに触れ、ねらいとする道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深めさせることによって、他者と共により良く生きようとする児童を育むことができるだろう。

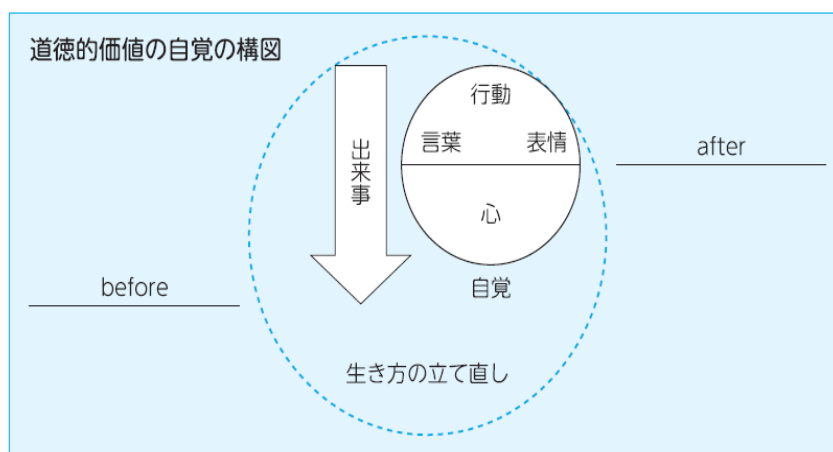
#### (4) 研究の方法

| 1 基礎研究                                                                                                                         | 2 指導案研究                                                                                                                                                                                                          | 3 授業実践と考察                                                                                                                                                                                  |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・教材の深い読み</li> <li>・教材の分析</li> <li>・授業設計</li> <li>・発問の工夫</li> <li>・指導方法やその内容等</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・対話（自己・他者）をうながす</li> <li>・多様な考え方に触れる</li> <li>・道徳的価値について深く考える</li> </ul> <p>〔特別の教科 道徳 の目標〕<br/>「道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己（人間としての）生き方についての考えを深める学習」となっているか。</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と共に、より良く生きようとする</li> </ul> <p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童・生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか。</li> <li>・自分自身との関わりの中で深めているか</li> </ul> |

#### (5) 研究内容

##### 1. 教材について

多くの教材には、登場人物の道徳的変化の様子が描かれている。道徳的変化は、主人公が道徳的諸価値の重要性を自覚することによって起こっている。この場合、単に「知」っていることと「自覚」することを区別する必要がある。私たちは、「生命の尊さ」や「思いやり」といった道徳的価値をすでに「知」っているが、普段はあまり意識していない。しかし、何かの出来事が自分の身近に起こったときに身にしみて感じ、その価値を深く「自覚」し、その後の生き方につながる。このことについて、兵庫県教育委員会『『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて』に以下の図で示されている。



〔兵庫県教育委員会『『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて②』より〕

before：主人公が生き方を自覚する前      after：主人公が生き方を自覚した後

ねらいに迫る授業のためには、授業者が、教材に描かれている人間の生き方と、そこに含まれる道徳上の問題（道徳的価値）をしっかりと読みとることが大切である。

## 2. 発問について

道徳的価値についての多様な意見を出し合う授業にするには、「どこで問うか（道徳的価値にかかる問題場面はどこか）」「何を問うか（道徳的価値の何を考えさせるか）」を明確にしなければならない。そのため、次の視点により発問を考えることとした。

### (1) 基本発問：before について問う

主人公が生き方を自覚する前について問う発問。主人公が道徳的価値を自覚する前の姿等を把握させる。

### (2) 中心発問：生き方の自覚について問う

主人公が生き方について自覚する場面（主人公の変容や生き方の深化）を問う。学習の中心場面であり、ねらいに迫るものである。教材にある（主として）主人公の言葉や行動を捉えて、その背後にある内面を深く考えさせる。

### (3) 問い返し発問：児童・生徒の発言を捉え、問い返す

中心発問に対する児童・生徒の考えをさらに深めるために、発言を手がかりとしてさらに問い返していく発問。中心発問に対する児童・生徒の発言を捉え、問い返すことによって道徳的価値を自覚させ、生き方についての考えを深める。

### (4) 補助発問：新しい視点を加える

中心発問や問い返し発問で児童生徒の考えが深まらないとき、新しい視点を加えることでねらいに迫る発問。問い返し発問と同様、道徳的価値を自覚させ、生き方についての考えを深める。

### (5) テーマ発問：本時のねらいとする道徳的価値についての考えをまとめる

終末で本時のまとめをする、道徳的価値にせまる発問。児童生徒の発達段階に合わせて、「その時間に考えた道徳的価値を明確にする」「自分たちの生活に結びつける」「授業で考えたことを振り返って自由に書く」等の工夫をする。

## (6) 授業実践内容の一覧

|             |     |                                                                            |
|-------------|-----|----------------------------------------------------------------------------|
| 実践1<br>第1学年 | 主題名 | 友情，信頼                                                                      |
|             | 教材名 | 「くりのみ」                                                                     |
|             | ねらい | うさぎに，2つしかないくりのみの一つをもらって涙したきつねを通して，友だちをおもいやり，仲良く助け合っていこうとする道徳的心情を育てる。       |
| 実践2<br>第4学年 | 主題名 | 友情，信頼                                                                      |
|             | 教材名 | 「ないた赤おに」                                                                   |
|             | ねらい | 青おにが赤おにのために旅立っていった行動や，青おにの置き手紙を見て，赤おにが涙する場面を通して，信頼し合って友情を深めようとする道徳的心情を育てる。 |
| 実践3<br>第5学年 | 主題名 | 遵法精神，公德心                                                                   |
|             | 教材名 | 「お客様」                                                                      |
|             | ねらい | 「お客様」として，楽しみにしていたショーを観る「権利」と，そのために果たさなければならない「義務」について考えること                 |

|             |                                                                                        |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------|
|             | を通して、公共の場では、すすんでマナーやモラルを大切にし、守ろうとする道徳的实践意欲と態度を養う。                                      |
| 実践4<br>第6学年 | 主題名 生命の尊さ                                                                              |
|             | 教材名 「column 誰かのために」                                                                    |
|             | ねらい 娘のためにお弁当を作る母親の思いと、それを受け止めようとする娘の思いを考えることを通して、生命の尊さについて、かけがえのない生命を尊重しようとする道徳的心情を養う。 |

### 3 実践事例

#### (1) 実践1 第1学年

##### 1. 授業について

##### (1) 主題名 B 主として人との関わりに関すること

友情, 信頼 友達と仲良くし, 助け合うこと。

##### (2) 教材名 「くりのみ」(出典 学研「みんなのどうとく1年」)

##### (3) ねらい うさぎに, 2つしかないくりのみの一つをもらって涙したきつねを通して, 友だちをおもいやり, 仲良く助け合っていこうとする道徳的心情を育てる。

##### 2. 指導案研究前の「本時の展開」

|    | 学習活動                                                                                                          | 主な発問と予想される児童の反応                                                                                                    | 指導上の留意点                                               |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| 導入 | ・山の冬の景色を思い浮かべる。                                                                                               |                                                                                                                    | ・写真や絵で, 自然界の冬の状況をとらえさせ, 資料の世界へ引き込む。                   |
| 展開 | 資料を黙読する。                                                                                                      |                                                                                                                    | 資料を範読する。                                              |
|    | ・嘘をついたときのきつねの気持ちを考える。                                                                                         | 「なんにもなくてほらぺこです。」と言ったとき, きつねは何を考えていたのでしょうか。                                                                         | ・寒い中で食べ物がなく, お腹をすかせている状況を確認する。                        |
|    | <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">           独り占めしようと自分のことだけを考えている心情をおさえにくい。         </div> | ・だれにもあげたくない。<br>・教えたくない。<br>・ぼくの食べる分がへるから, ないしょにしよう。<br>・本当のことを言ったらうさぎに食べられる。                                      | ・自分のことだけを考えているという心情を押さえる。<br>・嘘について独り占めしようとしたことを押さえる。 |
|    | ・うさぎにどんぐりをもって涙をこぼしたきつねの気持ちを考える。                                                                               | <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">           ぽろっと涙をこぼしたとき, きつねは, どんなことを思っていたでしょう。         </div> | ・うさぎもお腹をすかせていることを押さえる。                                |
|    |                                                                                                               |                                                                                                                    | ・挿絵を手掛かりに, たった                                        |

|    |                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | <div data-bbox="231 510 526 667" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> うさぎの置かれている状況がつかみにくい。 </div> | <感謝><br>・わけてくれてありがとう。<br>・ぼくは嘘をついたのに助けてくれた。<br><尊敬><br>・うさぎさんはなんてやさしいんだろう。<br>・たった二つしかないのにくれるなんて、すごいな。<br>・お腹がすいてしんどいのに、ぼくのことを考えて分けてくれた。えらいな。<br><後悔><br>・ぼくはたくさん食べてお腹いっぱいなのに、独り占めにしようとしてしまった。<br>・ぼくもわけてあげればよかった。ごめん。<br>・うそをつかなければよかった。<br><よりよく生きる><br>・次はぼくも分けてあげよう。<br>・うさぎさんに、かくしていたくりをあげよう。 | 二つしかないくりのみの一つをあげたうさぎの友達を思う気持ちや優しさに気付かせたい。<br><div data-bbox="1070 443 1433 618" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> (補助発問)<br/> どうしてうさぎは、くりのみをきつねにあげたのでしょうか。 </div> ・お腹がすいててかわいそうだから。<br>・ともだちだから。<br>・自分もお腹がすいているから、お腹がすいてつらい気持ちがわかるから。<br>・いっしょに食べたほうがおいしいから |
| 終末 | ・感想を書く。                                                                                                      | 今日の授業で考えたことを書きましよう。                                                                                                                                                                                                                                                                                | ・書けない児童には話を振り返らせ助言する。                                                                                                                                                                                                                                                      |

### 3. 指導案の考察

#### (1) 教材について

食べ物がないと命にかかわる状況の中で、友だちのことを思い、助け合おうとするうさぎの心に触れることを通して、友だちをおもいやり、仲良く助け合うことの大切さを感じ取らせることのできる資料である。

当初、堺市教育委員会副読本版の「くりのみ」で授業を行う計画であった。堺市版は「しなびたくりのみ」という表現や、会話文の多さから、「うさぎの友情」や「きつねのこぼした涙の意味」が、より真に迫ってくる資料となっていることから、子どもたちに深く考えさせるのに適していると考えた。しかし、学研版と比較すると、教材の長さが倍近くあることや、1年生には難しい表現が多いことから、担当学級の児童には学研版のほうが適していると思い、資料を変更した。

#### (2) 一つ目の発問について

他の学級での実践で最初の発問『なんにもなくてらはぺこです。』といったとき、きつねは何をかんがえていたのでしょうか。』を投げかけたところ、こちらの意図している答えである「自分のことだけを考えているきつねの気持ち」や、「うそをついて独り占めしようとしていること」などがあまり出ず、「うさぎさんはどんぐり見つけたかな

「もっと食べたいな。」など、資料の読みから離れた意見が多く出た。児童の実態から、より直接的な発問の「どうしてきつねは『なんにもなくてほらぺこです。』と言ったのでしょうか」がふさわしいと考えた。

(3) 補助発問について

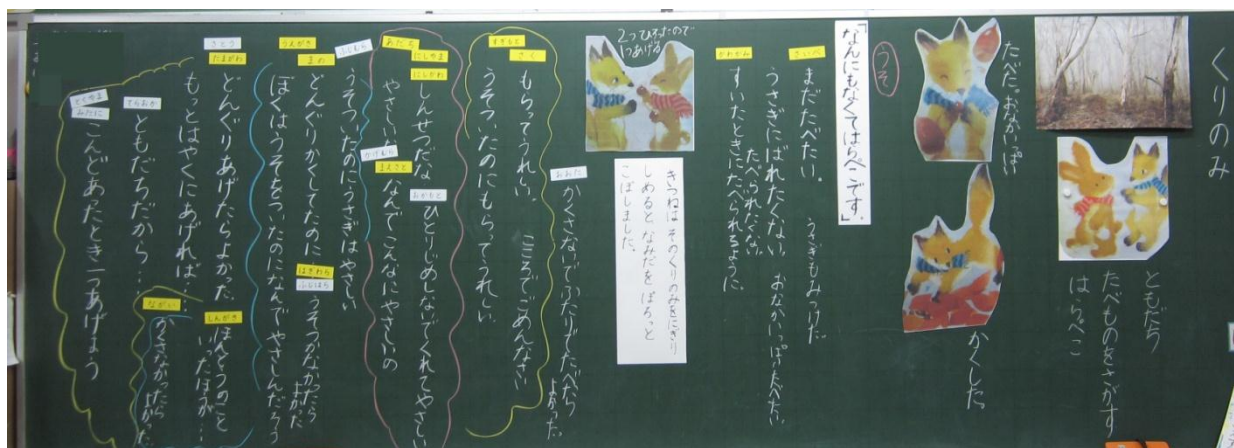
児童がより深く考えるには、お話の状況を自分ごととしてとらえなければならない。1年生にとって「どうしてうさぎはくりのみをきつねにあげたのでしょうか。」では、うさぎさんの行動のすごさは理解しづらいことが考えられる。うさぎさんのおかれていまする状況を教師から伝えることで、うさぎさんの行動のすごさを少しでも実感してほしいと考え「うさぎもおなかがすいているのに、どうしてきつねにくりのみをあげたのでしょうか。」とした。

4. 指導案研究後の「本時の展開」

|    | 学習活動                                                                                                       | 主な発問と予想される児童の反応                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | 指導上の留意点                                                                                                                                                                                                            |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入 | ・山の冬の景色を思い浮かべる。                                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | ・写真で、自然界の初冬の状況をとらえさせ、資料の世界へ引き込む。                                                                                                                                                                                   |
| 展開 | <p>教師の範読を聞く。</p> <p>・嘘をついたときのきつねの気持ちを考える。</p> <p>きつね心情をおさえる問い。</p> <p>・うさぎにどんぐりをもらって涙をこぼしたきつねの気持ちを考える。</p> | <p>どうしてきつねは「なんにもなくてほらぺこです。」と言ったのでしょうか。</p> <p>・だれにもあげたくない。</p> <p>・教えたくない。</p> <p>・もっと食べたい。</p> <p>・本当のことを言ったらうさぎに食べられる。</p> <p>くりのみをにぎりしめ、ぽろっと涙をこぼしたとき、きつねは、どんなことを思っていたでしょう。</p> <p>&lt;感謝&gt;</p> <p>・わけてくれてありがとう。</p> <p>・わけてくれてうれしい。</p> <p>・ぼくは嘘をついたのに、助けてくれた。</p> <p>・うさぎさんと友だちでよかった。</p> <p>&lt;尊敬&gt;</p> <p>・うさぎさんはなんてやさしいんだろう。</p> | <p>資料を範読する。</p> <p>・寒い中で食べ物がなく、お腹をすかせている状況を確認する。</p> <p>・自分のことだけを考えているという心情をおさえる。</p> <p>・嘘をついて独り占めしようとしたことを押さえる。</p> <p>・うさぎもお腹をすかせていることを押さえる。</p> <p>・挿絵を手掛かりに、たった二つしかないくりのみの一つをあげたうさぎの友だちを思う気持ちや優しさに気付かせたい。</p> |



|    |         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                      |
|----|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    |         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・たった二つしかないのにくれるなんて、すごいな。</li> <li>・お腹がすいてしんどいのに、ぼくのことを考えて分けてくれた。えらいな。</li> </ul> <p>&lt;後悔&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・うさぎさんのきもちがわかってなかった。</li> <li>・うそをつかなければよかった。</li> <li>・ぼくはたくさん食べてお腹いっぱいなのに独り占めにしようとしてしまった。</li> <li>・ぼくもわけてあげればよかった。ごめん。</li> </ul> <p>&lt;よりよく生きる&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・うさぎさんに、隠していたどんぐりをあげよう。</li> <li>・隠し場所を教えてあげよう。</li> <li>・次はぼくもだれかに分けてあげよう。</li> </ul> | <p>(補助発問)</p> <p>うさぎさんもお腹がすいているのに、どうして二つしかないうちの一つをあげたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分もお腹がすいているから、お腹がすいてつらい気持ちがわかるから。</li> <li>・お腹がすいていてかわいそうだから。</li> <li>・きつねが友だちだから。</li> <li>・いっしょに食べたほうがおいしいから。</li> </ul> |
| 終末 | ・感想を書く。 | 今日の授業で考えたことを書きましよう。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | ・書けない児童には話を振り返らせ助言する。                                                                                                                                                                                                                |



〔板書事項〕

## 5. 授業実践と考察

一つ目の発問で「どうしてきつねは『なんにもなくてほらぺこです。』と言ったのでしょうか」と問い、きつねの「ほらぺこです。」という言葉が嘘だったことを押さえることで、独り占めしたくて嘘をついたきつねの心情を的確にとらえることができた。そこからつながる中心発問ではたくさんの児童が発言し、事前に想定していた発言がひと通り出た。しかし、深まりが少なく、うさぎの尊い友情や深い思いやりに迫る発言は少なかった。

児童の考えを深めるポイントの一つが、どのタイミングで補助発問をするかであるが、今回の授業では子どもの発言を拾いすぎたため、補助発問を出すポイントを逃してしまったことが悔やまれる。

また、たった二つしかないくりの実のうちの一つをきつねに分けてあげるうさぎの心の温かさに共感させるために、冬の森は食べ物がない厳しい世界であること、食べ物が無いことは、命に関わる重大な問題であることを押さえる必要があるが、今回は、導入で冬の山の様子を撮った写真を見せ、状況をとらえさせた。子どもたちなりに想像を膨らませていたが、実感が乏しかったのではないかと思われる。しかし考えを深めるには、冬の森で食べ物をとるのがどんなに大変か、もっと実感させる手立てが必要であったと感じた。

## (2) 実践2 第4学年

### 1. 授業について

#### (1) 主題名 B 主として人との関わりに関すること

友情、信頼 友達と互いに理解し、信頼し、助けあうこと。

#### (2) 教材名 「ないた赤おに」(出典 光村図書「きみがいちばんひかるとき4年」)

#### (3) ねらい 青おにが赤おにのために旅立っていった行動や、青おにの置き手紙を見て、赤おにが涙する場面を通して、信頼し合って友情を深めようとする道徳的心情を育てる。

### 2. 指導案研究前の「本時の展開」

|    | 学習活動              | 発問と予想される反応                                                                                               | 指導上の留意点                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|----|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入 | 1, 友だちについて考える。    | 友だちがいてよかったと思うことはありますか。                                                                                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>意見を出しやすい雰囲気を作る。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                       |
|    |                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>こまっている時助けてもらった。</li> <li>はげましてくれた。</li> </ul>                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 展開 | 2, 資料の前半を読んで話し合う  | 赤おには立て札を立てたとき、どんな気持ちだったでしょう。                                                                             | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">赤おにの視点の発問<br/>基本発問が3つもある</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>赤おにのねがいもおさえておく。</li> <li>青おにのほかにも友達がほしいと思っていることに気付かせる。</li> <li>赤おにのために、自分を犠牲にする作戦を立てた青おにの行動もおさえる。</li> <li>うれしい気持ちの反面、心がかかりが</li> </ul> |
|    |                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>人間の友だちがほしい。</li> <li>たくさん友だちがほしい。</li> <li>さみしいから。</li> </ul>     |                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|    |                   | 青おにの作戦を聞いて、赤おにはどんなことを考えたでしょう。                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|    |                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>すまない</li> <li>うまくいくな。</li> </ul>                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|    | 3, 資料の後半を読んで話し合う。 | 人間と仲良くなったとき、赤おにはどんなことを考えていたのでしょうか。                                                                       |                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|    |                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>仲良くなれてうれしい。</li> <li>たくさんの友だちができた。</li> <li>青おにが心がかかりだ</li> </ul> |                                                                                                                                                                                                                                                                                         |

|  |                                                        |  |                                                                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                                                                                                           |
|--|--------------------------------------------------------|--|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  |                                                        |  | <div>青おにの視点の発問</div> <div>青おにはどんなことを考えて、置き手紙をして旅に出たのでしょうか</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・赤おに、幸せになってね。</li> <li>・ぼくはずっときみの友だちでいるから。</li> <li>・赤おにのためだ。</li> <li>・ぼくのことはいいから。</li> </ul>                  | <p>あることもおさえておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・青おには赤おににもう会わない覚悟にも気付かせたい。</li> <li>・赤おにのことをずっと思っていたことをおさえる。</li> <li>・青おにの友情に気がついた赤おにの涙は後悔、反省、感謝の涙など色々考えられるので、できるだけ色々な考えを出させる。</li> <li>・青おにと赤おにの相手に対する友情の深さに注目させ、青おにの友情の深さに気付かせる。</li> </ul> |
|  |                                                        |  | <div>中心発問の予想される児童の反応が少なく、整理されていない</div> <div>赤おには青おにの残した手紙を読んで、どんな気持ちで涙を流したのでしょうか。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ぼくのためにしてくれてありがとう。</li> <li>・ぼくは人間と仲良くなることばかり考えていて、青おにのことなんて考えていなかったと思ったから。</li> </ul> |                                                                                                                                                                                                                                                           |
|  |                                                        |  | <div>具体的な手立ての検討が必要</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分は友だちが増えたが、本当のともだちを失ったと思って悲しくなった。</li> <li>・もう会えないかもしれないと思って。</li> </ul>                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                           |
|  | <div>終末</div> <div>4, 教師の話を聞く<br/>5, 振り返りカードを書く。</div> |  |                                                                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                                                                                                                           |

#### 問題点

- ・赤おにの視点の発問が中心発問を入れて4つもある。
- ・青おにの視点の発問があるため、赤おにの視点で考えている児童にとって、中心発問を考えにくい。
- ・中心発問の予想される児童の反応が少なく、発言に対して教師がどのように深めるかが見えにくい。

#### 3. 指導案の考察

専任講師である四天王寺大学 杉中 准教授に指導助言を頂き、より道徳的価値に迫ることができる授業にしたいと考え、以下のことを改善のポイントとした。

ア、道徳的価値についての教師の理解を深める。

イ、発問を工夫する。(発問の整理・どのように尋ねるか)

ウ、授業における時間マネジメントをしっかりと行う。

まず、道徳的価値について、教師の理解を深めることが必要である。今回の価値である「友情」について、中学校の学習指導要領の解説 第2節 内容項目の指導の観点には以下のように明記されている。

真の友情は、相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、相手に対する敬愛の念がその根底にある。それは、相手の人間的な成長と幸せを願い、互いに励まし合い、高め合い、協力を惜しまないという平等で対等な人間関係である。友達を「信頼」するとは、相手を疑う余地なく、いざという時に頼ることができると思信じて、全面的に依頼しようという気持ちをもつことであり、その友達の人間性に賭けることである。相手の人柄に親しみを感じ、敬愛する気持ちを持ち続けることである。分かち合い、高め合い、心からの友情や友情の尊さについて理解を深め、自分を取り囲む友達との友情をより一層大切にする態度を育てることが大切である。

〔中学校学習指導要領 解説 第2節 内容項目の指導の観点 友情 (1)内容項目の概要より〕

また、小学校の学習指導要領 解説 第2節 内容項目の指導の観点 には以下のように明記されている。

友だちのことをよく理解し、信頼し、助け合うことで、健全な仲間集団を積極的に育成していくことが大切である。そのためには、友だちのよさを発見することで友達のことを理解したり、友達とのより良い関係の在り方を考えたり、互いに助け合うことで友達の大切さを実感したりすることができるように指導することが大切である。

〔小学校学習指導要領 解説 内容項目の指導の観点 友情 (2)指導の要点 第3学年及び第4学年より〕

以上から、この教材の道徳的価値「友情」の、どの側面についての考えを深めさせるのかを考えた。

本教材では「信頼するとはどういうことなのか」を考えることができる資料である。特に今回は、赤おにの道徳的価値「友情」の理解を超える青おにの「友だち観」に気付かせることで、「友情」の中でも「信頼する」ということについての考えを深めることができるのではないかと考えた。

<青おにの友だち観>

- ・友達がこまっているから、助ける
- ・友達の幸せを願う。
- ・赤おにを心から信頼している。

以上のことから青おには、たとえ自分が遠くに行っても、二人の関係は変わらないと思信じているからこそ、「どこまでもきみのともだち」と書いた。多くは、離れたり別の友達ができたりした場合に、友だちであることを忘れてたり縁遠くなったりすると、友だちの関係は切れてしまう。それをおそれずに「どこまでもきみのともだち」として去った青おにから、赤おにへの信頼の証であると考えられる。中学年の子ども達にとって、相手を友だちだと思う気持ちは、いつもいっしょにいるか否かである。離れてしまったら、「友だちだ」という感情はやがてなくなってしまうと考える児童もいるであろう。中には「いや、離れていても『友だち』だ」と言える児童もいると考えられる。友だち

関係を続けていくには、お互いの気持ちのやりとりだけではなく、相手に対して「友だちだ」という信頼を抱くことも大きく関わってくる。その部分を子どもたちの言葉でやりとりさせてみたいと考えた。

#### 4. 指導案研究後の「本時の展開」

|    | 学習活動                                              | 発問と予想される反応                                                                                                                                                                                                                                          | 指導上の留意点                                                                                                                                                                             |
|----|---------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入 | 1. 導入                                             | 泣いた赤おにというお話を知っていますか。<br>・知っている ・知らない                                                                                                                                                                                                                | ・意見を出しやすい雰囲気を作る。<br>中心発問の時間を多くとるため、時間をかけない                                                                                                                                          |
|    | 2. 資料を読んで話し合う                                     | 青おにの作戦の後、赤おにはどんなことを考えていたのでしょうか。<br>・うまくいった。これで人間と仲よくなれる<br>・青おにくん、すまない<br>・人間と仲良くなってもうれしい。<br>・さみしくない。<br>・たくさんの友だちができた。<br>・青おにが心がかかりだ                                                                                                             | ・赤おにのために、自分を犠牲にする作戦を立てた青おにの行動をおさえる。<br>・うれしい気持ちの反面、心がかかりがあることもおさえておく。<br>赤おにが道徳的に変化する前の「基本発問」を1つに絞る。                                                                                |
| 展開 | 3. 友情について考える。                                     | 赤おには、青おにの残したはり紙を見て、涙を流しながら、どんなことを考えたでしょう。                                                                                                                                                                                                           | ・赤おにの涙は後悔、反省、感謝の涙など色々考えられるので、色々な考えを出させる。                                                                                                                                            |
|    | 青おに視点の発問は補助発問で行う。児童の反応に応じて、発問するかどうかを決める。          | ＜さみしい＞<br>・もう会えないよ。<br>・もうそばにいないからさみしい。<br>・友だちをなくした。<br>＜感謝＞<br>・ぼくのためにありがとう<br>＜感動＞<br>・ぼくのためにここまでしてくれたのか<br>・そんなにぼくを思ってくれていたのか<br>＜反省＞<br>・ぼくのせいで遠くにいくことになってしまった。<br>・青おには、こんなに考えてくれているのに、ぼくは気付いていなかった<br>・ぼくは自分のことしか考えてなかった。<br>・赤おにのことを信じているから | ＜問い返し発問＞<br>「赤おには、友だちをなくしたのだろうか。」<br>・そばにはいないが、友だちとしては存在することに気付かせる。<br>＜補助発問＞<br>青おにの思いは？<br>・赤おには、これから人間となかよく暮らしてほしい<br>・幸せに暮らしてほしい<br>・青おにと赤おにの、相手に対する友情の深さに注目させ、青おにの友情の深さに気付かせる。 |
|    | 児童の反応を（さみしい・感謝・反省 等）に類型化し、それぞれの反応における問い返し方を考えておく。 |                                                                                                                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                     |

|    |                                    |                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                  |
|----|------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | 道徳的価値に迫る<br>発問を用意しておく。             | <div>         どうして青おにはどこまでも友達<br/>と言えるのかな       </div>                                                                                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・もう会えないことがわかっている。しかも赤おにはすでに新しい友だちもいる。赤おにからの見返りは何もない。その状況で「どこまでも友だち」と言った青おについて深める。</li> <li>・赤おには、青おにとの友だちを続けていくであろう。どうやってそれを続けていくかを考えさせることで、「相手を信頼すること」につなげたい。</li> </ul> |
| 終末 | 4, 教師の話を聞く<br>5, 振り返りカードを書き, 交流する。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分がそう信じているから。</li> <li>・何もしてくれなくても, 友だちと思っている</li> <li>・きっとはり紙を見に来てくれる。</li> <li>・大好きだから</li> </ul> |                                                                                                                                                                                                                  |

## 5. 授業実践と考察

ねらいとする道徳的価値に迫るため、中心発問にできるだけ時間をかけるには、授業における時間のマネジメントをしっかりと行うことが大切である。そのため、特に導入や基本発問は少なくして教師が教材のあらすじを説明し、前半部分は15分程度におさめた。3. 指導案の考察 ア, イ, ウのポイントを踏まえ、道徳的価値「友情」の中でも「信頼する」に迫る授業のため、中心発問に30分かけて思考を深めたため、たくさんの児童が発言できた。

児童の考えを深めるには、教師の問い返し発問や補助発問のタイミングが大切である。児童の「友だちをなくしてしまった。」という発言に対して、「赤おには、友だちをなくしたのだろうか。」と問い返すことができた。予想される児童の反応をあらかじめ〈さみしい〉〈感謝〉〈反省〉等に類型化していたので「そばにいないだけで、友だちは続いている」という発言から、道徳的価値についての考えを深める発問につなげることができた。

補助発問については、「青おにがどんな思いで書いたか」を問うタイミングが難しいと感じた。ここまで、赤おにの視点で考えてきた児童にとって、青おにの思いを考えるのが難しいようであったため、教師があらかじめ補助発問を用意していても、児童の反応に応じて、発問するタイミングをはかり、また、発問するかしないかを判断する必要があると感じた。

最後の発問は、道徳的価値「友情」の「信頼する」という側面に迫るものである。児童の様子を見て、「もう会えないかもしれないのに、『どこまでも友だち』って言える？」と問い返した。ある児童が、「そなん、友達だと思っているから、そう言える。ぼくも、前引越した友だちがいて、その子とはメールのやりとりをしている。」と発言したが、この発言に何人かの児童が「そうだ」と声を重ねていった。しかし、それをうまく広げることができないまま終了時間となり、感想を書かせた。この児童の発言をうまく生かすことで、さらに授業が深まったのではないかと感じた。また、最後の発問に関して、改善の余地があると感じた。

### (3) 実践3 第5学年

#### 1. 授業について

- (1) 主題名 C 主として集団や社会との関わりに関すること  
 遵法精神、公德心 法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、  
 自他の権利を大切にし、義務を果たすこと。
- (2) 教材名 「お客様」(出典 文部科学省 小学校道徳 よみ物資料集)
- (3) ねらい 「お客様」として、楽しみにしていたショーを観る「権利」と、そのために  
 果たさなければならない「義務」について考えることを通して、公共の場  
 では、すすんでマナーやモラルを大切にし、守ろうとする道徳的実践意欲と態  
 度を養う。

#### 2. 指導案研究前の「本時の展開」

|        | 学習活動                                                                              | 主な発問と予想される児童の反応                                                                                                                                                                                                             | 指導上の留意点                                                                                                                                                                                                             |
|--------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導<br>入 | 1 「お客様」と聞いてイメージするものを全体で話し合う。                                                      | <p>「お客様」と聞いて、どんなことをイメージしますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・買い物をする人、できる人。</li> <li>・お店側よりも、えらい立場。</li> <li>・お店側にとって、大切な人。</li> </ul>                                                                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「買い物ができる、えらい」など「お客様」としての「権利」の部分のみがイメージされやすいことを板書にまとめる。</li> </ul>                                                                                                           |
| 展<br>開 | 2 教材を読み、ショーが始まる前の主人公の気持ちを考える。<br><br><div>まだ、わたしが違和感を覚え始めた部分</div>                | <p>係の人の注意を快く思わなかったのは、どうしてだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・せっかく楽しみにしているのに、注意ばかりしてうるさいから。</li> <li>・このままじゃよく見えないから。</li> <li>・注意されなくても、自分たちでできるし、好きにさせてほしいから。</li> </ul>                                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・注意に対して不満を漏らす人たちに共感していることをおさえる。</li> </ul>                                                                                                                                   |
|        | 3 謝る係の人を見て、「何か、変だ。」と思った主人公の気持ちを考える。<br><br><div>一日の出来事をすべてふり返った時のわたしを考えさせたい</div> | <p>「何か、変だ」と思った時「わたし」はどんなことを考えていたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・注意している係の人が謝るのはおかしい。</li> <li>・肩車している男の人は、自分勝手だ。</li> <li>・係の人、男の人、どちらの立場の気持ちも分かる。</li> <li>・ショーを観る権利は、他の人にもあるから、それをじゃましてはいけない。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分一人だけでなく、周りに他の人もいる公共の場であることを意識させる。</li> </ul> <div>補助発問<br/>             どうして係の人は、くり返し注意をしたのだろう。<br/>             ・ショーを観る時のきまりだから。<br/>             ・他のお客さんの迷惑になるから。</div> |



|    |                        |                                                                                                                                                                                                                                                                   |                             |
|----|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|
|    | 4 「権利」「義務」という言葉の意味を知る。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「権利」…ある物事を「～してよい、しなくてよい」という資格。</li> </ul>                                                                                                                                                                                 | マナーやモラルを大切にし、守ろうとすることにつなげたい |
| 終末 | 5 本時のふり返しをする。          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「義務」…自分も含め、周りの人たちの権利を守るために、果たさなければならないこと。</li> </ul> <div>今日の授業で学んだことは何ですか。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・きまりとは、多くの人の権利を守るためにあるものと分かった。</li> <li>・自分一人の権利だけでなく、他の人の権利のことも考えて行動することが大切であると分かった。</li> </ul> |                             |

### 3. 指導案の考察

#### (1) 中心発問について

本教材は、「わたし」が、「お客様」としての権利を主張する肩車をした男性と、「お客様」としての義務を守ってもらおうとする係員とのやりとりを見て、「お客様」の権利と義務について考えながら帰路につくところで終わっている。当初、中心発問を「何か、変だ」と思った時、『わたし』はどんなことを考えていたのだろう。」としていたがこの場面では、権利ばかりを主張することに違和感や疑問を覚え始めたところであり、きまりを破って木に登った男性が木から落ちる前でもある。そこで、今日一日の出来事をすべてふり返った時の「わたし」の気持ちを深く考えさせるため、「女の子が『もう一度考えていた』ことって何だろう。」とした。

#### (2) 補助発問について

中心発問に時間をかけるためには、発問を精選し少なくすることが大切である。当初、補助発問を「どうして係の人は、くり返し注意をしたのだろう。」と設定していたが、「わたし」の気持ちを考えていく中で、係の人がくり返し注意をする理由は、子どもたちから自然とわき出てくると予想されるので問う必要はないと考えた。また、「お客様」のイメージを導入で聞いているが、再度問い、導入時と終末時とのイメージについて比較することを通して、きまりの意義や自他の権利を大切にして義務を果たすことについての考えを深めることができるのではないかと考え、『お客様』とは何か」を補助発問とした。

#### (3) 本時のふり返しについて

児童から「権利」や「義務」という言葉は自然と出てくるであろうが、言葉の意味を考えることは難しい。また、教師側からあえて言葉を提示したり、その意味を教えたりする必要はないと考えた。そのため、本時のふり返しで、教師から「権利」や「義務」という言葉を出さないようにした。

#### 4. 指導案研究後の「本時の展開」

|    | 学習活動                          | 主な発問と予想される児童の反応                                                                                                                                                                                                                                                                      | 留意事項                                                                                                                                                             |
|----|-------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入 | 1 「お客様」と聞いてイメージするものを全体で話し合う。  | <div>「お客様」と聞いて、どんなことをイメージしますか。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 買い物をする人，できる人。</li> <li>・ お店側よりも，えらい立場。</li> <li>・ お店側にとって，大切な人。</li> </ul>                                                                                                                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「買い物ができる，えらい」など，「お客様」としての「権利」の部分のみがイメージされやすいことを板書にまとめる。</li> </ul>                                                      |
| 展開 | 2 教材を読み，ショーが始まる前の主人公の気持ちを考える。 | <div>係の人の注意を快く思わなかったのは，どうしてだろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ せっかく楽しみにしているのに，注意ばかりしていてうるさいから。</li> <li>・ このままじゃよく見えないから。</li> <li>・ 注意されなくても，自分たちで</li> </ul>                                                                                                       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 注意に対して不満を漏らす人たちに共感していることをおさえる。</li> </ul>                                                                               |
|    | 3 ショーの会場を後にした主人公の気持ちを考える。     | <div>女の子が「もう一度考えていた。ことって何だろう。」</div> <div>〈義務を守ることの大切さ〉</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ショーを楽しめなくて残念だった。(私もお客様なのに…)</li> <li>・ 注意している係の人が謝るのはおかしい。</li> <li>・ きまりを守ることって大切だなあ。〈公共の精神〉</li> <li>・ みんなが気持ちよく見られるにはどうしたらよかったのだろう。</li> </ul> <div>今日の授業で学んだことは何ですか</div> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分一人だけでなく，周りに他の人もいる公共の場であることを意識させる。</li> </ul>                                                                          |
|    |                               |                                                                                                                                                                                                                                                                                      | <div>問い返し発問</div> <div>何に対して，「何か，変だ」と思ったのだろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 係の人の謝罪（必要ない）</li> <li>・ 男性の権利のみの主張</li> <li>・ もやもやしている自分</li> </ul> |
| 終末 | 4 本時のふり返りをする。                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「お客様」だからって，好き勝手してはいけない。</li> <li>・ 「お客様」には，権利と義務がある。</li> <li>・ 自分一人の権利だけでなく，他の人の権利のことも考えて行動することが大切だと分かった。</li> </ul>                                                                                                                       | <div>補助発問</div> <div>「お客様」って何だろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ お金を払ってサービスを受ける人。</li> <li>・ したいことをできる権利がある人。</li> </ul>                         |

児童の反応を類型化し，反応における問い返し方を考えておく。

#### 5. 授業実践と考察

今回の授業のねらいが「道徳的実践意欲と態度の育成」であるため，主人公の「わたし」の心情理解にとどまらず，子どもたちが自分事として考えていけるように進めた。

導入では、話のあらすじや登場人物の確認について問わず、物語の状況について自分自身がどう思うか、子どもたちのつぶやきを拾いながら授業を展開していった。子どもたちは個々の思いや考えを発言し、友達と交流する中で自身の考えを広げることができた。しかし、中心発問の部分で、主人公である「わたし」の思いに立ち返る機会を取らなかったため、「わたし」の思いを捉えるには不十分であったと思われる。補助発問について検討の必要があると感じた。

「お客様」としての「権利」や「義務」について、多くの子どもたちが頭では理解できており、授業中もそのような発言が多く出てきた。「権利」の裏にある「義務」の意義について理解を深め、公共の場では、自他の権利を大切にし、すすんでマナーやモラルを大切にし、守ろうとする道徳的実践意欲と態度が養われたと考えられる。

しかし、実際に主人公である「わたし」と同じ状況に立たされた時、「自分ならどう考えるか、どう行動するか。それはどういった理由からか」等を、児童に真正面から問うことの意義について、改めて考えさせられた。今後の道徳科の評価を踏まえた上で、子どもの実生活につながる授業展開について、継続して考えていかなばならないと感じた。

#### (4) 実践4 第6学年（公開授業）

##### 1. 授業について

(1) 主題名 D 主として生命や自然、崇高な者との関わりに関すること

生命の尊さ（関連項目：家族愛）

生命が多くの人々のつながりの中にあるかけがえのないものであることを理解し、生命を尊重すること。

(2) 教材名 「column 誰かのために」（出典 文部科学省 私たちの道徳 中学校）

(3) ねらい 娘のためにお弁当を作る母親の思いと、それを受け止めようとする娘の思いを考えるを通して、生命の尊さについて、かけがえのない生命を尊重しようとする道徳的心情を養う。

##### 2. 指導案研究前の「本時の展開」

|    | 学習過程                                       | 発問と予想される児童の反応                                                                                                                                                                                                                                                     | 指導上の留意点                                                                                 |
|----|--------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入 | ・資料の内容を知る。                                 | 今日は、鎌田實さんというお医者さんとおある患者さんのお話です。                                                                                                                                                                                                                                   |                                                                                         |
| 展開 | ・資料を黙読する。<br><br>・「少しだけ」に込められたお母さんの心情を考える。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんの病名は？</li> <li>・スキルス胃がん</li> <li>・病院に来たときは余命何ヶ月？ ・3ヶ月</li> </ul> <div>お母さんは、どうして「<u>少しだけ</u>長生きをさせてください。」と言ったのだろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の卒業式を見たい。</li> <li>・助からないのは分かっているけど、卒業式</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・資料を範読する。</li> <li>・時系列を整理しながら板書していく。</li> </ul> |

|    |                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                                                                                                                                                                          |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | <ul style="list-style-type: none"> <li>娘のためにお弁当を作るお母さんの心情を考える。</li> <li>娘さんの心情に共感する。</li> <li>母から子へバトンタッチした大切なものについて考える。</li> </ul> | <p>に出たい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>母親として卒業式を見たい。</li> </ul> <p>お母さんはどんな思いで娘さんのお弁当を作っていたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分に出来ることはしたい。</li> <li>最後に無理してでも作りたい。</li> <li>最後の力を娘のために。</li> <li>娘にありがとうという気持ちで。</li> </ul> <p>娘さんは、どんな思いでお母さんが作ってくれたおむすびを見つめていたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>最後のお弁当になるかも。</li> <li>お母さんの命のことを考えると切なかった。</li> <li>感謝して手が出なかった。</li> <li>自分も最後はお母さんのようにしたい。</li> </ul> <p>お母さんが精いっぱい生きて、子供たちにバトンタッチした「大切なこと」って何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の代わりに生きてほしい。</li> <li>生きているということのすばらしさ。</li> <li>誰かのために生きるということの大切さ</li> <li>お母さんの愛しているという思い。</li> <li>お母さんが生きていたという証。</li> <li>家族としてのつながり。</li> </ul> | <p>考えを深める問い返し発問が用意されていない</p> <p>・お母さんへの思いでいっぱいになる娘さんの心情を考えさせる。</p> <p>補助発問<br/>なかなか手に取れなかったのはなぜだろう。</p> <p>・娘さんのこれからの生き方についても考えさせる。</p> <p>補助発問<br/>娘さんは、これからどんな生き方をしていこうと思っているのだろう。</p> |
| 終末 | <ul style="list-style-type: none"> <li>学習の感想を書く。</li> <li>教師の話聞く。</li> </ul>                                                        | <p>想定される反応が準備されていない</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                          |

### 3. 指導案の考察

道徳の授業づくりには、教材の分析が重要である。本教材は、いわゆる「伝記・偉人伝」に分類され、道徳的な変化のない教材であり、「私たちの道徳」では、(6)「家族の一員としての自覚を」の章に掲載されている。

#### (1) 中心発問について

〈教材の中心場面〉

A：「お母さんが最後に作ってくれたお弁当を娘さんが見て、なかなか手に取ることができない場面

B：「お母さんが精いっぱい、必死に生きて大切なことを子どもたちにちゃんとバトンタッチした場面

〈中心場面で考えを深める内容〉

A：「お母さんのお弁当に込められた思い」を，子どもたちと一緒に共感し考えを深める。

B：「お母さんの生きる姿から，子どもたちにバトンタッチしたものは何かについての考えを深める。

「家族愛」について，中学校学習指導要領解説 第2節 内容項目の指導の観点「家族愛」の内容項目の概要には，以下のように明記されている。

人間は，過去から受け継がれてきた生命の流れの中で生きている。祖父母や父母が在ること，そして自分は，そのかけがえのない子供として深い愛情をもって育てられていることに気付かせることが大切である。〔中学校学習指導要領解説 第2節 内容項目の指導の観点 家族愛 の 内容項目の概要より〕

また，生命の尊さの 内容項目の概要には，以下のように明記されている。

生命のかけがえのなさは様々な側面から考えられる。家族や社会的な関わりの中での生命や，自然の中での生命，さらには，生死や生き方に関わる生命の尊厳など，発達の段階を考慮しながら計画的・発展的に指導し，様々な側面から生命の尊さについての考えを深めていくことが重要である。〔中学校学習指導要領解説 第2節 内容項目の指導の観点 生命の尊さ の 内容項目の概要より〕

本教材は，医師が看取った一人の患者とその家族について書かれており，「過去から受け継がれてきた生命」とともに「家族の関わりの中での生命や，生死や生き方に関わる生命の尊厳」を取り上げたいと考えた。

また，生命としての「いのち」について，藤永芳純 氏は以下のように分析している。

生命としての「いのち」について

I－1－①大いなるつながり，**連続性**としての命

II－5 いのちの特徴として，**有限性**

II－6 いのちの横断的關係性，**支え合い**（家族愛にもつながる）

II－7 **連続性**の中にあるがゆえに尊い

II－9 **周囲の願い・希望・連続性**

〔参考文献：特別寄与「いのちの尊重—授業者の理解のために—

大阪教育大学 名誉教授 藤永芳純 氏 第2回道徳教育教材作成委員会での講義より〕

以上のことから主題を「生命の尊さ」に設定した。中心場面をBの部分とし，中心発問を「子どもたちにバトンタッチしたものは何か『娘さんはどんなおもいでお母さんが作ってくれたおむすびを見つめていたのだろう』」とした。

(2) 問い返し発問について

問い返し発問は，児童の発問に対して問い返すポイントを絞ることが重要である。娘のために最後の力を振りしぼってお弁当を作るお母さんについて考える場面で，児童の「後には何も残らない」という意見に対して，教師が「本当に何も残らないのかな？」と問い返すことで「母の想い」についての意見が出ると予想される。そこから，中心発問である「バトンタッチした大切なことは何か？」と問うことで，「連続性としての命」に気付けるのではないかと考えた。

(3) 子どもの予想される反応を準備し、類型化しておく。

指導案で予想される子どもの反応を類型化しておくことで、教師は授業を進めながら、子どもの意見を整理して聞くことができる。子どもの意見の深まりについてもよくわかり、発問のタイミングをはかることができる。子どもから娘の思いの意見が出たときに、さらに問う発問とその反応の準備も大切である。

#### 4. 指導案研究後の指導案（公開授業）

### 「特別の教科 道徳」学習指導案

- 1 日 時 平成 30 年 2 月 22 日(木) 5 校時 午後 1 時 45 分～2 時 30 分
- 2 学年・組 6 年 1 組 (男子 15 名 女子 13 名 計 28 名)
- 3 主 題 生命の尊さ (D 主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関すること)
- 4 教 材 「column 誰かのために」(私たちの道徳 中学校 P184・185 文部科学省)
- 5 主題設定の理由

#### (1) 道徳的価値について

生命を大切にし尊重することは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に応えようとする心の表れといえる。

生命の尊さについて考えを深めていくためには、家族や社会的な関わりの中の生命、さらには、生死や生き方に関わる生命の尊厳など、発達段階を考慮しながら計画的・発展的に指導し、様々な側面から生命の尊さについての考えを深めていくことが大切である。

#### (2) 児童について

本学級の児童は命の大切さや有限性については理解している。しかし、普段の生活の中で、自分の命が家族のつながりの中にあること、生きることの意義を追い求める高尚さといったことに思いを巡らせた経験は少ない。

#### (3) 指導にあたって

##### ・教材について

本教材は、胃がんを患い余命三ヶ月と宣告された母親が、娘のために少しでも長く生きたいと願い生活していく姿を描いた実話である。娘のために「生きる」願いをもち生活していく母親と、それを受けとめ「生きる」ことの意味を考える娘の姿を通して、生命の尊さについて、つながりの中にあるかけがえのない生命を尊重しようとすることを感じ取らせることができる。

##### ・指導について

本教材は、母親が娘のために必死にお弁当を作り、それを娘は中々手に取ることができないところが特に感動する場面である。この場面について、母親の思い、それを受け取る娘の思い、それぞれの気持ちに共感させていきたい。そして、中心発問では、娘にバトンタッチした大切なものは何かについて考えることで、家族愛に関する意見や生命尊重に関する意見など、多面的で多角的な意見を出させていきたい。

また、新しい価値に気付くことで、子ども達は自然に自分の生活に重ね合わせながら考えていくことができる。それを、授業中の発言だけでなく、感想としてまとめていくことで価値付けさせていきたい。

- 6 ねらい 娘のためにお弁当を作る母親の思いと、それを受け止める娘の思いを考えたを通して生命の尊さについて、かけがえのない生命を尊重しようとする道徳的心情を養う。

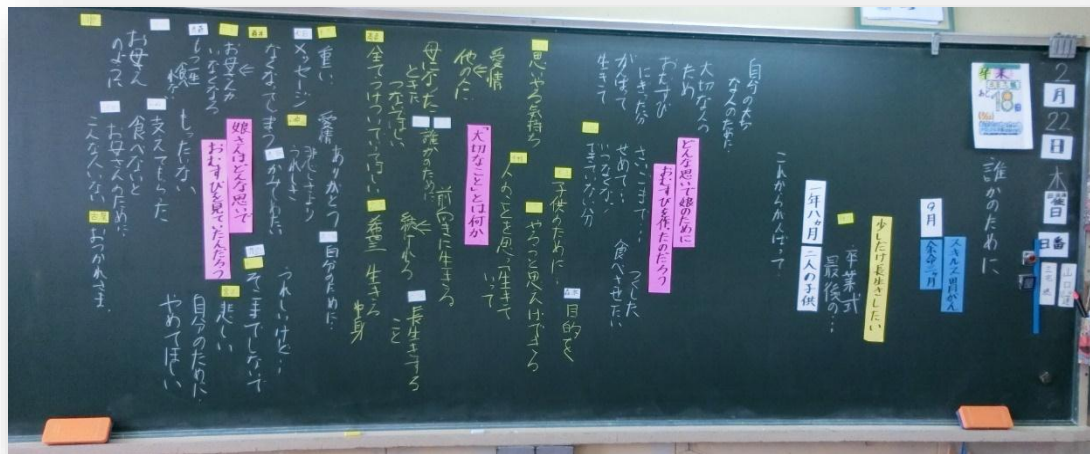
## 7 本時の展開

|    | 学習過程                                                                                                                                                             | 発問と予想される児童の反応                                                                                                                                                                                                                                                                                     | 指導上の留意点                                                                                                                                                                                                                                                 |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> <li>資料の内容を知る。</li> </ul>                                                                                                      | <p>今日は、鎌田實さんというお医者さんとある患者さんのお話です。</p>                                                                                                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 展開 | <ul style="list-style-type: none"> <li>資料を黙読する。</li> <li>お母さんの状況を確認する。</li> <li>「少しだけ」に込められたお母さんの心情を理解する。</li> <li>娘のために最後の力を振り絞ってお弁当を作るお母さんの心情を理解する。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>お母さんの病名は？</li> <li>スキルス胃がん</li> <li>病院に来たときは余命何ヶ月？</li> <li>3ヶ月</li> </ul> <p>お母さんは、どうして「<u>少しだけ</u>長生きをさせてください。」と言ったのだろう。</p>                                                                                                                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>資料を範読する。</li> <li>お母さんの置かれている状況をおさえる。</li> <li>時系列を整理しながら板書していく。</li> </ul>                                                                                                                                      |
|    |                                                                                                                                                                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>子供の卒業式を見たい。</li> <li>助からないのは分かっているけど、卒業式に出たい。</li> <li>母親として卒業式を見たい。</li> </ul> <p>お母さんはどんな思いで娘さんのお弁当を作っていたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分に出来ることはしたい。</li> <li>最後に無理してでも作りたい。</li> <li>後には何も残らないから</li> <li>娘にありがとうという気持ちで。</li> </ul> | <p>問い返し発問<br/>本当に何も残らない？<br/>母の思い（家族愛）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>お弁当はないけどお母さんが自分を大切にしてくれた思いは残る</li> <li>自分の命を使ってまで自分たちを思ってくれた気持ちは</li> </ul>                                                                                           |
|    |                                                                                                                                                                  | <p>何も残らないのかと言うところから、母への思いを気付かせる。思いに対して意見が深まるようであれば中心発問へ</p>                                                                                                                                                                                                                                       | <p>◎娘さんへの思いができれば</p> <p>追い発問 1</p> <p>本娘さんは、どんな思いでお母さんが作ってくれたおむすびを見つめていたのだろう。</p> <p><b>家族愛・生命尊重</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>最後のお弁当になるかも。</li> <li>お母さんの命のことを考えると切なかった。</li> <li>感謝して手が出なかった。</li> <li>自分も最後はお母さんのようにしたい。</li> </ul> |



|                                                                                        |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                                                        | <p>・母から子へバトンタッチした大切なものについて考える。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | <div data-bbox="1043 235 1187 271" data-label="Section-Header"> <p>追い発問 2</p> </div> <p>なかなか手に取れなかったのはなぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これで最後かと思うとつらい</li> <li>・時間が止まってほしい</li> <li>・ここまで自分たちを思ってくれている</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| <div data-bbox="178 1323 448 1400" data-label="Text"> <p>道徳的価値に対する発問の類型化</p> </div>    | <div data-bbox="520 546 1018 672" data-label="Text"> <p>お母さんが精いっぱい生きて、子供たちにバトンタッチした「大切なこと」って何だろう。</p> </div> <div data-bbox="507 685 906 719" data-label="Section-Header"> <p>自分の分まで長く生きてほしい</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分はこれだけしか生きられなかったけど自分の命の分まで生きてほしい。</li> <li>・自分のぶんまで生きてほしい。</li> </ul> <div data-bbox="507 909 651 943" data-label="Section-Header"> <p>生命の強さ</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・精一杯生きれば病気に勝てるということ</li> <li>・命を大切にすれば科学に勝てる</li> <li>・この人のために長く生きたいという気持ちがあれば病気に勝てる</li> <li>・希望があればのりこえられる</li> <li>・この人のためにと強く思えば余命は伸びる</li> </ul> <div data-bbox="507 1312 935 1346" data-label="Section-Header"> <p>生きることを後悔してほしくない</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の納得する生き方をしてほしい</li> <li>・病気とかであきらめるのではなく自分なっとくできる生き方をしてほしい</li> </ul> <div data-bbox="507 1536 708 1570" data-label="Section-Header"> <p>お母さんの思い</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんの愛しているという思い。</li> <li>・お母さんが生きていたという証。</li> </ul> <div data-bbox="507 1671 906 1704" data-label="Section-Header"> <p>誰かのために生きる素晴らしさ</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・誰かのために生きることの大切さ</li> <li>・自分のために命を使うだけではなく大切な人のためにも命を使ってほしい</li> <li>・自分がしたように誰かのために生きる生き方をしてほしい。</li> </ul> | <div data-bbox="1034 719 1426 994" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="1043 1122 1437 1202" data-label="Section-Header"> <p>生命尊重の価値にせまる補助発問</p> </div> <p>娘さんは、これからどんな生き方をしていこうと思っているのだろう。</p> <div data-bbox="1043 1346 1187 1379" data-label="Section-Header"> <p>母への思い</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんのことを忘れずに生きていく。</li> <li>・お母さんにしてもらったことを思いだしながら生きていく</li> <li>・つらいことがあればお母さんを思い出す</li> </ul> <div data-bbox="1043 1704 1347 1738" data-label="Section-Header"> <p>母の思いをつないでいく</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんのように誰かのために生きていく</li> <li>・自分のために生きてくれたように自分の家族にもそうして生きていきたい。</li> </ul> |
| <div data-bbox="193 1615 459 1760" data-label="Text"> <p>思いをつなぐところまで考えさせたい。</p> </div> |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

|        |                      |  |
|--------|----------------------|--|
| 終<br>末 | 学習の感想を書く<br>教師の話を書く。 |  |
|--------|----------------------|--|



〔板書事項〕

##### 5. 公開授業事後研究会

代表授業者による公開授業後に、研究員と参加教員で意見交流を行った。

###### 〈成果と課題〉

- ・ 中心発問「お母さんが精いっぱい生きて、子供たちにバトンタッチした『大切なこと』」の考えを深めていくことにより、「連続性としての命」まで考えさせることができた。
- ・ 問い返しの発問と予想される発言を準備していたので、良いタイミングで問い返すことができた。
- ・ 児童の考えの深まりがわかる板書であった。しかし、指導案にある、予想される発言と同じように板書も類型できればよいのだが、発言を聞くことに集中すると難しい。類型化した板書計画の準備も必要である。

また後半には、専任講師の四天王寺大学 杉中 准教授より、授業の評価と教材の分析や評価などについてご講話いただいた。

- ・ 道徳の授業は、本音で語り合える、深まりのある授業を目指したい。しかし、授業の深まりは手にとってわかるものではない。それが道徳の授業の難しい部分。
- ・ いわゆる「伝記・偉人伝」の教材は、主人公が物事を貫いた（偉業を成し遂げた）影響で、周囲の状況が変わる教材。本教材に当てはめると「台所に立つことが難しい病状の母が娘を思い頑張ることで奇跡が起こり、また、母を亡くすことで娘が絶望に落ちるのではなく、よりよく生きようと思う」教材。お母さんの生き様を通して命に対する気づきが起こり、生徒が自分との関わりで考えていく教材。
- ・ 教材を分析すると、押さえる場面として3つが挙げられる。
  - ①偉業を起こす前の主人公の姿。
 

場面を押さえる発問として「お母さんは、どうして『少しだけ長生きをさせてください」と言ったのだろう。」を設定していた。

②偉業を成し遂げた後の主人公の姿。

場面を押さえる発問として「お母さんはどんな思いで娘さんのお弁当を作っていたのだろう。」を設定していた。

③主人公は何を決意し、どのように偉業を成し遂げ、そしてその結果何が変化したのか。  
(命の連続性に触れていく 中心場面)

中心発問として「お母さんが精いっぱい生きて、子供たちにバトンタッチした『大切なこと』って何だろう。」を設定し、考えさせていた。

- ・子どもの考えが授業で深まり、ねらいとする道徳的価値の自覚が深まってくると、指導案にある追い発問2や生命尊重の価値にせまる補助発問を教師がわざわざ問わなくても、その答えの発言が子どもから出てくる。
- ・指導案にはなかった問い返し発問「お弁当を食べてしまったらもう何もなくなるの？」で、教室の空気が変わった。児童の発言の中には、授業のターニングポイントとなる発言がある。その発言から児童が生み出してくる次の答え、その次の答え・・・と、どんどんと考えが深まっていく瞬間を大事にしていく授業が、本当にいい授業なのではないだろうか。由良先生はそういうつもりで、児童に問いかけをしているんだと思う。
- ・十分に発問を絞り込んだ上で、さらに交流までを45分の時間内に納めるのは無理なことだが、子ども達に書かせた感想の交流の場を持てるとよかった。

#### 4 研究のまとめ

本研究部会では、どのような発問をすれば道徳的価値に迫ることができるか、児童・生徒がより多面的・多角的な見方へと発展していくか、また、自分自身との関わりの中で深めていくことができるか等、発問の工夫をし、多様な意見を出し合い高め合う授業実践を行ってきた。その成果と課題を次のようにまとめる。

##### (1) 教材の分析

誰が（主として主人公が）、何によって、どう道徳的に変化したのかをつかみ、考えを深めさせたい中心場面をとらえる。また、いわゆる「伝記・偉人伝」は、主人公の道徳的な変化がない教材であるが、「主人公の偉業により状況が変わる・周囲の者や状況が変化する教材」としてとらえることができる。

##### (2) 道徳的価値の理解を深める

教師が、道徳的価値の様々な側面を分析し、子どもの発達段階に合わせてどの面の自覚を深めるかを設定することが大切である。例えば「友情」であるなら、「仲良くという面」「助け合うという面」「信じ合うという面」「高め合うという面」があるが、目の前の子どもが今までの人生で、すでにどの段階まで理解しているのかをつかみ、道徳的価値が深まるねらいを設定することが大切である。

##### (3) 発問内容の検討

主として主人公が変化する前の「Before の発問」、「中心発問」本時で学ぶべき道徳的価値について問う「テーマ発問」を設定する。子どもの実態によっては直接的・具体的な発問の工夫することも大切だが、子どもの考えの広がりや深まりがなくなること考えられる。子どもの実態をよくつかみ、発問の検討をすることが必要である。

(4) 授業の時間のマネジメントと発問の精選

授業の前半の「導入・範読・内容理解」には時間をかけず、中心場面でじっくりと（30分程度）考えを深める時間を確保する。また、同じような反応が予想される発問がないように、発問を精選する。

(5) 道徳的価値の自覚が深まる発問の工夫

子どもの発言をさらに深めるために行う「問い返し発問」や「補助発問」を準備する。そして、予想される子どもの発言をたくさん予想し、問い返すポイントをしぼる。そのことにより、より道徳的価値の自覚が深まる授業となる。

(6) 予想される子どもの発言（反応）の類型化

授業を進めながら子どもの発言を受容し、問い返す発問を考えたりタイミングをはかるのは難しい。授業者が考えているうちに、タイミングを逃してしまうこともしばしばある。そのため、あらかじめ予想される子どもの発言（反応）を類型化しておき、どのような発言があった時に、どの発問をするのかを想定しておくことで、道徳的価値についての考えを深める発問をすることができる。

(7) 道徳的価値にじっくりと向き合う時間の確保

本時で学ぶべき道徳的価値について、振り返りシートに書かせるなどして、自分と向き合い、静かにじっくりと考える時間を確保することも大切である。

## 5 おわりに

「教科」の授業は、練り上げた指導案に基づいて授業を進めていく。一方「特別の教科 道徳」の授業は、授業者が準備した指導案を超える子どもの発言や考えが出ることにより、授業者がその場で、子どもに「どう問うか」が求められる。指導案通りに進まない時に、どうねらいへ軌道修正をするかを求められることが「特別の教科 道徳」の授業の難しさである。授業者は、時に、子どもの多様な考えを引き出すのに、指導案にしばられず授業を進める。この指導法は、子どもが自ら真理に到達するのを助ける産婆法ともいえるであろう。

道徳科の内容（内容項目）について、学習指導要領解説 第1節 1（1）内容の捉え方には以下のように明記されている。

「第3章 特別の教科 道徳」の「第2 内容」は、教師と児童（生徒）が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である。〔学習指導要領解説 第1節 内容項目の指導の観点 1 内容構成の考え方（1）内容の捉え方より〕

これは、昭和33年に道徳科が定められてから、変わることなく記されている言葉である。「友情」や「おもしろい」といったことについて、教師と児童（生徒）が「共に考え、共に語り合う」時間でありたい。

本研究部会で、発問の工夫と共に、多様な意見を出し合い高め合う授業実践と研究を行うことで、子どもたちが主体的に道徳的価値について考え、他者と対話し、児童・生徒がより多面的・多角的に考え、自分自身との関わりの中で自らの考えを深めている姿がみられた。

今後は、指導と評価の一体化を図り、どのようにその学習状況や成長の様子を把握し評価するかについて、研究していく必要があると考える。

### 【参考・引用文献】

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」
- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」
- ・兵庫県教育委員会 兵庫県道徳教育実践推進協議会「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて」
- ・兵庫県教育委員会 兵庫県道徳教育実践推進協議会「『特別の教科 道徳』の全面実施に向けて②」
- ・大阪教育大学 名誉教授 藤永芳純 氏 第2回道徳教育教材作成委員会での講義録「いのちの尊重―授業者の理解のために―」
- ・ミネルヴァ書房「楽しく豊かな『道徳の時間』をつくる」

## 次期学習指導要領で新たに示された表現を取り入れた 指導の在り方を探る

|     |             |     |              |
|-----|-------------|-----|--------------|
| 研究員 | 野上 直哉（園和北小） | 指導員 | 小谷 隆宏        |
|     | 岸本 理紗（立花北小） | 研究員 | 平島 理絵（難波の梅小） |
|     | 太田 宏樹（立花小）  | 〃   | 山村 優介（立花北小）  |
|     | 和田 紗知（小田北中） | 〃   | 大澤 奈緒子（園田中）  |

### 【内容の要約】

小学校で平成32年度，中学校で平成33年度から始まる次期学習指導要領の完全実施に向けて，平成29年2月に小学校外国語活動及び外国語における年間指導計画（素案）が示された。本研究部会では，来年度から始まる移行期間を見据え，次期学習指導要領で新たに示された表現を取り入れた指導の在り方について，授業実践を通して探る。

キーワード：次期学習指導要領，移行期間，年間指導計画

- 1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- 2 研究の内容
  - (1) 研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・
  - (2) 研究テーマの設定理由・・・・・・・・
  - (3) 研究の進め方・・・・・・・・
  - (4) 実践事例1・・・・・・・・
  - (5) 実践事例2・・・・・・・・
  - (6) 研究についてのまとめ及びアンケート考察・・・・・・・・
- 3 『移行期における構え』・・・・・・・・
- 4 おわりに・・・・・・・・

## 1 はじめに

次期学習指導要領の完全実施に向けて、『外国語教育における新学習指導要領の円滑な実施に向けた移行措置（案）』の中では、「小学校移行期間中の5・6年生においては、新たに年間15単位時間を加え、50時間を確保し、外国語活動の内容に加えて外国語科の内容を扱う。外国語科の内容については、中学校との接続の観点から最低限必要な内容と、それを活用して行う言語活動を中心に取り扱う。」と明記されている。また、平成29年2月には『新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会』において、小学校外国語活動及び外国語における年間指導計画（素案）が示された。以上のような動向を受けて、本研究部会では、前年度から継続的に指導をいただいている関西大学外国語学部教授 今井裕之氏の指導を受けながら、文部科学省の示す方向性に基づいた、単元計画及び授業計画の作成を目指すとともに、授業の在り方について実践を通して探っていくこととした。

## 2 研究の内容

### （1）研究テーマ

次期学習指導要領で新たに示された表現を取り入れた指導の在り方を探る。

### （2）研究テーマの設定理由

本市における外国語活動の研修については、2年前より全小学校教員を対象として、次期指導要領に沿った理論的な研修と授業実践に関する研修を行っている。今回の学習指導要領の改訂においては、新たに過去形や三人称の表現について取り扱うなど、より専門性の高い内容になることから、指導することに対し不安感をもつ教員が多くなると考えられる。そこで、次期学習指導要領で新たに扱う表現について、より具体的な指導イメージをもつことができるよう、本年度の研究テーマを『次期学習指導要領で新たに示された表現を取り入れた指導の在り方を探る』とした。

### （3）研究の進め方

#### ①具体的な研究内容

#### ○研究部員について

| 学校    | 名前     | ひらがな      | 学年 |
|-------|--------|-----------|----|
| 園和小   | 野上 直哉  | のがみ なおや   | 6年 |
| 難波の梅小 | 平島 理絵  | ひらしま りえ   | 6年 |
| 立花北小  | 山村 優介  | やまむら ゆうすけ | 3年 |
| 立花北小  | 岸本 里紗  | きしもと りさ   | 6年 |
| 立花小   | 太田 宏樹  | おおた ひろき   | 5年 |
| 園田中   | 大澤 奈緒子 | おおさわ なおこ  | 3年 |
| 小田北中  | 和田 紗知  | わだ さち     | 2年 |

## ②年間の活動について

| 日程        | 研究部会回数         | 研究内容                                            |
|-----------|----------------|-------------------------------------------------|
| 6月26日（月）  | 委嘱式<br>第1回研究部会 | ○研究テーマの共有<br>○研究部会日程の調整，授業者の決定<br>○指導案検討        |
| 7月28日（金）  | 第2回研究部会        | ○指導案検討<br>○公開授業日程調整                             |
| 8月29日（火）  | 第3回研究部会        |                                                 |
| 10月19日（木） | 第4回研究部会        |                                                 |
| 11月 2日（木） | 第5回研究部会        |                                                 |
| 12月 7日（木） | 第6回研究部会        |                                                 |
| 12月18日（月） | 第7回研究部会        | ○第1回公開授業<br>○事後研究会                              |
| 1月30日（火）  | 第8回研究部会        | ○第2回公開授業<br>○事後研究会<br>○講話「新学習指導要領の移行措置におけるポイント」 |

## （4）実践事例1

1. 単元名 She can run fast. He can jump high. （新教材 Unit5）

2. 単元の目標

- ・自分や第三者について，できることやできないことを聞いたり話したりすることができる。
- ・自分や第三者について，できることやできないことを伝え合う。
- ・他者に配慮しながら，自分や第三者についてできることを紹介し合おうとする。

3. 指導にあたって

新教材のUnit5にあたる本単元では，三人称に初めて出会う。今までの外国語活動では，一人称と二人称のみで伝え合っているのので，動詞の変化はなかったが，三人称となると動詞の変化が必要となってくる。しかし，ここでは，can を使って表現するため，動詞の変化は生じない。I can/ She can/ He can の表現を使って，自分や第三者の紹介ができる単元である。

新教材では，この単元は8時間扱いである。文字の音があることに気づかせたり，文字を書かせたりすることも扱っている。しかし，今回は4時間でこの単元を扱うので，文字の音の指導や書く指導は行わない。

本学級の児童とは，週に1回だけ外国語の授業で顔を合わせている。外国語に対して，意欲的ではあるが，自信のなさから声が小さい児童がいる。また，間違いを恐れて，なかなか言葉を発することができない児童もいる。また，友達関係においても，友達の「できること」をすべて知っているわけではないので，この単元を通して，新たな発見をし，よりよい関係を作ってほしいと考える。



指導にあたっては、まずは、I can \_\_\_\_\_. / I can't \_\_\_\_\_. / Can you \_\_\_\_\_? Yes, I can. No, I can't. から指導していく。また、この単元を4時間で実施するにあたって、語彙を限定していくことで定着を図っていくことをねらっていきたい。新表現に使える時間は1時間ずつなので、1時間の中で、多くの発話・発言させていく工夫をし、慣れ親しませていく。そして、自信を持って、表現したり活動したりさせるために、褒め言葉をたくさん使いながら、自信をつけさせたい。また、間違っても大丈夫であるという雰囲気を作っていくことが必要である。

初めて出会う三人称については、例をいくつか挙げて、違いに気づかせていきたい。また、視覚的にも、わかりやすくなるように絵カードを使って、理解を深めていく。友達のことを考えて、紹介させる予定である。即興でペアになった友達のことを互いに紹介させる。紹介する側は、友達のことを夢中になって考え、紹介してもらう側は、自分のどんなことを言ってもらえるのかが少し楽しみになるように仕組んでいきたい。そして、お互いが良い気分になって終わるようになってもらいたいと考える。そして、最後には、自分のヒーローを紹介できるように指導する。

この単元を通して、自分が友達にどう思われているのか、友達がこんなこともできるんだという新たなよい発見をたくさんして、友達とのよりよい関係を作っていけるよう進めていきたい。

#### 4. 単元の評価規準

| コミュニケーションへの<br>関心・意欲・態度                                  | 外国語への慣れ親しみ               | 言語や文化に関する気づき                                                   |
|----------------------------------------------------------|--------------------------|----------------------------------------------------------------|
| ・積極的に友達に「できること」を尋ねたり、自分や第三者の「できること」や「できないこと」を答えたりしようとする。 | ・「できる」「できない」という表現に慣れ親しむ。 | ・言語や人、それぞれに違いがあることを知る。<br>・英語・日本語では「できる」と表現するときの程度の差があることに気づく。 |

#### 5. 単元で扱う語彙・表現

##### <主な語彙>

play [baseball, basketball, badminton, soccer, volleyball, kendama],

play the [piano, recorder]

cook, swim, run fast, speak English, make friends smile, do abacus

##### <主な表現>

I can \_\_\_\_\_. I can't \_\_\_\_\_. Can you \_\_\_\_\_? Yes, I can. No, I can't.

She can \_\_\_\_\_. He can \_\_\_\_\_. This is \_\_\_\_\_.

6. 単元計画（4時間）

【コ】 コミュニケーションへの関心・意欲・態度

【慣】 外国語への慣れ親しみ

【気】 言語や文化に関する気付き

| 時         | 目標(◆)と主な学習活動(【】 ○)                                                                                                                                                                        | 評価 |   |   |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|---|---|
|           |                                                                                                                                                                                           | コ  | 慣 | 気 |
| 1         | <p>◆動作を表す語や「できる」「できない」という表現を知り、言語にはそれぞれに違いがあることに気づく。( I can _____. I can't _____. )</p> <p>・「先生のできること・できないことを知ろう。」</p> <p>○「ポインティングゲーム」</p> <p>○「できること」「できないこと」を聞いて、絵に○△を書く。</p>          |    |   | ○ |
| 2         | <p>◆できるかどうかを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。</p> <p>( Can you _____? Yes, I can. / No, I can't. )</p> <p>・「友達にできること・できないことを予想して、インタビューしよう。」</p> <p>○友達にできるかどうかを聞き、できることであれば、○を書く。</p>                  |    | ○ |   |
| 3<br>(本時) | <p>◆できることできないことについて、具体的な情報を聞き取り、誰が何ができるかを言う。( He/She can _____. )</p> <p>・有名人やキャラクターの写真を見て、話の内容を聞き取る。</p> <p>・「友達のできることを見つけて、友達の紹介しよう。」</p> <p>○ペアになった人のできることを考え、友達にペアになった友達を簡単に紹介する。</p> | ○  | ○ |   |
| 4         | <p>◆自分や自分のヒーローを紹介する。</p> <p>( I can _____. He/She can _____. )</p> <p>・「自分やヒーローを紹介しよう。」</p> <p>○自分やヒーロー(家族・兄弟・有名人)ができることを紹介し合う。</p>                                                       | ○  |   |   |

7. 本時の学習（3／4時間）

（1）本時の目標

友達のできることを考えて、紹介することができる。

（2）準備物

絵カード，ワークシート，大型テレビ，パソコン，ふり返しカード

（3）本時の展開

| 導入                                                                                                              | 児童の活動                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 指導上の留意点<br>●評価【方法】                                                                                                                              |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 展開                                                                                                              | <p>1. あいさつする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Hello.</li> <li>• How are you?</li> </ul> <p>2. 前時までの復習をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ピクチャーカードを見て，発音する。</li> </ul> <p>I can _____.</p> <p>I can't _____.</p> <p>Can you _____?</p> <p>Yes, I can.</p> <p>No, I can't.</p>                                                                                                                                                                                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>• 教師とあいさつさせる。</li> <li>• 児童同士であいさつさせる。</li> </ul>                                                        |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p><b>友達のことを考えて，紹介しよう。</b></p> </div> |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |                                                                                                                                                 |
|                                                                                                                 | <p>3. 有名人やキャラクターの写真を見て，話の内容を聞き取る。</p> <p>ex) This is Ichiro.</p> <p>He likes curry and rice.</p> <p>He can play baseball very well.</p> <p>He can run fast.</p> <p>But he can't cook.</p> <p>ex) This is ブルゾンちえみ.</p> <p>She likes music.</p> <p>She can swim.</p> <p>She can speak English.</p> <p>But she can't do abacus.</p> <p>ex) This is アンパンマン.</p> <p>He likes ジャムおじさん.</p> <p>He can make friends smile.</p> <p>He can play soccer.</p> <p>But he can't swim.</p> <p>ex) This is しずかちゃん.</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• ワークシートに聞き取ったことをメモする。</li> <li>• できること・できないことをチェックする。</li> </ul> <p>●何ができて，何ができていないかを聞き取る。 【ワークシート】</p> |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>She likes ドラえもん.<br/> She can play the piano.<br/> She can play kendama.<br/> But she can't play volleyball.</p> <p>4. 聞いたことを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>写真と絵カードを見ながら, 確認する。</li> </ul> <p>He can play baseball very well.<br/> He can run fast.<br/> He can't cook.</p> <p>She can swim.<br/> She can speak English.<br/> She can't do abacus.</p> <p>He can make friends smile.<br/> He can play soccer.<br/> He can't swim.</p> <p>She can play the piano.<br/> She can play kendama.<br/> She can't play volleyball.</p> <p>5. He can _____. She can _____.<br/> の練習をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>イラストに合わせて言っていく。</li> </ul> <p>6. Activity</p> <p>「ペアの友達のできることを見つけて, 友達に紹介し合おう。」をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>音楽に合わせて, ペアを作り, ペアになった人にできることを考えて, 紹介する。</li> </ul> <p>ABCD : Hello.<br/> A : This is _____.<br/> She can play the piano.<br/> B : This is _____.</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>写真と絵カードを合わせながら, 表現を導入してしていく。</li> <li>一つ一つリピートしながら, He/She の違いに気づかせる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>まずは, He can She can から始める。</li> <li>次に, He/She 絵カードと語彙イラストを見せて,<br/> He can _____. She can _____. と言わせる。</li> <li>移動する側と移動しない側に分かれさせる。</li> <li>移動する側<br/> 立って, 席を見つけ, ペアになった人のできることを考え, 言わせる。また, 移動しない側の紹介も聞かせる。</li> <li>移動しない側<br/> 隣に座っている人のできることを考えて, 言わせる。移動してくる人の紹介も聞かせる。</li> <li>紹介する時は, はっきり相手に伝えることを意識させる。</li> </ul> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

|     |                                                                                                                                                            |                                                                                                                |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | He can play basketball.<br>C: This is _____.<br>He can speak English.<br>D: This is _____.<br>She can swim well.<br>ABCD: See you.<br>・2回ぐらい紹介したら、役割を交代する。 | ・本人がはっきりと「できる」と言えないものでも、友達に言ってもらいと嬉しいので、積極的に言ってあげるよう促す。<br><br>●友達の「できること」について、簡単に紹介している。<br><コミュニケーション【行動観察】> |
| まとめ | 7. 本時のまとめをする。<br>・ふり返りシートに記入する。                                                                                                                            |                                                                                                                |

## 8. 事後研究会について

### ①成果

- ・新教材を研究することで、来年への意欲につながった。
- ・子どもたちがHe/Sheの違いをわかるような仕掛けをすることができた。
- ・子どもたちが気づくまで、辛抱強く待つことで、より気づきを深めることができた。
- ・ALTと協力として、教材を作ることができた。

### ②課題

- ・他者紹介の時は、しっかりとした場面設定が必要であった。  
→子どもたちに他者紹介をさせる前に、デモンストレーションをして、どんな場面なのかをしっかりと理解させる。
- ・提示する文字を教科書・Hi, friendsの文字と揃えるべきであった。  
→今後、アルファベットを書く指導もあるので、常に字体を揃えて提示していく。
- ・単元を通して、I/You/He/Sheの違いをもう少し理解を深める必要があった。  
→単元を終えた後も、授業の初めに三人称を取り扱った復習の時間を設定し定着を図る。

## (5) 実践事例2

### 1. 単元名 小学校6年間の思い出

過去のことを伝え合おう〈6年—Unit 7〉

### 2. 単元目標

- ・過去の表現の仕方が分かる。世界の学校生活の様子から日本との相違点や共通点に気付く。  
(知識・理解)
- ・学校行事について簡単な語句や基本的な表現で話される英語を聞いて、その概要をとらえたり、簡単な語句や基本的な表現を用いて心に残っている学校行事について自分の考えや気持ちを伝え合ったりする。学校行事について簡単な語句や基本的な表現で書かれた英語を推測しながら読んだり、例を参考に簡単な語句や基本的な表現を用いたりする。  
(思考力・判断力・表現力)
- ・思い出の行事について伝え合おうとしたり、書かれたものを読んだりしようとする  
(学びに向かう力・人間性)

### 3. 指導にあたって

本学級の児童は、5年生からの外国語活動の中で、ALTとHRTとの英語のやり取りを聞いて内容を推測したり、友だちと英語を使ってコミュニケーションをとったりする活動に取り組んできた。事前のアンケートによると、「外国語の授業は好きか」という問いに対して約94%の児童が「好き」「どちらかといえば好き」と答えている。好きな理由としては、「英語のゲームをして学べるから」「あまり仲良くない子とでも英語でしゃべれるから」「身近な言葉を英語で話せるから」などが挙げられた。しかし、「英語は好きか」という問いに対しては、「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童は約76%にとどまった。このことから、授業でのゲームや友だちとのコミュニケーションに楽しさを感じているが、中には英語を話すことや聞くこと自体への楽しさは感じられていない児童もいるということが分かる。さらに、「アルファベットを書くことは好きか」という問いに対して、「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童が約64%であったことから、英語を書くという活動は、英語を話したり聞いたりする活動に比べて抵抗を感じているといえる。

本単元は、6年生の後半に実施することを想定している。小学校生活の終盤、つまり6年間のまとめの時期での学習を考えたとき、小学校生活を振り返り、思い出に残る出来事や行事を題材とすることについては、過去形を用いる必然性がでてくる。また、小学校で経験したことという、「日常生活に関する身近で簡単な事柄」について聞いたり話したりすることは、学習指導要領の目標にも合致している。ただし、転入生や家庭の事情による行事の欠席など、子どもが経験したことには個人差があるため、これについては必要に応じた配慮が必要である。以上のことを踏まえたうえで、本単元では、過去の表現がわかり、小学校生活を振り返って思い出に残った行事やしたこと、感想などについて伝え合うこと、また、それらについて書かれたものを読むことを目標としている。なお、過去形を初めて用いるため、規則動詞のように語形変化が複雑な動詞ではなく、1つの単語として覚えやすい不規則動詞を中心とする、went, ate, saw, enjoyed, was を過去に関する言語材料として取り扱う。

本単元では、中学校でも多用する過去形や気持ちを表す言語材料を扱う。小中連携の視点からも、これらの語や表現に十分慣れ親しませ、コミュニケーションの目的を明確にした活動を行うことで、英語学習に対する意欲を高め、今後の学習にスムーズにつながることが求められる。

指導にあたって、本単元の最終目標を「心に残る学校行事を伝え合おう」とし、その活動に必要な単語や表現を、系統立てて学ばせたい。児童が最終目標の見通しが持てるように、毎時間の授業で、ALTとHRTが心に残る学校行事についてインタビューし合う様子を映したVTRを見せるようにする。新しい表現はゲームを通して楽しく取り入れていきたい。取り入れた表現は、【インタビューゲーム】で実際に友だちと伝え合う場を設定し、ゲームで学ぶ楽しさだけでなく、英語を話したり聞いたりできる楽しさを味わわせたいと考える。これまでに習った表現に、毎時間1文ずつ増やしていくことで、繰り返し同じ表現を使うことができ、単元後半には、英語を使うことを苦手と感じている児童が自信を持って話せるようになることを考える。また、単元全体を見通せるActivity sheetを用意する。授業の始めに、授業のめあてを確認し、自分のめあてを設定することで、それぞれの目標を持って学習に臨むことができるようにする。また、授業の振り返りは、学習で気付いたことや分かったことなどを書くように促し、児童の意欲の継続と自己評価の手立てとする。

と共に、評価としても活用したい。本単元で取り入れる言語材料は、音としてだけでなく文字としても提示するようにする。英語の文字に慣れていくことで、耳からの情報の補助となり、書く活動への抵抗を少しでも減らせると考える。

#### 4. 単元の評価規準

| コミュニケーションへの<br>関心・意欲・態度                                     | 外国語への慣れ親しみ                                                                                                     | 言語や文化に関する気付き                                                    |
|-------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| ・思い出の学校行事について、自分の考えや気持ちを伝えようとしたり、友達の思い出の学校行事を聞き取ろうとしたりしている。 | ・簡単な語句や基本的な表現を使い、心に残っている学校行事について自分の考えや気持ちを伝え合っている。<br>・音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や表現で書かれたものの意味が分かり、必要な情報を選んで書き写すことができる。 | ・色々な国の学校生活や学校行事の様子から日本との相違点や共通点に気づいている。<br>・現在形と過去形の相違点に気付いている。 |

#### 5. 単元で扱う語彙・表現

What's your best memory? My best memory is ～. school trip , field trip  
amusement park , sports festival , music festival , entrance ceremony ,  
I went to ～. I ate ～. I saw ～. I enjoyed ～.

It was fun. It was beautiful. It was yummy. It was cool. It was great.

#### 6. 単元計画(全5時間)

【コ】コミュニケーションへの関心・意欲・態度

【慣】外国語への慣れ親しみ

【気】言語や文化に関する気付き

| 時 | 目標(◆)と主な学習活動(【】○)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | 評価    |   |                                                                                 |
|---|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|---|---------------------------------------------------------------------------------|
|   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | 評価の観点 |   | 評価規準<br>〈方法〉                                                                    |
|   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | コ     | 慣 |                                                                                 |
| 1 | <p>◆学校行事について簡単な語句が分かる。世界の学校行事を知り、日本との相違点や共通点に気付く。</p> <p>○単元のゴール(VTR)を見て、学習の見通しを持つ。</p> <p>○写真や映像を通して世界の学校行事を知る。</p> <p>【キーワードゲーム】</p> <p>ペアを作り、真ん中に消しゴムを置く。学校行事の語句の中からキーワードを決め、様々な語句を言っていく中で、キーワードの語句を言ったら素早く消しゴムを取る。</p> <p>school trip/field trip/art festival /sports festival/music festival/out door school/entrance ceremony</p> <p>○Activity sheet を書く。</p> |       |   | <p>○</p> <p>・色々な国の学校生活や学校行事の様子から日本との相違点や共通点に気づいている。</p> <p>〈Activity sheet〉</p> |

|           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |  |   |   |                                                                                                                              |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|---|---|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2         | <p>◆簡単な語句や基本的な表現を用いて心に残っている学校行事についての尋ね方や答え方を知る。</p> <p>○思い出について英語で尋ねたり答えたりする。</p> <p>【Let' s chant!】</p> <p>写真を見ながら、リズムに乗せて行う。</p> <p>【思い出ビンゴ】</p> <p>“What' s your best memory?” と全員で聞き, “My best memory is～.” と1人が答える。答えられた行事を自分で作ったビンゴに書いていけば, ○をする。</p> <p>【Let' s Talk! インタビューゲーム】</p> <p>～思い出ランキングを作ろう～</p> <p>友だち同士で学校行事について聞き合う。</p> <p>“What' s your best memory?”</p> <p>“My best memory is ～.”</p> <p>○VTRを見て学習内容を振り返る。</p> <p>○Activity sheet を書く。</p>                                                                                                                                        |  | ○ |   | <p>・簡単な語句や基本的な表現を使い, 心に残っている学校行事について自分の考えや気持ちを伝え合っている。</p> <p>〈行動観察〉</p>                                                     |
| 3<br>(本時) | <p>◆「行く」「食べる」「見る」「楽しむ」の過去の表現の仕方を知る。</p> <p>○絵カードや場面絵を見ながら, 「行く」「食べる」「見る」「楽しむ」の過去形での表現に慣れる。</p> <p>【Let' s chant!】</p> <p>写真を見ながら, リズムに乗せて行う。</p> <p>【過去形カルタ】</p> <p>過去形の動作と絵, 現在形が描いてあるカード4種類を8枚ずつ用意し, そのカードをグループの真ん中にバラバラに置く。教師が過去形を使った文章を読み, 児童はその文章で使われた絵カードをすばやく取る。獲得した枚数が多い人が勝ち。</p> <p>○心に残った学校行事について使って話す。</p> <p>【Let' s Talk! インタビューゲーム】</p> <p>～思い出ランキングを作ろう～</p> <p>友だち同士で学校行事について聞き合う。</p> <p>“What' s your best memory?”</p> <p>“My best memory is ～. I <b>enjoyed</b> ～./ I <b>went to</b> ～./ I <b>ate</b> ～./ I <b>saw</b> ～.”</p> <p>○VTRを見て学習したことを振り返る。</p> <p>○Activity sheet を書く。</p> |  | ○ | ○ | <p>・簡単な語句や基本的な表現を使い, 心に残っている学校行事について自分の考えや気持ちを伝え合っている。</p> <p>〈行動観察〉</p> <p>・現在形と過去形の相違点に気付いている。</p> <p>〈Activity sheet〉</p> |



|   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |   |   |  |                                                                                                                                                    |
|---|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|---|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4 | <p>◆過去の自分の考えや気持ちの表現の仕方が分かる。</p> <p>○これまで経験した学校行事の写真を写し、その時の気持ちを表現する。</p> <p>【Let' s chant!】</p> <p>写真を見ながら、リズムに乗せて行う。</p> <p>○心に残った学校行事について使って話す。</p> <p>【気持ち当てゲーム】</p> <p>5種類の気持ちの絵と単語が書かれたカードを1人が周りの人に見えないように引き、自分がその気持ちになった時のことを言う。周りの人は、どんな気持ちなのかを当てる。始めは全員で行い、その後は班で行う。</p> <p>【Let' s Talk! インタビューゲーム】</p> <p>～思い出ランキングを作ろう～</p> <p>友だち同士で学校行事について聞き合う。</p> <p>“What' s your best memory?”</p> <p>“My best memory is ～. I enjoyed ～. / I went to ～. / I ate ～./I saw ～. It was <b>fun</b>. / It was <b>beautiful</b>. /</p> <p>It was <b>great</b>. / It was <b>cool</b>. / It was <b>yummy</b>.”</p> <p>○VTRを見て、学習したことを振り返る。</p> <p>○Activity sheet を書く。</p> | ○ |   |  | <p>・思い出の学校行事について、自分の考えや気持ちを伝えようとしたり、友達の思い出の学校行事を聞き取ろうとしたりしている。</p> <p>〈行動観察〉</p>                                                                   |
| 5 | <p>◆「My best memory」についての紹介文を作り、その表現に慣れ親しむ。</p> <p>○これまでの学習を踏まえて、簡単な語句や基本的な表現を用いて「My best memory」の紹介文を作る。</p> <p>○6年間の学校行事で心に残っている思い出を、そのときの気持ちを含めて書き写したり、読んだりする。</p> <p>【班対抗 best memory 当てクイズ】</p> <p>班で回答者1名出てきてペンを囲んで立つ。それとは別に1人、「My best memory」の紹介をする。何を言っているか分かった人がすばやくペンを取り、答える。聞きとれた文章の数だけ班にポイントが入る。</p> <p>○Activity sheet を書く。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | ○ | ○ |  | <p>・思い出の学校行事について、自分の考えを伝えようとしたり、友達の思い出の学校行事を聞き取ろうとしたりしている。〈行動観察〉</p> <p>・音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や表現で書かれたものの意味が分かり、必要な情報を選んで書き写すことができる。</p> <p>〈行動観察〉</p> |

## 7. 本時の展開(3/5)

### (1) 本時の目標

「行く」「食べる」「見る」「楽しむ」の過去の表現の仕方を知る。

### (2) 準備物

教師用絵カード 児童用絵カード VTR Activity sheet

### (3) 本時の展開

|     | 児童の活動                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 指導上の留意点                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入  | 1. あいさつをする                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | ・英語学習の雰囲気を作ることにより、本時の学習へスムーズに取り組ませる。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 展開  | <p>2. めあてを確認し、学習の見通しを持つ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>「行く」「食べる」「見る」「楽しむ」の表現を使って過去の出来事を伝えよう</p> </div> <p>3. 【Let's Chant】<br/>絵カードや場面絵を見ながら、「行く」「食べる」「見る」「楽しむ」の過去形での表現に慣れる。</p> <p>4. 【Let's Game! 過去形カルタ】<br/>過去形の動作と絵、現在形が描いてあるカード4種類を8枚ずつ用意し、そのカードをグループの真ん中にバラバラに置く。教師が過去形を使った文章を読み、児童はその文章で使われた絵カードをすばやく取る。獲得した枚数が多い人が勝ち。</p> <p>5. 【Let's Talk! インタビューゲーム】<br/>友だち同士で学校行事について聞き合う。<br/>“What's your best memory?”<br/>“My best memory is ～.”<br/>“I enjoyed ～. / I went to ～. / I ate ～.” / I saw ～.”</p> | <p>・Activity sheet に自分のめあてを書きこませる。</p> <p>・これまでに学習した現在形の表現が過去の表現になると別の言い方になるということに気付かせる。</p> <p>・繰り返し行うことで場面絵と英語表現の認識を一致させる。</p> <p>・児童用カードの表には、苦手意識を持つ子どものために過去形の語句だけでなく、動作を行う絵も載せておく。</p> <p>・裏には現在形の語句をのせておき、過去形と現在形が分かるようにする。</p> <p>・前時で学習した“My best memory is～.”の表現の仕方を復習する。</p> <p>・全体で例文を確認した後、インタビューを行うようにする。</p> <p>・自分の言いたい過去形カルタのカードを持ち、それをヒントに学校行事について言えるようにする。</p> <p>・できるだけたくさんの人とインタビューし合うように声かけする。</p> <p>・分からない語句は日本語で表現してもよいことにする。</p> |
| まとめ | <p>○VTRを見て分かったことを振り返る。</p> <p>○Activity sheet を書く。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | <p>・過去形の表現を聞きとれたかを確認する。</p> <p>・めあてにそった振り返りをさせる。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |

## 8. 事後研究会について

### ①成果

- ・過去形カルタは、同じ種類を何枚か用意していたので全員がカードをとるチャンスがあったよかった。
- ・過去形カルタのあとのインタビューゲームで子どもたちがしっかりと学習した英語を使って話すことができていた。
- ・過去形を教師が一方的に教えるのではなく、教師の過去形を使った文章を子どもが聞いて今までと単語が違うということに気付く、そこから過去の表現の仕方を学ぶことができたのはよかった。前の単元で学習したことが活かされていた。
- ・クラスルームイングリッシュがよくできていた。
- ・VTRを利用して学習の振り返りができたのがよかった。次回の学習の見通しにもなる。

### ②課題

- ・もう少し全体で練習してからインタビューゲームに入った方がスムーズにインタビューできたと思う。
- ・複数形のSについては、子どもに指導する必要はないが、教師は正確に取り扱うべきであった。
- ・過去形の導入部分は全て英語で話していたが、子どもが過去形になると表現が変わると気付いたら、日本語を使って説明してもよかった。その方がしっかりと伝わると思う。

## (6) 授業実践のまとめ及びアンケート考察

本年度においては研究テーマのもと、三人称及び過去形の表現における指導の在り方について、先生方に、より具体的なイメージをもってもらえるよう、提案授業を行った。公開授業及び事後研究会後のアンケートの結果によると、公開授業について、【満足できる内容であった(参考になった)】と答えた人数は全体の72%、【やや満足できる内容であった(やや参考になった)】と答えた人数が全体の25%となり、合計で出席者全体の97%の先生方が、三人称および過去形の表現を指導する際におけるヒントになった、という結果を得ることができた。(資料1参照) また先生方の感想からも、

### ○公開授業について

- ・児童に配布したワークシートに、自然に英語がのってあり、メモに英語のスペルで記入している児童の助けになっていたと思った。児童の「書きたい」という意欲を引き出すのに効果的だと感じた。
- ・過去形をどう教えるのか、考えたことはなかったが、今日の授業を機会に、過去形をどう教えていくかと言うことを考え、アイディアをたくさんいただいた。
- ・授業の最後に、教師とALTとが、英語でやり取りしたVTRを見せて、発音を聞き取れたか確認する工夫が参考になった。
- ・教師が積極的にクラスルームイングリッシュを使って指導する姿が印象的だった。また子どもたち同士でも、簡単な英語をつかってやり取りする場面が見られ、感心した。

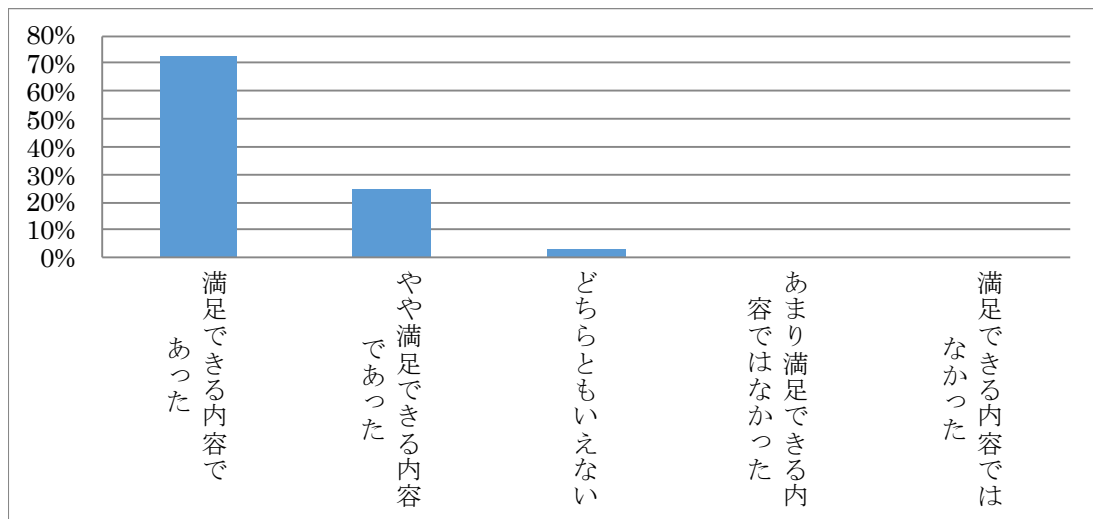
### ○事後研究会について

- ・ALTの先生方のご意見を聞かせていただいて、「なるほど!」と思うことがたくさんあった。グループ討議が有意義な時間となった。
- ・学校現場で、教科化に向けて必要なことが分かった。今後活かしていきたい。

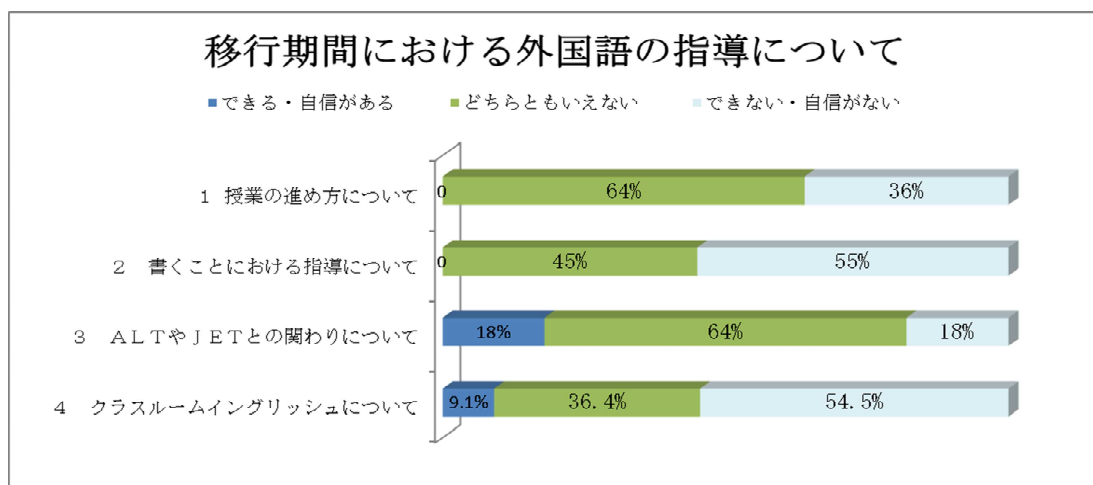
という意見をいただくことができた。

こういったことから、来年度以降3・4年生から外国語活動が始まるにあたり、これまで外国語活動を指導する機会がなかった教員や、新しく取り扱われる内容について指導イメージを持つことができにくかった教員にとって、一つの指標となるような提案性のある単元計画及び公開授業になったと考える。

しかし一方で、来年度からの移行期間における外国語活動の指導について、アンケートの結果によると、全体的に【できない・自信がない】と回答された先生が多かった。（資料2参照）特に、書くことにおける指導について【できない・自信がない】と答えた割合が全体の55%、クラスルームイングリッシュについて【できない・自信がない】と答えた割合が54.5%と高く、その点において、教員の多くが不安に感じていることが明らかになった。このような結果を受けて、今後は『魔法のシート』を活用し、文字指導における効果的な指導法をさらに探っていくことや、クラスルームイングリッシュについては、例えばゲームのルール説明の際には英語で説明するところから始めるなど、教員・児童ともに無理がないように、段階的に取り入れていくことが重要となる。



【資料1 公開授業における授業内容についての満足度アンケート】



【資料2 移行期間における外国語の指導に関するアンケート】

#### 4 専任講師による提言『移行期に臨むための構え』

関西大学外国語学部 今井裕之

2017 年度を通して、本研究部会で取り組んできた課題のひとつが、教科化までの移行期間(2018-2019)を、児童たちにとっても、教員にとっても、無理のない移行にするためにどうするかということであった。

もちろんそれは困難な課題に違いなく、どんな対応策も十分とは言えないのが現実だが、少なくとも、2018-2019 年度の二年間をへて、新学習指導要領の本実施となる 2020 年の教育課題がなくなのかについて見通しを教員間で共有しておく必要があるだろう。

表 移行期間の時数と教材

|          | 2018                          | 2019                          | 2020                |
|----------|-------------------------------|-------------------------------|---------------------|
| 3 年<br>生 | 15 時間<br>Let's Try 1          | 15 時間<br>Let's Try 1          | 35 時間<br>Let's Try1 |
| 4 年<br>生 | 15 時間<br>Let's Try 2?         | 15 時間<br>Let's Try 2          | 35 時間<br>Let's Try2 |
| 5 年<br>生 | 50 時間<br>Hi Friends & We Can1 | 50 時間<br>Hi Friends & We Can1 | 70 時間<br>検定教科書      |
| 6 年<br>生 | 50 時間<br>Hi Friends & We Can2 | 50 時間<br>Hi Friends & We Can2 | 70 時間<br>検定教科書      |

移行期間 2 年目にはさらに時数を増やす見込みもあるように聞けるが、いずれにせよ、2018 年度の 3, 4 年生たちが、2020 年の本実施年に大きなジャンプ(本実施に比べて移行期間は 2 年間合計 40 時間分少ない)をしなくてはならない移行措置になっている。その「ジャンプ」に備えるべく、本年度は教材研究および研究授業を行った。研究授業では、新学習指導要領で、新たに追加される言語項目である「過去形」と「3人称代名詞 he, she」の導入授業を行った。研究授業を観察された教員の方々には、「文法を指導する」のではなく「児童たちにとって意味のある言語活動を通して、文法的に(も)適切な発話、やりとりができる」ことを目標にした授業展開、指導方法について学べたのではないかと思う。

移行期間は小学校だけの問題ではない。中学校でも 2021 年度の新課程実施の年に起こる「ジャンプ」に備える必要がある。到達目標があがる一方で、時間数は変わらず、新入生の小学校での学習量が異なる 2019-2020 年にどう取り組むかが大切である。兵庫県では『はば単』を作成するなどの積極的な取り組みが行われているが、これらを授業中の言語活動に関連づける等の工夫が、新課程の掲げる目標の具現化につながるだろう。

今年度の研究を通して、明らかになってきた成果と課題を次年度からの移行期間に役立ててもらえたらと思う。学習内容が大幅に増え、小学校での文字指導、文法指導を重荷に感じることもきっとあると思われるが、「文法覚えて、単語覚えて、練習して」といった昔ながらの手順に戻るのではなく、先生がたの研究授業で示されたように、これまで外国語活動の実践で培ってきた「言語活動を学びの目標であると同時に学びの手段とする指導法」を維持しながら文法や語彙を導入できる、すべきであるということ、移行期に臨むにあたって再確認、強調したい。

## 5 終わりに

本年度、外国語・英語科教育研究部会をすすめ、その研究成果を具体的に知ってもらうことの一つとして、5年生及び6年生において公開授業を行った。事後研究会後の教師アンケートの中で、「中学校の先生や、ALTからの意見がとても参考になった」といったことや、「小学校と中学校では授業を見る視点が異なり、興味深かった」などといった意見が多数出ており、意見交流する機会を設けることがよかったと感じると同時に、これからの小・中連携の必要性を強く感じた。小学校、中学校の各先生方からも、「もっと小中連携をすべき」との声を多数いただいている。しかし学校現場において、小学校・中学校の外国語・英語科担当教員が意見を交流する場はまだ整えられていないのが現状である。小・中連携を進めるためのヒントとして、東京学芸大学講師 臼倉 美里氏は、「連携の為にまず必要なことは、お互いを知ることである。中学校の先生方が小学校での取組を、小学校の先生方が中学校での取組を知ることから連携がはじまる。」と述べている。前年度の外国語活動研究部会において、小学校・中学校の先生方が力を合わせて、『魔法のシート』を作成した。また今年度の外国語・英語科教育研究部会においては、小学校・中学校の先生が、小・中学校の次期学習指導要領の内容を読み解き、それぞれの視点において共に意見を出し合い、来年度からの移行期間における一つの指標となる、単元計画及び学習指導案の作成に至った。少しずつ下地はできつつある。次期学習指導要領の実施を一つのきっかけとし、今後、尼崎における児童・生徒のより良い学びの為に、外国語・英語科教員における小学校と中学校のさらなる連携体制を整えていきたい。

### 【 参考・引用文献 】

- ・「小学校英語の教科化を見据えた小中連携のための工夫」  
(東京学芸大学講師 臼倉 美里)
- ・「次期小学校学習指導要領解説外国語編」  
(文部科学省 2017)
- ・「英語教育の在り方に関する有識者会議」  
(文部科学省 2014)

## 家庭学習支援事業について（報告）

指 導 員 藤 井 俊 史

### 【内容の要約】

本市においては、全国学力・学習状況調査の結果から家庭学習の時間が不足しており家庭学習の充実と学習習慣の定着が大きな課題となっている。

このことから、昨年度より市内の児童・生徒の確かな学力の定着を目的として、ICTの利点を活かした家庭学習を推進することにより、児童・生徒の学習習慣の定着を図り、学力向上を目指すために本事業を始めた。

今回はこの事業の中で市内中学校2校をモデル校として指定し、平成26年9月より市内全中学校に導入され運用が開始された学習支援ソフト（eライブラリ）を活用して、自主学習を継続的に支援する。また、その効果や課題を明らかにするために、研究スタッフを配置し、学習支援の研究を進める。さらに、成果等を市内全中学校へ発信することを目的としており、この報告は2年間にわたる2校の取り組みをまとめたものである。

キーワード： 教育の情報化，中学校，学習支援ソフト（eライブラリ）  
eラーニング，コンピュータ，インターネット，

- 1 事業の概要
- 2 実践事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- （1） 実践事例1（A中学校）・・・・・・・・・・・・・・・・
- （2） 実践事例2（B中学校）・・・・・・・・・・・・・・・・
- 3 おわりに（研究のまとめ）・・・・・・・・・・・・・・・・

## 1 事業の概要

- (1) 実施期間 平成28年度および平成29年度
- (2) 事業モデル校 尼崎市内中学校2校
- (3) 家庭学習支援スタッフ ボランティア配置(各校2名)
- (4) 実践内容

平成26年9月より市内全中学校に導入され運用が開始された学習支援ソフト(eライブラリ)を活用した自主学習を継続的に支援する。また、その効果や課題を明らかにするため、家庭学習支援スタッフを配置し、ICTを活用した家庭での自主学習をサポートする。

## 2 実践事例

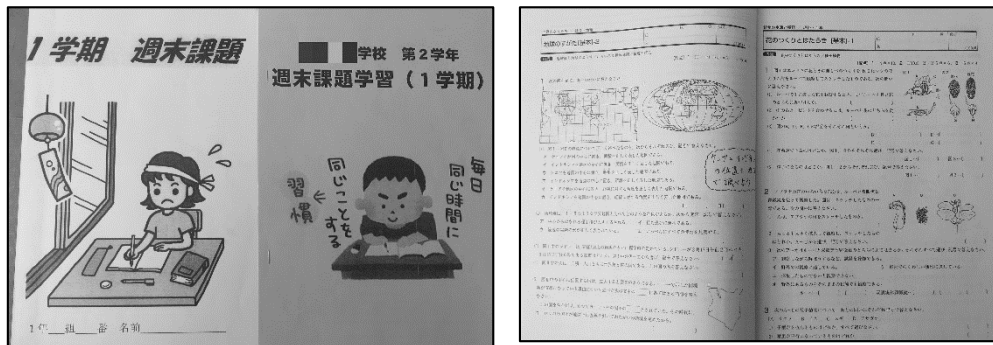
### (1) 実践事例1 (A中学校)

#### 1. 実践の概要

- (1) 実践期間 平成28年度および平成29年度
- (2) 実践の対象 A中学校在籍全生徒
- (3) 実践内容

ア eライブラリを活用したプリント週末課題冊子の取り組み

家庭学習支援スタッフのサポートにより、全校生徒に向けたプリント週末課題冊子を印刷準備し、毎週月曜日に全生徒分提出チェックと返却を行う。提出の有無や取り組み内容等を確認し、その後未提出者等について学級担任や教科担当に連絡をおこない、生徒に提出を促す。また新たな課題冊子の印刷・配布を実施する。



【eライブラリのプリント機能を活用した週末課題冊子】

#### イ EFS(放課後学習クラブ)の取り組み

家庭学習支援スタッフのサポートにより、毎週火曜日の放課後にコンピュータ室でeライブラリを利用した学習活動を実施する。



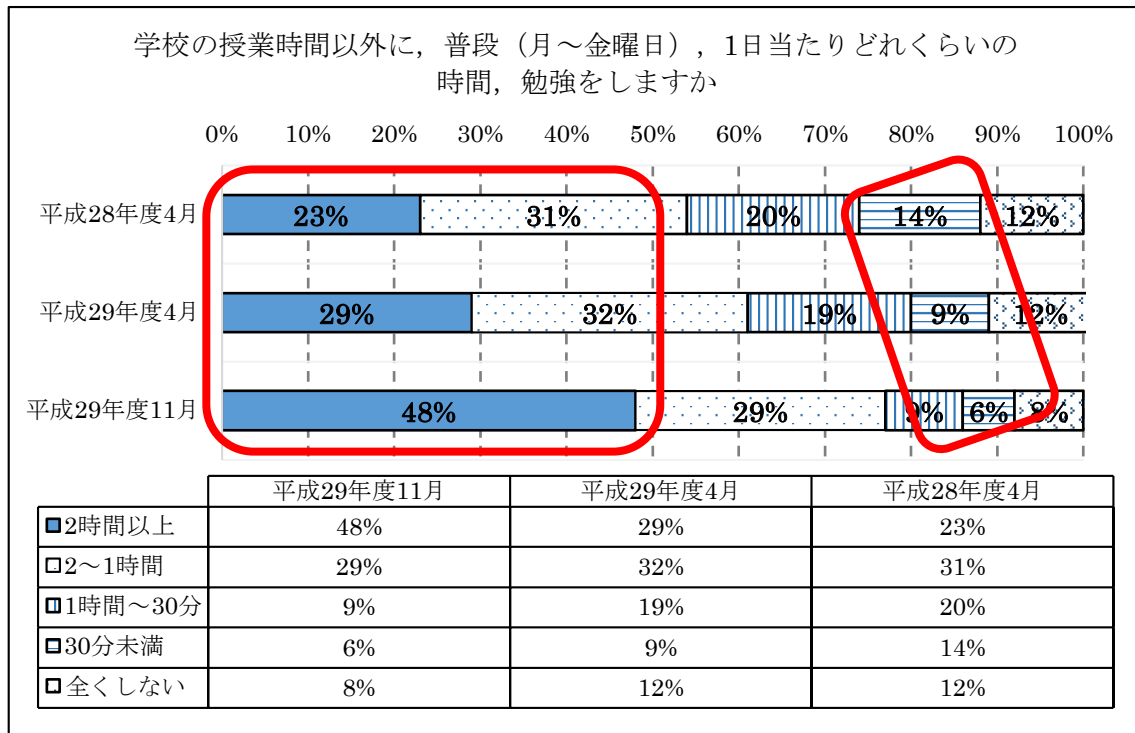
【EFSクラブでeライブラリを利用した学習活動の様子】



## 2. 実践結果の概要

### (1) 全国学力・学習状況調査の結果

本事業が始まった平成28年度4月から平成29年度11月での全国学力・学習状況調査質問紙調査の調査結果等をもとに、家庭学習の時間を経年で比較した。



【A 中学校における普段の家庭学習時間の変化】

○平成28年度から平成29年度までの普段における家庭学習時間は、「2時間以上学習する生徒」の割合が増加した。さらに、「30分未満の学習時間生徒」の割合が減少した。また、休日における学習時間についても、平成28年度4月の「1時間未満の学習時間の生徒」が、約60%割程度だったのが、平成29年度11月では約40%割程度に減少している。週末課題冊子を2年間継続して取り組むことで、生徒にとって宿題ではあるが、家庭学習を習慣化するための手段として一定の効果があったと考えることができる。

また、週末課題の提出状況は平成28年度の1学期は、提出率は90%程度であったが、平成29年度の2学期では、97%という提出率と改善された。学年によっては全員が提出した週もあった。提出率の改善の背景には、学習支援スタッフと学級担任との連携や、教科担当や各学年で継続的な指導がこの改善に効果的な結果になったと考えられる。このため、eライブラリを活用することは、1つの効果的なツールであって、学校として支援スタッフと教員との連携も重要になってくると考える。

## (2) 放課後学習(EFS クラブ)

平成28年度は参加する生徒が数名であったが、学校の組織的な取り組みにより、平成29年度は30名程度の生徒が参加した。主な活動内容は、個人でのeラーニングやプリント学習、テスト前にはeライブラリの問題データベースからテストに向けて予想問題等を作成した。平成29年度のみ参加した生徒の振り返りのなかには、「放課後学習に参加することで、家庭でeライブラリに取り組むようになった。」や「来年度も参加したい。」というような家庭学習へと繋がる意見があった。さらに、放課後学習に参加した生徒(2年生・3年生)の家庭学習の時間について、平成28年度10月と平成29年度12月に行ったアンケート調査から家庭学習時間を比較すると、半数の生徒は学習時間が増加したことがわかった。さらに、放課後学習への出席率が良い生徒に着目すると、以前は家庭学習を全くしなかった生徒がいたが、学習を進めるにつれて、家庭学習を全くしない生徒はいなくなった。以上の結果から、放課後学習へ生徒が参加することで家庭学習に取り組むきっかけになったと考えられる。

## (3) 週末課題に関するアンケート調査から

平成28年度10月と平成29年度12月に週末課題に関するアンケート調査を実施した。主な質問項目は、週末課題に関する難易度・かかった時間や家庭での学習時間等をたずねるものであった。平成28年度に実施したアンケート調査の結果を反映させ、3教科でおこなっていた課題を5教科にして課題の分量を増やした。また、課題の内容と関連した小テストを授業中に実施し、それによって定着度を測り、その後の課題を作成した。このように生徒の実態を把握し、週末課題に対する取り組みを改善した。この結果、週末課題の難易度に関する項目で、平成28年度では、「やや難しかった」・「難しかった」と回答した生徒が約6割であったが、平成29年度は、「ちょうどよかった」と回答した生徒が6割以上であった。さらに「週末課題に取り組んで良かったことはありましたか？」という質問項目に対して、「苦手教科に取り組む機会となったこと」と回答した生徒もあり、効果的な活用につながったと考えられる。また、A中学校は全国学力・学習状況調査結果において、国語・数学の平均正答率と全国平均正答率との差が縮まった。このことは、週末課題の内容改善が1つの要因と考えることができる。

## (2) 実践事例2 (B 中学校)

### 1. 実践の概要

(1) 実践期間 平成28年度および平成29年度

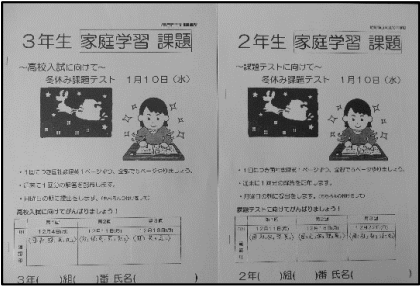
(2) 実践の対象 B 中学校在籍全生徒

(3) 実践内容

ア eライブラリを活用したプリント家庭学習課題の取り組み

家庭学習支援スタッフのサポートにより、各定期考査や実力考査等の約1ヶ月前から全校生徒に向けたプリント家庭学習課題冊子を印刷準備し、毎週月曜日に全生

徒分提出チェックと返却をし、その後未提出者のことなので担任への連絡を行う。このような担任との連携をふまえた上で、また新たな家庭学習課題冊子の印刷・配布を実施している。



【e ライブラリを利用した家庭学習用冊子】

イ コンピュータ室を利用した放課後学習の取り組み  
家庭支援スタッフのサポートにより、希望登録制の放課後学習を毎週月曜日と木曜日の放課後にコンピュータ室を開放して e ライブラリを利用した学習活動を実施する。

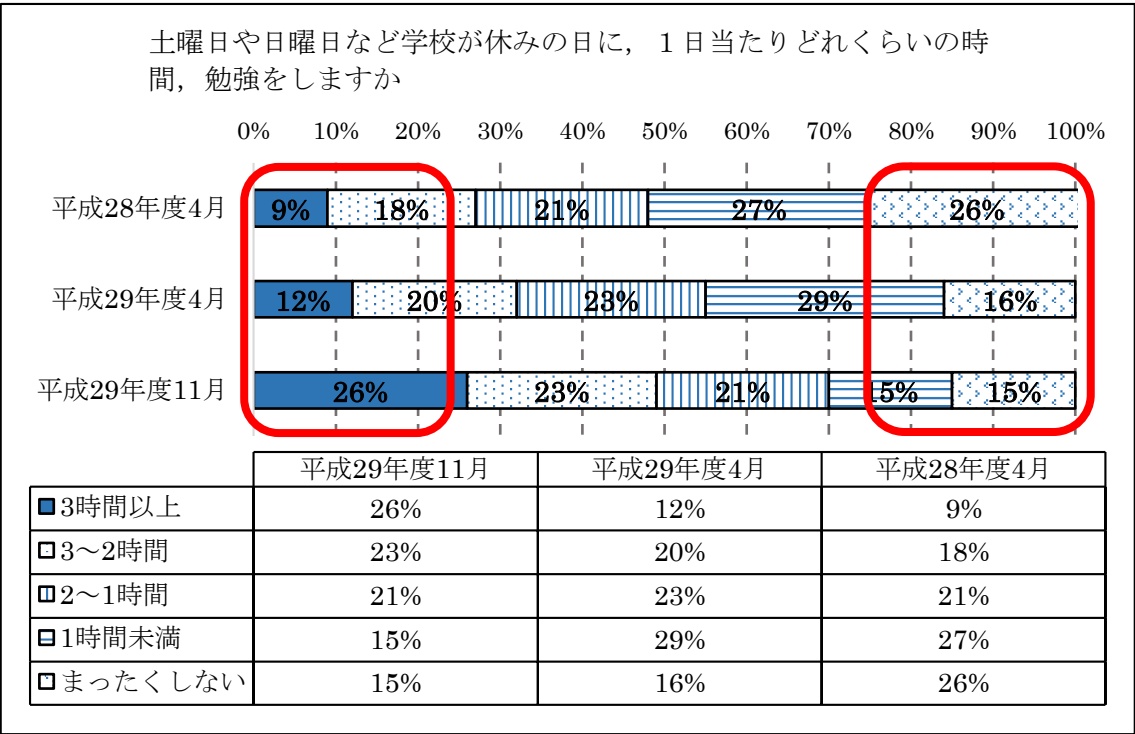


【放課後学習の様子】

## 2. 実践結果の概要

### (1) 全国学力・学習状況調査の結果

本事業が始まった平成28年度4月から平成29年度11月での全国学力・学習状況調査質問紙調査の調査結果等をもとに、家庭学習時間を経年で比較した。



【B 中学校における休日の家庭学習時間の変化】

○休日における家庭学習の時間を経年で比較すると「3時間以上学習する生徒」の割合が増加し、「1時間未満の生徒」の割合は減少した。そして、平日の学習時間に関しては、「2時間以上学習する生徒」の割合は増加したが、「まったくしない」生徒の割合に変化がみられなかった。

また、「家で、自分で計画を立てて勉強していますか」という質問項目に対し、「している」と回答した生徒の割合は平成28年度4月は約4割であったのに対して、平成29年度11月には約6割となった。

## (2) 放課後学習

放課後学習に参加した生徒(2年生・3年生)の家庭学習時間について平成28年度12月と平成29年度12月のアンケート調査から時間の増減を比較すると、家庭学習の時間が減少した生徒は少なく、ほとんどの生徒が約20分程度増加した。A中学校と同様に放課後学習に参加することが家庭でも学習に取り組むためのきっかけとなったと考えられる。

## (3) 家庭学習課題の取り組み

平成28年度は全校生徒が通る廊下に棚を設置し、1年生から3年生までの数学と英語のプリントを入れて、誰でも持って帰ることができる取り組みを行っていた。しかし、持ち帰っている生徒を特定できないことや、実際に家庭でプリントに取り組んでいるのかどうか把握ができなかった。このため、平成29年度は定期考査や実力考査等の約1ヶ月前から全校対象に家庭学習冊子を作成し取り組んだ。この成果を検証するため、家庭学習冊子の提出率が高い生徒と、提出率が低い生徒を抽出し、それぞれの一学期中間考査の点数の平均と二学期期末考査の点数の平均を学年平均との差を比較した。その結果を表に示した。

|             |                       | 一学期中間考査<br>(学年平均:329.8点) | 二学期期末考査<br>(学年平均:267.2点) | 増 減          |
|-------------|-----------------------|--------------------------|--------------------------|--------------|
| 一<br>年<br>生 | 提出率が高い生徒<br>(抽出人数52人) | 学年平均との差<br>+57.5(点)      | 学年平均との差<br>+81.1(点)      | +23.6<br>(点) |
|             | 提出率が低い生徒<br>(抽出人数40人) | 学年平均との差<br>-53.5(点)      | 学年平均との差<br>-69.3(点)      | -15.8<br>(点) |

(※学年全体人数164人)

|             |                       | 一学期中間考査<br>(学年平均:285.8点) | 二学期期末考査<br>(学年平均:287.2点) | 増 減     |
|-------------|-----------------------|--------------------------|--------------------------|---------|
| 二<br>年<br>生 | 提出率が高い生徒<br>(抽出人数61人) | 学年平均との差<br>+42.6(点)      | 学年平均との差<br>+46.8(点)      | +4.2(点) |
|             | 提出率が低い生徒<br>(抽出人数17人) | 学年平均との差<br>-59.3(点)      | 学年平均との差<br>-64.8(点)      | -5.5(点) |

(※学年全体人数155人)

【提出率が高い生徒と提出率が低い生徒の学年平均点との差】

この表から、1年生では家庭学習冊子の提出率が高い生徒は学年平均との差が23.6点増加し、家庭学習冊子の提出率が低い生徒は学年平均との差が15.8点減少した。さらに、2年生でも同様の結果がみられた。継続して取り組むことがテスト前ではあるが学習習慣が定着してこのような結果につながったと考える。

また、アンケート結果から約6割の生徒は家庭学習冊子がテスト勉強に役立ったと回答した。テストに向けて学習意識が高い時にスタートとしたことで家庭学習へ取り組みやすいタイミングだったので効果があったと考える。今後の課題としては、この学習冊子の内容がそれぞれ生徒の学習理解に適した課題として取り組ませることで生徒一人一人の学習の質を向上させることを考えなければいけない。

さらに、この取り組みを、どのようにして普段の家庭学習への定着とつなげていくのかを検討していく必要もある。

### 3 おわりに(研究のまとめ)

今回取り上げた2校は家庭学習支援事業以外でも様々な取り組みを実施している。様々な取り組みの1つとしてeライブラリを活用することが、家庭学習の時間や学習習慣に一定の効果があったと考える。eライブラリを活用した生徒のアンケートの中に、「復習をする良い機会となった。」や「今までは、家庭で勉強をしなかったけど、これがあることで少し勉強するようになった。」や「わからない問題を自分自身が理解することができた。」といった声があり、課題に取り組むことが有用だと感じている生徒が多くいることがわかる。その一方で、計画的に課題をこなす宿題が成績の向上に関係していると認識している生徒もいる。この認識を生徒の自主的な取り組みへと変えていくためにも、それぞれの学習定着に合わせた課題を生徒自身で見通しをもって取り組ませることが、今後必要となってくるのではないかと考える。具体的な方策として、eライブラリのプリント機能には、基本・標準・発展の3段階に分けてプリントが用意されている。授業の終わりでおこなう本時の振り返り等を活用し、授業内容の理解の度合いに応じたプリントを生徒自身が選択し家庭に持ち帰り取り組む。さらには、授業カリキュラムとeライブラリを関連づけた表を作成する。一覧表と、自らの学習計画や授業の進行状況等を照らし合わせ確認しながら予習や復習を行うことができるというものである。このような取り組みが次期学習指導要領でいう「育成すべき資質・能力」へとつながっていくと思われる。しかし、これを実施するためには、学校の教員だけでは負担が大きい。このため、今回のような支援員を学校の実態に応じてどのように活用するのか、また、教員や生徒あるいは保護者との連携をどのように図っていくべきか等を模索していく必要があると考える。

今回は研究実践校として2校が本事業に取り組んだが、今後尼崎市として、家庭学習時間の確保と学習習慣の定着を図るためにも、取り組み事例や成果・課題等についてその他の中学校にも拡充していく必要がある。

本年度、支援員が配置されていない学校で担任の先生がクラスの生徒を対象に週1回コンピュータ室を利用してeライブラリで自主学習を行った後、それぞれの学力に応じたプリント課題を家庭に持ち帰らせたりして、家庭学習の充実を図る取り組みを行った学校があった。その結果、家庭学習をまったくしない生徒が減少し計画的に勉強できる生徒が増加し

た。このように学校によって指定校にあるような支援スタッフの配置がない場合でも、市内でも多くの学校が実施している放課後学習をコンピュータ室でも実施し、教員と連携し補助員をうまく活用する方法も1つとして考えられる。

最後に、本研究は市内中学校生徒の家庭学習の推進と、それに伴う教員の負担軽減の2点を両立させる目的で取り組んできた。今回2校のモデル校では、全校生徒がeライブラリを活用したプリント課題に取り組むスタイルと、コンピュータ教室を使用し放課後学習でeライブラリ等に取り組むスタイルの2種類をモデルとして効果検証をおこなった。それぞれ学校の状況に応じて取り組みを行ったが、そこで唯一の正解があるとは考えられない。つまりは、学校が意図的・計画的・組織的な教育によって主体的に学び続けることができる生徒を育てることこそが、未来を豊かに生きる姿に繋がっていくのではないだろうか。その一部として本事業が今後活用されるように努めていきたい。

平成 29 年度 尼崎市立教育総合センター

専任講師

|           |     |       |
|-----------|-----|-------|
| プール学院大学   | 准教授 | 今宮 信吾 |
| 関西大学初等部   | 教 諭 | 尾崎 正彦 |
| 大阪教育大学大学院 | 准教授 | 寺嶋 浩介 |
| 鳴門教育大学大学院 | 講 師 | 泰 山 裕 |
| 関西大学      | 教 授 | 今井 裕之 |
| 四天王寺大学    | 教 授 | 杉中 康平 |